

一般国道23号中勢道路建設事業に伴う

位田遺跡発掘調査報告

1999・3

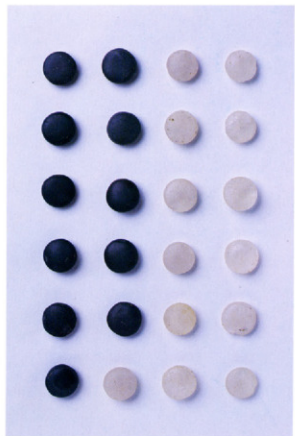
三重県埋蔵文化財センター



A・B地区全景（西から）



SX 6 出土擦石・石皿



SD 4 出土基石

序

鈴鹿や布引・紀伊の山々から発する大小の河川は、肥沃な伊勢平野を潤し伊勢湾に注いでいます。その平野では古来より人々の生活が連綿と営まれ、数多くの遺跡が今日に残されています。中でも津市を流れる安濃川流域には、弥生時代の中心集落である納所遺跡や、6世紀から7世紀の古墳400基以上からなる県内有数の群集墳などがあり、当時の文化の一端を見ることができます。

さて、今回報告する位田遺跡は、一般国道23号中勢道路建設に先立って調査されたものです。遺跡は、安濃川左岸の沖積地に立地する弥生時代後期から鎌倉時代までの長期にわたる複合遺跡です。とりわけ、24個まとまって出土した平安時代の基石は、研究者だけでなく広く県民の間でも注目を集めました。

調査を終えたところには、やがて新しい道路が開通し地域活動の新しい動脈となることでしょう。そのいわば代償として発掘された遺跡の膨大な記録を整理し報告書として世に公開していくことが、私どもに課せられた重大な責務であると考えております。本報告書が地域の歴史を解明する一助となることを念願するところであります。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただきました関係諸機関および地元の皆様にご心からお礼申し上げますとともに、今後とも県民の皆様の文化財保護への一層の御理解と御協力をお願い申し上げます次第です。

平成11年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井 與生

例 言

1. 本書は、三重県津市北河路町字位田・木ノ下・出口・寺後・垣内に所在する位田（いんでん）遺跡の報告書である。
2. 本書は、平成9・10年度に三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受け実施した「一般国道23号中勢道路（10T区）建設予定地に所在する埋蔵文化財発掘調査（整理・報告書業務）」にかかる報告書である。
3. 位田遺跡の発掘調査は、平成8年度に実施した。
発掘調査の体制は、以下の通りである。
 - ・調査主体 三重県教育委員会
 - ・調査担当 三重県埋蔵文化財センター
 - ・調査協力 津市教育委員会
 - ・現場作業 社団法人中部建設協会
4. 位田遺跡の現地調査は、平成元年度の範囲確認調査を浅生悦生・竹内英昭が、平成8年度の本調査を山本義浩・米山浩之がそれぞれ担当した。
5. 本書の執筆・編集は、米山浩之が担当した。
6. 遺構写真は、山本義浩・米山浩之が、遺物写真は米山浩之が撮影した。
7. 案内での報告書作成業務は、市川嘉子・太田浩子・森川紹代・鈴木妙・黒川敬子・蒔田やよい・新田智子のほか資料普及グループ（管理指導課）の協力を得た。
また、調査補助員として、川崎志乃・杉崎淳子・田中美穂・坂下真弓・井早智代・池野香代・下畑典正・酒井じり子が現地調査もしくは整理作業に携わった。
8. 発掘調査ならびにその後の整理過程において、以下の方々のご指導・ご教示を得ました。記して感謝の意を表します。（順不同・敬称略・所属は当時）
青木哲哉（立命館大学）・八賀晋（三重大学）・平尾政幸（小森俊寛 上村憲章（財団法人京都府埋蔵文化財研究所）・尾野善裕（京都国立博物館）・福田明美（財団法人工業界文化財センター）・三好美穂（奈良市埋蔵文化財調査センター）・加藤真琴（多度町教育委員会）・横田賢次郎（九州歴史資料館）・岡田章（皇學館大学）・小坂官広（津市立南が丘中学校）・磯部克（松取高校）浅生悦生（津市立橋北中学校）・増川宏一・久志本鉄也（菟野町立八風中学校）
8. 本遺跡については、すでに『一般国道23号 中勢道路 埋蔵文化財調査概報Ⅹ』として、その調査概要を報告しているが、本書をもって正式報告とする。
9. 本書で報告した遺跡の位置は、国土地院第Ⅵ系に属している。挿図の方位は全て座標北で示している。
なお、真北は座標北のN 0° 21' W、磁北は座標北のN 6° 41' Wである。
10. 本書で使用した遺構の名称・番号は、調査時点の呼称を踏襲せず、新たに改称したものである。
11. 本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
SA：柱列・垣状遺構 SB：掘立柱建物 SD：溝・河道 SE：井戸 SF：炉・晩土炭化物・晩土坑 SK：土坑 SR：道路・通路状遺構 SX：方形周溝竈 P：小穴
12. 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
13. 本書で使用した土層および遺物の色調は、小山・竹原編「新版標準土色帖」（9版1989）を用いたが、緑釉陶器の釉の色調はマンセル方式（JIS）による。
14. スキャニングによるデータ取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I	前 言	
1	調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
3	調査の方法	4
4	調査日誌(抄)	4
II	位置と環境	
1	位置	5
2	歴史的環境	5
III	地形と層序	
1	周辺地形の概要	9
2	遺跡周辺の微地形	9
3	基本層序	10
IV	弥生・古墳時代	
1	河道	15
2	炉	22
3	方形周溝墓	25
4	下層出土遺物	33
5	溝	33
6	土坑	33
V	飛鳥・奈良時代	
1	道路状遺構	39
2	焼土・炭化物集積	39
3	下部出土遺物	39
VI	平安時代	
1	掘立柱建物	43
2	柱列・垣根状遺構	51
3	井戸	54
4	通路状遺構	56
5	溝	56
6	焼土坑	63
7	土坑	64
8	ピット出土遺物	71
VII	その他・時期不明遺構	72
VIII	包含層・その他出土遺物	
1	A・B地区	74
2	C地区	76
IX	考 察	
1	方形周溝墓群の構成と形態	85
2	朱付着の擦石・石皿と祭祀	86
3	道路遺構の性格	87
4	安濃郡の駅路の想定	87
5	屋敷地の変遷と性格	88
	(1)建物群の変遷	91
	(2)特殊遺物について	94
	(3)居住者像とその背景	96
	(4)平安時代末期の集落	96

插图目次

第1图	中勢道路内遺跡位置図	2	物実測図	45	
第2图	周辺遺跡位置図	6	第36图	S B 7 ~ 11、S A 5・6 実測図	46
第3图	明治27年陸地測量部地形図	7	第37图	S B 7 ~ 11、S A 5・6 断面図、遺物実測図	47
第4图	安濃川流域平野地形図	9	第38图	S B 12・13、S K 29、S A 11・12 実測図、遺物実測図	48
第5图	遺跡周辺地形図	10	第39图	S B 14 ~ 16、S K 30 ~ 33 実測図・遺物出土状況図、遺物実測図	50
第6图	調査地区割図	11	第40图	S A 9・10 実測図	52
第7图	遺跡周辺微地形図	11	第41图	S A 7 遺物実測図	52
第8图	基本土層模式図	12	第42图	S E 1 実測図	54
第9图	土層断面図	12	第43图	S E 1 遺物実測図	55
第10图	弥生・古墳時代遺構図	13~14	第44图	S D 4・5 実測図、遺物出土状況図	57
第11图	小地区割図 1	13~14	第45图	S D 4 遺物実測図	58
第12图	S D 1 実測図	15	第46图	S D 5 遺物実測図	59
第13图	S D 1 土層断面図	16	第47图	S D 6 ~ 9 遺物実測図	60
第14图	S D 1 遺物実測図 1	18	第48图	S F 4 遺物実測図	63
第15图	S D 1 遺物実測図 2	19	第49图	S F 4 実測図	63
第16图	S D 1 遺物実測図 3	20	第50图	S K 3・4 実測図、遺物実測図	65
第17图	S D 1 遺物実測図 4	21	第51图	土坑群実測図	66
第18图	S F 1 実測図、遺物実測図	22	第52图	土坑出土遺物実測図	67
第19图	S X 1・3 実測図、遺物出土状況図、遺物実測図	26	第53图	S K 29 ~ 33 遺物実測図	68
第20图	S X 2・4 実測図、遺物出土状況図、遺物実測図	27	第54图	ピット出土遺物実測図	71
第21图	S X 5・7 実測図、遺物実測図	29	第55图	ピット位置図	71
第22图	S X 6 実測図、遺物出土状況図、遺物実測図	30	第56图	S D 11 実測図	72
第23图	S X 8 実測図、遺物出土状況図、遺物実測図	31	第57图	炭化物集積位置図	73
第24图	S X 9・10 実測図、遺物実測図	32	第58图	噴砂実測図・断面図	73
第25图	下層出土遺物実測図	35	第59图	包含層他出土遺物実測図 1	75
第26图	S D 2・3、S K 1・2 実測図	36	第60图	包含層他出土遺物実測図 2	77
第27图	飛鳥~平安時代遺構図	37~38	第61图	包含層他出土遺物実測図 3	78
第28图	小地区割図 2	37~38	第62图	C 地区測量図	79
第29图	S R 1・2 実測図	40	第63图	包含層他出土遺物実測図 4	79
第30图	S R 1・2 断面図、遺物実測図	41	第64图	方形周溝墓分布図	85
第31图	S F 2・3 他遺物実測図	41	第65图	県内方形周溝墓開口方向図	86
第32图	S F 2・3 実測図	42	第66图	安濃郡内官道想定図	88~90
第33图	S B 1 ~ 3 実測図、遺物出土状況図、遺物実測図	43	第67图	屋敷地内遺構変遷図 1	92
第34图	S B 4 ~ 6・S A 1 ~ 4 実測図	44	第68图	屋敷地内遺構変遷図 2	93
第35图	S B 4 ~ 6・S A 1 ~ 4 断面図・遺物実測図	45	第69图	緑釉陶器出土分布図	95
			第70图	北河路集落関係図	97

表目次

第1表	中勢道路内遺跡調査経過表	3	第6表	遺物一覧表 4	36
第2表	遺物一覧表 1	23	第7表	遺物一覧表 5	42
第3表	遺物一覧表 2	24	第8表	掘立柱建物一覧表	51
第4表	方形周溝墓一覧表	34	第9表	柱列・垣根状遺構一覧表	53
第5表	遺物一覧表 3	34	第10表	遺物一覧表 6	53

第11表	遺物一覧表7	55
第12表	出土土器構成表1	59
第13表	遺物一覧表8	61
第14表	遺物一覧表9	62
第15表	遺物一覧表10	63
第16表	出土土器構成表2	64
第17表	土坑一覧表	69
第18表	遺物一覧表11	69
第19表	遺物一覧表12	70

第20表	遺物一覧表13	71
第21表	遺物一覧表14	80
第22表	遺物一覧表15	81
第23表	遺物一覧表16	82
第24表	遺物一覧表17	83
第25表	遺物一覧表18	84
第26表	遺構切合い関係表	91
第27表	緑釉陶器器種・産地一覧表	95

図 版 目 次

P L 1	位田遺跡周辺航空写真
P L 2	A・B地区全景
P L 3	調査区遠景 調査区近景
P L 4	古墳時代遺構全景 飛鳥時代以降遺構全景
P L 5	河道・方形周溝墓群
P L 6	S D 1
	S D 1 土層断面
P L 7	S D 1 遺物出土状況
P L 8	S F 1 S X 1
P L 9	S X 4 S X 5
P L 10	S X 2 S X 2 遺物出土状況 S X 3 遺物出土状況
P L 11	S X 3 S X 7
P L 12	S X 6 S X 6 遺物出土状況 S X 8 遺物出土状況
P L 13	S X 8 S X 10
P L 14	S R 1
P L 15	S R 1 S R 2
P L 16	掘立柱建物群全景 S B 1
P L 17	S B 2・3、S R 3 S B 3 遺物出土状況
P L 18	S B 4～6、S A 1～4 S B 6
P L 19	S B 5 S A 1・2 S A 3・4
P L 20	S B 7～11、S A 5・6 S B 10・11、S A 6
P L 21	S B 7・8 S B 9
P L 22	S B 12

	S B 13・14、S A 11
P L 23	S B 15・16 S B 16 遺物出土状況
P L 24	S A 9・10 S A 8 S D 5
P L 25	S D 4 S D 4 基石出土状況 S D 4 西部遺物出土状況
P L 26	S D 7 S K 29 S F 4
P L 27	S K 3 遺物出土状況 S D 6・S A 7・土坑群
P L 28	炭化物集積 S D 11 噴砂検出状況 噴砂土層断面
P L 29	C地区全景 C地区遺物出土状況
P L 30	S D 1 出土遺物 1
P L 31	S D 1 出土遺物 2
P L 32	S D 1 出土遺物 3
P L 33	S D 1 出土遺物 4・S F 1 出土遺物
P L 34	方形周溝墓出土遺物 1
P L 35	方形周溝墓出土遺物 2
P L 36	方形周溝墓出土遺物 3
P L 37	下層出土遺物
P L 38	S R 1 出土遺物、飛鳥奈良時代遺物
P L 39	掘立柱建物・井戸出土遺物
P L 40	S D 4 出土遺物 1
P L 41	S D 4 出土遺物 2
P L 42	S D 4・溝出土遺物
P L 43	土坑出土遺物
P L 44	ピット・包含層他出土遺物 1
P L 45	包含層他出土遺物 2
P L 46	包含層他出土遺物 3
P L 47	包含層他出土遺物 4
P L 48	包含層他出土遺物 5
P L 49	包含層他出土遺物 6
P L 50	C地区出土遺物

I 前 言

1 調査に至る経過

中勢道路は、鈴鹿市玉垣町から一志郡三雲町に至る延長33.8kmの一般国道23号のバイパスである。この道路は、鈴鹿市・河芸町・津市・久居市・越野町・三雲町を通り、国道23号の交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用の誘導を測り、中勢地区の経済発展に寄与することを目的に計画されたものである。

この計画地内に所在する埋蔵文化財については、昭和58年に計画路線内の分布調査を行い、建設省中部地方建設局と三重県教育委員会が埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った結果、現状保存が困難な遺跡については事前発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。

調査は、建設省中部地方建設局から三重県が委託を受け、昭和63年度は三重県教育委員会文化課、平成元年度からは三重県埋蔵文化財センターが調査を担当している。調査にあたっては、「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流要綱」に基づき、津市教育委員会から2名、鈴鹿市教育委員会から1名（平成7～9年度）の派遣職員を得ている。また、現地作業は調査の円滑化を期して、建設省中部建設局が社団法人中部建設協会に委託している。そして、調査事業の実施にあたっては、建設省中部地方建設局・三重県・中部建設協会の三者で「協定書」を締結し事業を推進している。

中勢道路の発掘調査は、津市大里窪田町の主要地方道津関線から津市納所町の主要地方幹線道津芸濃大山田線までの9工区から開始した。途中、鈴鹿市内の6工区・河芸町から津市内の8工区が、工事計画の関係で急遽調査が実施されたが、平成8年度までに調査は完了した。

津市納所町の主要地方幹線道津芸濃大山田線から津市神戸までの10工区の調査は、平成6年度に蔵田遺跡から開始された。平成7年度には樽形埴や樽式系土器模倣土器を含む土坑が検出され、試掘調査で遺跡範囲はさらに南側に広がる事が確認された。また、平成8年度には注口付きの小型丸底甕が出土して、注目された。

2 調査の経過

位田遺跡は、分布調査の結果を受けて平成元年度1月に範囲確認調査が行われた。21箇所を試掘坑の内、安濃川左岸の自然堤防上の5箇所で遺構・遺物が確認された。中でもNo1001C試掘坑からは緑釉陶器・宝珠硯などといった特殊な遺物が出土し、平安時代の注目される遺跡となった。また、合わせてプラント・オパール分析が行われ、一部で稲作の可能性が高いとの結果が出た。これらのことから5,500㎡について本調査が必要との結果を得た。

本調査は、平成8年度に山本義浩・米山浩之を担当者として実施された。調査は、排土搬出の関係からB地区から開始し、A地区・C地区の順で進めた。B地区の西から南側は現水田と2m近い比高があるが、これは昭和12年の堤防決壊後にその土砂を積み上げたものである。また、調査区は二級河川安濃川の堤防に隣接することから河川法による堤防付近の掘削規制が実施されている。このため土砂面の保護の必要もあり調査区は制約された。また、C地区の排土搬出用通路部分は、遺構密度を考慮して調査を行わなかった。最終的な調査面積は4,600㎡である。

現地調査は、試掘調査の行われていなかったB地区とA地区の基本土層を確認するために改めて予備調査を行い、7月から本格的な掘削に入った。調査は順調に進み、奈良時代の道路遺構や平安時代の掘立柱建物、緑釉陶器・葦石など注目すべき遺構・遺物が確認された。10月には空中写真測量を行い、11月には現地説明会を開催し、150名の参加を得た。

その後、古墳時代後期以降の遺構を検出した面より下層にも遺物が包含するため、トレンチを設定して下層の調査を行った。下層では弥生時代から古墳時代にかけての河道や方形周溝墓群が確認され、朱付着の擦石・石皿が出土するなど貴重な成果が得られた。また、さらに下位の青灰色粘質土層に畦畔状の高まりが認められたために部分的に調査したが、自然の起伏と判明した。最終的には2月に現地調査が終了した。



第1図 中勢道路(8・9・10I区)内遺跡位置図(1:50,000)

第1表 中勢道路(8.9.10工区)内遺跡調査経過表

工区	遺跡名	調査対象面積(m ²)		調 査 年 度											
		範囲確認調査	本調査	昭和63	平成1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	
8	18 丸市遺跡	128	-							範囲					
	19 山王遺跡	128	-							範囲					
	20 内垣内遺跡	128	-							範囲					
	21 天堤古墳	55	-							範囲					
	22 河崎遺跡	256	-							範囲					
9	23 六大A遺跡	448	13,220							範囲	範囲8,800	4,130	200		
	24 六大B遺跡	456	26,235	範囲		17,525	3,420	範囲3,350	1,270	670					
	25 橋垣内遺跡	176	12,000	範囲	7,000	4,925	75								
	26 大古曾遺跡	680	12,435	範囲		範囲	5,160	範囲240	7,035						
	27 新池2号墳	198	-										範囲		
	28 新池1号墳	20	範囲												
	29 西岡古墳	70	2,000					範囲	2,000						
	30 西岡2号墳	30	-					範囲							
	10	31 山籠遺跡	208	1,100	範囲	1,100									
		32 門脇北古墳		1,100		1,100									
33 コウゼンシ遺跡		80	-	範囲											
34 宮ノ前遺跡		144	2,800	範囲	2,700				100						
35 森山東遺跡		240	5,230	範囲4,230	1,000										
36 大田遺跡		409	3,320	範囲3,320											
37 松ノ木遺跡		144	7,800	範囲	7,800										
10	65 長遺跡	0	3,700									3,700			
	38 蔵田遺跡	1,356	16,100		範囲					5,600	範囲6,810	3,300			
	39 位田遺跡	416	4,600		範囲								4,600		
	40 替田遺跡	432	10,060		範囲								範囲6,630	3,140	
	41 式ノ坪遺跡	320	5,100		範囲									5,100	
	42 里前遺跡	256	1,280		範囲								範囲	1,280	
	66 梁瀬遺跡	1,152	3,620										範囲	範囲	3,620
43 鎌切3号墳	-	-													
範囲確認調査		7,900		2,249	1,680	300	100	68	1,047	96	748	1,024	678		
本調査合計			133,680	7,550	20,700	22,450	8,655	5,900	8,405	15,100	14,640	14,780	8,240	4,900	

立：立合調査 範囲：範囲確認調査 () 一部調査済 () 未調査 本調査面積に下層含まず(1999. 3)

3 調査の方法

調査区の設定に関して、平成元年度以来中勢道路の調査では、第VI系国土座標軸を基準に大地区・小地区を設定していた。ところが、現地調査時の遺構略測などに支障があったり、その表記が煩雑であった。そこで、これを見直し、より現場作業に適した基準を平成8年度から採用することとした。それは、道路建設用のセンター杭（中勢道路の起点から20mピッチで設置）の任意の2点を基準として4m四方の小地区を設定するもので、東西方向を西からアルファベットで、南北方向を北からアラビア数字で表記する。位田遺跡の場合、No997杭とNo1002杭を基準した。南北方向は北側への拡張の可能性を考慮し余裕を持たせ、調査区内は11~43、東西方向はG~iとした。

調査にあたっては、表土除去は基本的に重機（バックホー）で行った。しかし、試掘調査の結果から緑釉陶器など特殊遺物が含まれると考えられたA地区・B地区の一部は人力で除去を行った。

遺構カード（S=1/40）は、小地区毎に作成し、略図・土質・切合いなどを記入した。

遺構名は、ピットのみ小地区毎の通し番号を与えたが、その他の溝・土坑などは調査区全体の中で通し番号を付した。

実測は、土層図や遺物出土状況図などに必要に応じて1/10や1/20で作成した。遺跡全体の実測は、A・B地区に関しては1/50の航空写真測量を実施したが、遺構の全く認められなかったC地区は平板測量とした。また、航空測量後に検出された下層の河道・方形周溝墓などは、平板測量と手書実測（S=1/20）を併用した。

遺構写真は基本的に4×5in判（ウスタ SP）で撮影し、補助的に6×9cm判（同上）・35mm判（ニコン F401・F3）を使用した。フィルムはモノクロネガとカラーリバーサルの両方の記録を行った。遺物写真は6×7cm判（同上）を使用した。

4 調査日誌(抄)

1996年

- 6/27 土層確認のための予備調査実施。
- 6/28 表土除去開始。地区杭設定。
- 7/4 B地区掘削開始。
- 7/18 包含層を切る河道SD11検出。

- 7/24 SB16柱穴から無釉陶器小碗の完形品が4点出土。
- 7/30 SE1検出。土層断面図作成。
- 7/31 B地区全景・掘立柱建物などの写真撮影。
- 8/5 高田高校地歴部体験発掘。
- 8/7 A地区遺構検出、掘立柱建物となる。
- 8/19 SR1の南北側溝を検出。
- 8/21 SF4掘削。炭化物多く、壁面が焼けている。竈であろうか。
- 8/23 SD4から碁石24個出土。
- 9/4 SD4西部から土師器皿完形品多く出土。SK3底部から黒色土器碗ほぼ完形品出土。
- 9/12 A地区遺構検出ほぼ終了。北東部遺構ほとんどなし。
- 9/20 A地区南部の掘立柱建物確認のため拡張。北西部で炭化木検出。
- 10/3 C地区調査開始。
- 10/17 A地区掘立柱建物など写真撮影。
- 10/18 高所作業車を使って全景写真など撮影。
- 10/24 空中写真測量実施。三重大学八賀教授碁石の調査指導
- 10/25 C地区約半分検出終了。遺構全くなし。
- 11/1 松阪高校磯部先生に碁石の石材鑑定
- 11/15 北宋銭「祥符通宝」出土。
- 11/21 C地区写真撮影。
- 11/27 県庁で記者発表。
- 11/30 現地説明会実施。約150名の参加あり。
- 12/3 下層確認のためのトレンチ設定。
- 12/10 河道SD1を掘削、遺物量多い。
- 12/12 焼土・枕石検出。堅穴住居か。
- 12/13 国児学園生徒体験発掘。
- 12/18 噴砂を確認。
- 1997年
- 1/10 SD1完掘。
- 1/14 A地区下層確認トレンチ設定。
- 1/20 方形周溝墓(SX8)検出。SR2確認。
- 1/27 SX6から朱付着擦石・石皿出土。
- 1/29 下層面全景・方形周溝墓の写真撮影。
- 1/30 方形周溝墓実測。
- 2/12 最下層調査調査、自然の起伏と判明。
- 2/14 現場作業完了。

II 位置と環境

1 位置

紀伊半島の東部に位置する三重県は、南北に長く約180kmに及ぶ。伊勢湾に面した伊勢・志摩地方は、西を布引山地・鈴鹿山脈が画し、近江地方・伊賀地方との境界をなす。東の海岸部には伊勢平野が南北に広がり、津市はその平野のほぼ中央部に位置する。

津市は主に北部の志登茂川流域、中央部の安濃川流域、南部の雲出川流域からなる。それらは、見当山(長岡)丘陵・半田丘陵といった標高50m程の第三紀世鮮新世からなる丘陵によって画されている。安濃川は、鈴鹿山系の一つ錫丈ヶ岳(標高627m)にその源を発し、途中支流の穴倉川・美濃屋川と合流し、伊勢湾に注ぐ。

位田遺跡(1)は、安濃川中流域左岸の自然堤防上にあり、標高は7m前後である。調査区は行政上、津市北河路町字木ノ下に属する。

2 歴史的環境

次に、安濃川流域を中心に位田遺跡周辺の遺跡の消長・変遷を概観してみたい。

旧石器時代 この時代は太古遺跡(2)のみで、旧石器時代後期のナイフ型石器が確認されている。

縄文時代 前期から後期の遺跡は、現在のところ上・中流域の段丘上で多くが確認されている。主なものとしては美里村西出遺跡や岡町大石遺跡などがある。晩期になると沖積地への進出が確認でき、松ノ木遺跡(3)では同時期の河道と竪穴住居が検出されている。しかし、殿村遺跡(4)・城坂遺跡(5)のように依然として丘陵状に立地する遺跡も散見される。このように稲作を含めた過渡期である当該時期には、その立地に二相が認められる。

弥生時代 前期に出現した納所遺跡(6)が、この地域の拠点集落として成立する。中期の集落は、替田遺跡(7)や蔵田遺跡(8)、辻の内遺跡(9)などで確認されている。中でも長遺跡(10)は丘陵上の大集落で、中期後葉の200棟もの竪穴住居が検出されている。この頃を境に、集落の立地は丘陵上に移動する傾向が強くなっていく。後期の遺跡には、大城遺跡(11)や高松C遺跡(12)、野田遺跡(13)などがある。

これらは太田遺跡(14)にみられるように、支流が網目状に流れるような気候変化もその立地を規制する一つの要因と考えられる。

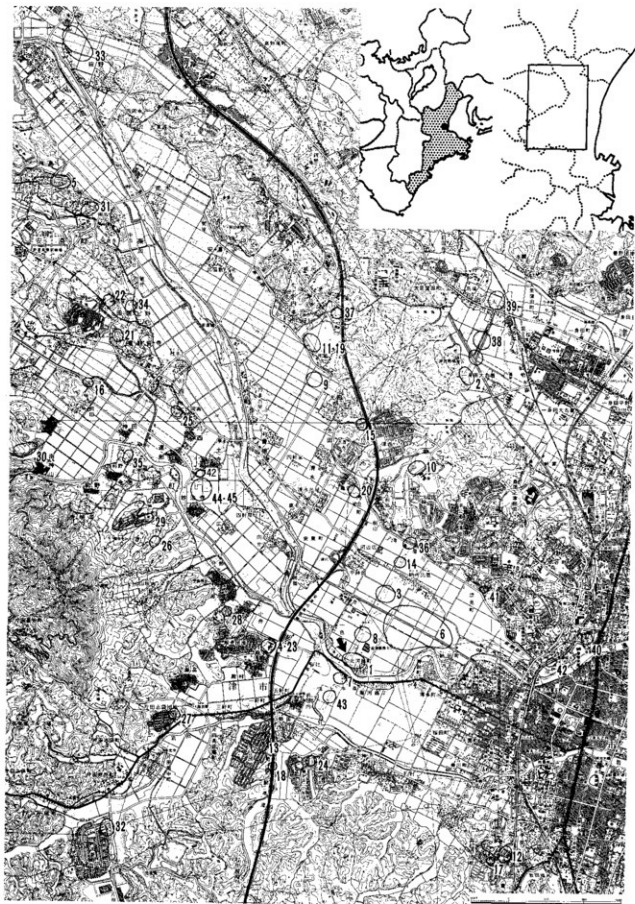
墳墓では、松ノ木遺跡で、中期前葉あるいは前期に遡る可能性のある方形周溝墓が確認されている。倉谷遺跡(15)では中期中葉の台状墓が築造されている⁹⁾。後期のもものでは前田遺跡¹⁶⁾や高松弥生墳墓¹⁷⁾(17)・大ヶ瀬墳丘墓¹⁸⁾(18)・殿村遺跡・大城遺跡(19)などがある。いずれも丘陵上に立地し、集団墓から脱却した墳丘墓である。また、亀井遺跡(20)でも土坑墓の可能性が指摘されている。

古墳時代 前期古墳としては、車輪石が出土した日野丘1号墳(21)がある。これに続く首長墓としては、一辺60mほどの大方墳の明合古墳(22)がある。若干時期は遅れるが、池の谷古墳は全長80mと推定される前方後円墳である。後期にはこのクラスの規模を有する古墳はなくなり、殿村1号墳(23)・鎌切3号墳(24)・岡南古墳(25)・御屋敷跡13号墳(26)のように全長30m級の前方後円墳が流域に分散して展開する。また、当流域では最古の坂本山6号墳(27)をはじめ方形墳の系譜のものが多く、方墳のみで構成されるメクサ古墳群(28)もある。後期から終末期の群集墳の時期には方墳・木棺直葬、円墳・横穴式石室とういう図式が平田古墳群(29)で確認されている。なお、比較的初期の横穴式石室が中大谷古墳群(30)・平田古墳群・大塚古墳群(31)にある。

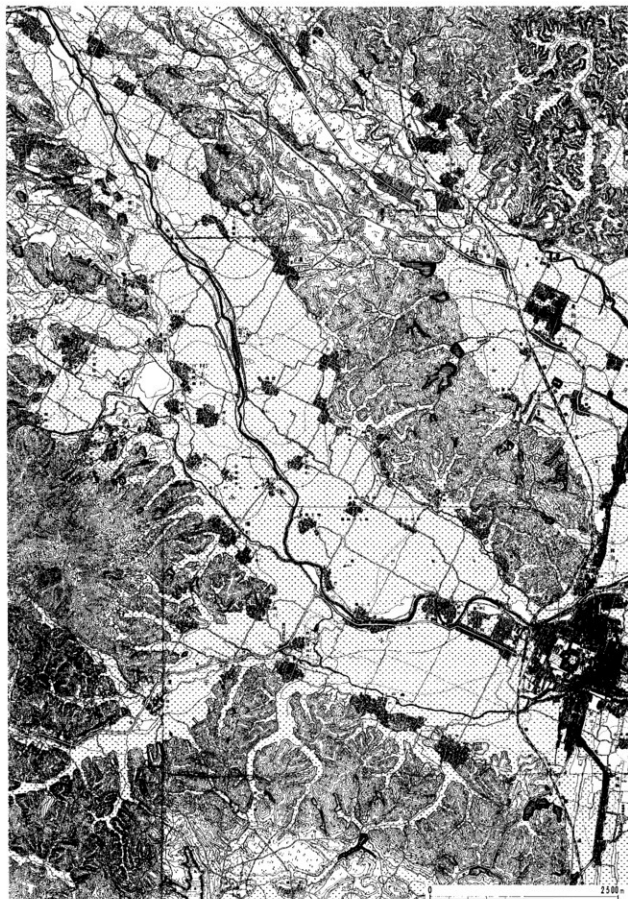
古墳時代の集落は確認例が少ないが、新畑遺跡(32)や蔵田遺跡で住居跡が確認されている。また、替田遺跡では、集落内から石銅片が出土しており注目される。

飛鳥・奈良時代 律令国家の形成・完成するこの時期、安濃川流域は上流の一部の地域を除いて安濃郡と呼ばれ、建部・村主・内田・跡部・美太・長屋石田・駅家・片栗の各郷が知られている。

基本的な土地施策である条里制に関しては、この時期に確実に遡る遺構は確認されていないが、松山遺跡(33)では、その可能性のある溝が検出されている¹⁰⁾。当流域には条里プランの方画地割りも良好に



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 50,000)



第3図 明治27年陸地測量部地形図 (1 : 50,000)

遺存しており、海岸部から数えて23条の条里プランが想定されている⁴⁰。官道は、東海道が鈴鹿間で分岐し伊勢・志摩国府を指向する伊勢道が通過していることが文献上から確認できるが、そのルートや安濃郡に設置された「市村駅」については諸説⁴¹あるが、考古学的には確認されていない。

この時期の集落は、北浦遺跡(34)や天野山遺跡(35)では竪穴住居が中心であるが、宮ノ前遺跡(36)では掘立柱建物と混在し、内田馬場遺跡(37)では奈良時代に掘立柱建物に移行している。これに対し、志登茂川流域の窪田遺跡群とも言うべき古代窪田郷の中心と考えられる六六B遺跡⁴²(38)や橋垣内遺跡・大古曾遺跡では、飛鳥時代の段階で既にほとんど全てが掘立柱建物となっている。六六A遺跡(39)では、簡脚硯や土管などが出土している。このような中央直輸入の遺物の存在は、祭祀遺構のみならず国家的規模の動きを感じさせるものである。

古代寺院は、その伽藍の確認されたものはないが、広明町瓦窯(40)や津市浜見町(41)・津市大里窪田町、安濃町浄土寺(42)で天平期の瓦が出土・採集されている。また、鳥居古墳(43)の横穴式石室内からは金銅製押出仏が10面出土している。

平安時代 律令国家体制の成熟・衰退期にあたり、この時期には当流域でも土地制度や社会情勢に変化がみられる。安濃郡は、遅くとも11世紀後半には安東・安西両郡に分割されている。

平安時代初期の状況を表していると考えられる「民部田所勘注状」からは、当流域のほとんどが四天王寺領となっていることが判る。当時、南勢地方では、天下の貴社と呼ばれた伊勢神宮が多気郡・度会郡・飯野郡を御神地と定めて神三郡(道後)を呼び、独自の地位を固めていた。その中で、津市神戸は神宮領として神田3町があったことが知られる。その後、所領の神領化が進み、天禄四年(973)に安濃郡は村上天皇から神宮に寄進され、御園・御野が多数成立していたと考えられている。また、安東・安西の分割や各部への専当・権専当の派遣・政所の設置は、高い生産性を視野に入れた神宮の支配が強化された結果と考えられている。

官道に関しては、平安初期に鈴鹿峠越えの阿須波新道が開削され、東海道の変更があったが、伊勢道

の変化は文献上からは不明である。また、「江家次第」や「権気」から11世紀初頭には安濃郡内を通過していたことが窺われるが、市村駅はみられない。なお、松山遺跡では幅員約4.5mの道路遺構が、部分的に約300mに渡って検出されている。

条里制の開始は奈良時代とされるが、実際の遺構が検出できるのは平安時代中期以降であり、末期以降に多くみられるようになる。武ノ坪遺跡(45)では中～後期の条里に方向を揃え、規格性をもった建物群が確認されている。蔵田遺跡では、末期の散碎的な屋敷地が確認されている。これに対して浄土寺南(46)・米買遺跡(47)では、前期に北を指向する大形建物群や円面硯といった遺物が出土し、末期に条里方向に沿った建物が築かれる。北浦遺跡では小規模な建物からなる集落が検出されている。またこの時期、窪田遺跡群内の六六B遺跡では下級官衙あるいは富豪層の居宅と考えられる建物群が検出されている。

ところで、「延喜式神名帳」には式内社が、安濃郡内に十座記載されているが、論社が多く確実視できるのは小川内神社(芸濃町河内)ぐらいである。この中で、霞染神社は日本書紀や続日本紀に現れる豪族置造連の氏神、大市神社は婦化氏族大市氏の氏神と言われている。

また、奈良時代の仏教文化とは対極にある山嶽信仰も長谷山(標高320m)・経ヶ峰(標高819m)で認められる。長谷山には大和の長谷山を模した寺院が建てられ、経ヶ峰には埋経が行われ、この名があるとされている。

III 地形と層序

1 周辺地形の概要

安濃川の両岸には自然堤防が発達し、位田遺跡は下流左岸の自然堤防上に立地している。この安濃川の旧流路は不明確な部分が多いが、納所出屋や河辺店の集落付近には断片的に自然堤防がみられ、旧河道が存在していたものと思われる。また三泗川は、江戸時代に出水時、安濃川この部分を意図的に切り、城下への洪水の流入を未然に防いだとされている。岩田川との合流点に位置する里前遺跡では、鎌倉時代の旧河道が検出されている。

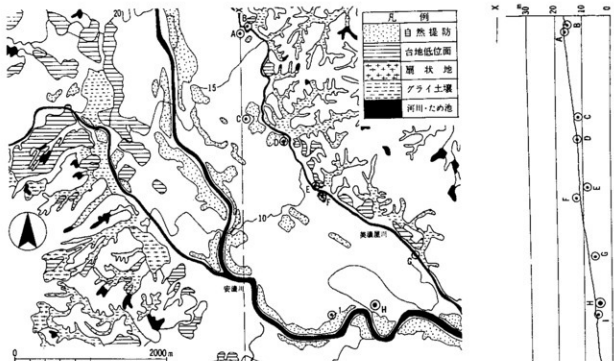
安濃川右岸と左岸を比較すると、左岸は比較的安定した土地で20数年前まで条里制の遺構が明瞭に残っていた。これに対して右岸は、津市内では条里制遺構は比較的良好に残っているのに対して、安濃町内ではその名残をほとんど止めていない。この付近では、小字に「○○川原」・「○○砂」など、安濃川の氾濫に伴うと思われるものが散見される。また、現在の水田の利水状況は左岸では安濃川に排水され、左岸では岩田川に排水される。基本的に北高南低の地形である。以上により安濃川左岸は、右岸に比べて比較的安定した地形と考えることができ、これは第

4図の等高線からも読み取ることができる。

中勢道路の調査は、この安濃川流域を南北に横断するに行われ、平成9年度までに5遺跡で実施された。調査区内では、支流に相当すると考えられる旧河道は太田遺跡（弥生時代後期～古墳時代後期）・松ノ木遺跡（縄文時代晩期）や蔵田遺跡（古墳時代中期）・替田遺跡（平安時代中期）などで確認されている。一方、少なくとも旧安濃川本流と思われるものは、位田遺跡で確認された2条の旧河道（弥生時代末～古墳時代初頭・室町時代以降）のみである。このことは、安濃川が若干の流路変更や分流の可能性はあるものの少なくとも有史以来、ほぼ現位置で流れていたものと考えられる。

2 遺跡周辺の微地形

次に、位田遺跡周辺の微地形をみてみたい。位田遺跡の乗る自然堤防は、調査区で標高7m前後である。遺跡周辺では東西方向に延び、東は納所遺跡付近まで、西は穴倉川との合流付近まで連続し、宅地・畑地として利用されている。調査区の東側にある現北河路集落は、この自然堤防に合わせた地割りが認められ、対岸の南河路集落でも同様のことが言える。



第4図 安濃川流域平野地形図 (1 : 50,000)

現在、南河路集落の南側には2条の水路（第5図A・B）があるが、昔田遺跡の発掘調査の結果、これらは平安時代以降の旧河道とほぼ重複していたことが判明した。

また、位田遺跡A地区では明確でないが、C地区付近では等高線は若干西側に湾曲し、その北側は東側に張り出している（第7図）。C地区は自然堤防の北側に展開する後背湿地であり、その北側は微高地と考えられる。Na995W20試掘坑では、人工遺物を全く含まない南方向に流れる自然流路を検出しており、C地区付近の後背湿地に流れ込むものと考えられる。さらに北側のNa988W試掘坑からは砂利層が確認され、谷状の地形と思われる。さらにこの北側は微高地となり、麻田遺跡が存在する。

また、西側では、後世の削平で一部の等高線が密になって、地形が判然としなくなっているが、同様の地形が連続するものと推定される。

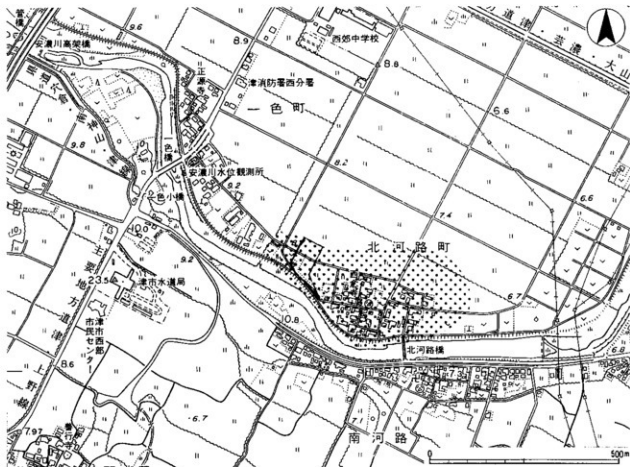
3 基本層序

調査区内の地目は、B地区東部が畑地、それ以外

が水田であるが、層序は大きく異なる。B地区東部では、I層耕作土、畑地部分は0.6~1.0mの盛土・II層がある。III層遺物包含層は層厚約20cmである。A地区では、遺物包含層以下まで後世の水田造成で削平され、耕作土直下が古墳時代後期以降の遺構検出面となっている。また、方形周溝墓や旧河道は基本的に同一の検出面から切り込んでいたことが土層観察で確認したが、その面での検出は困難であった。また、検出面以下にも確実に遺物を含む褐色系砂質土層が存在し、その層位は確認できなかったが、おそらく旧安濃川に伴う堆積と考えられる。

C地区では、A地区と同じ面で遺構検出を試みたが、全く遺構は検出されなかった。また、C地区では、耕作土との間に灰色系の砂質土があり、平安時代末期から鎌倉時代を中心とする遺物が出土している。この灰色系の砂質土は北側ほど厚く堆積し、北に傾斜する地形と考えられ、それ以下は灰色系粘質土が厚く堆積している。

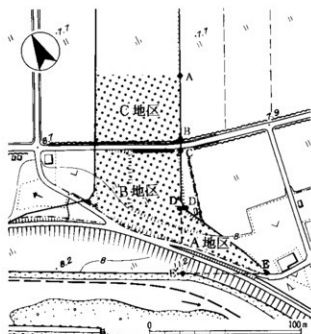
さらにA地区の現地地表下約1.4mにある青灰色粘



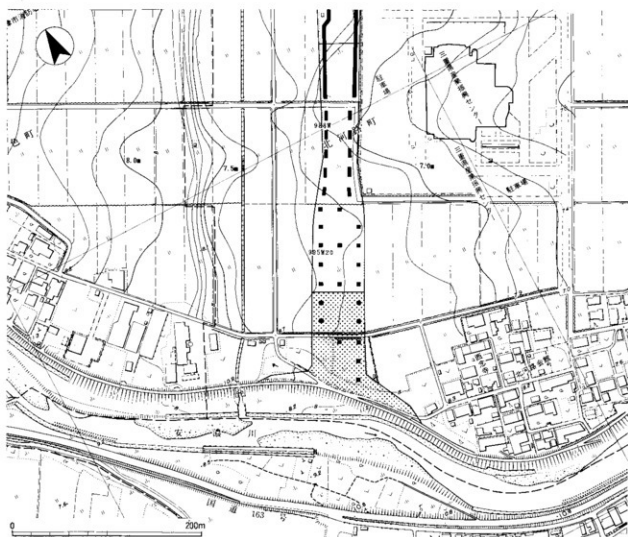
第5図 遺跡周辺地形図（1：10,000、トーンは遺跡範囲）

質土の一部は畦畔状の盛り上がりみせるが、面的に確認した結果、自然の起伏であることが判明した。また、この青灰色粘質土は南部で落ち込み、そこに泥炭層が確認された。この泥炭層はC¹⁴分析の結果、B.P.2,880(+860 - 770)年、青灰色粘質土は同じくB.P.3,010(+520 - 490)年とされ、縄文時代晩期前後の形成と考えられる。また、現表上下0.9m前後では、褐色粘質土層が塊状に散在する様子(第9図18層)も観察できた。人為的なものの可能性もあるが、その形成過程は明確にできなかった。

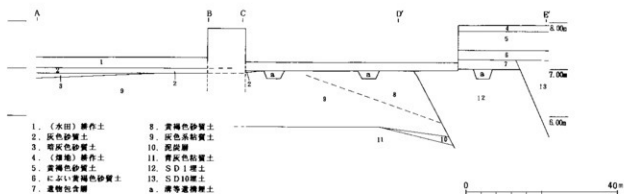
ところで、層序とは直接関係はないが、A地区南西部は昭和12年の洪水で堤防が決壊した場所であり、部分的に砂層が遺構を破壊していた。また、この付近では検出面が青灰色に変色しており、遺構検出が行い難かった。これは、上記の洪水で一瞬の内にバックされ、還元状態となったためと考えられる。



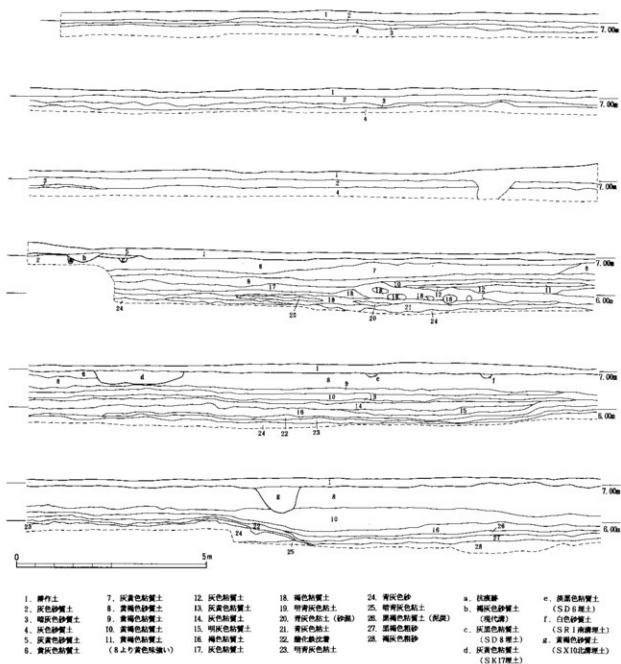
第6図 調査地区割図(1:2,500)



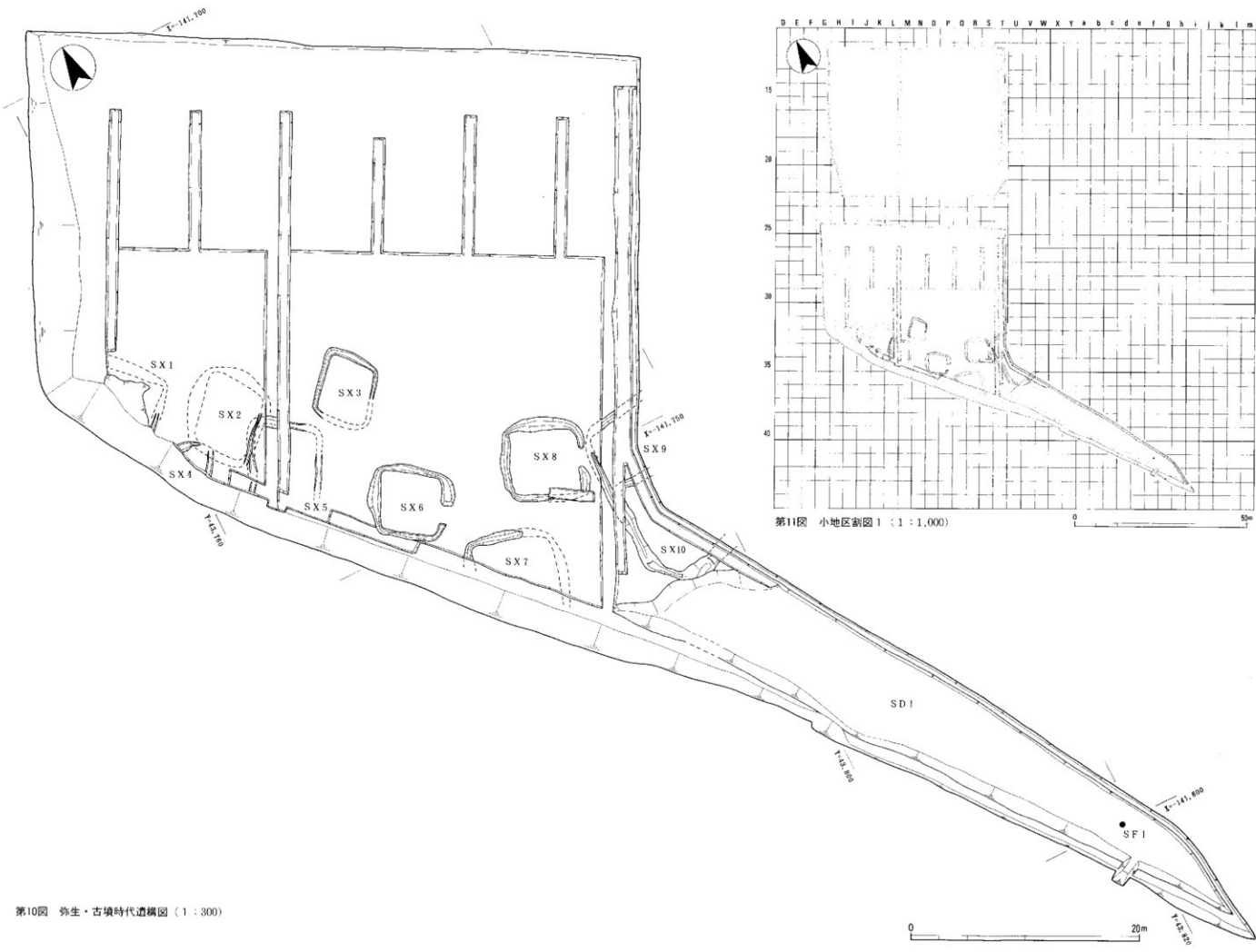
第7図 遺跡周辺微地形図(1:4,000、トーンは調査区)



第8图 基本土层模式图 (水平方向 1 : 1,000、垂直方向 1 : 80)



第9图 土层断面图 (1 : 100、实测位置是第6图)



第10図 弥生・古墳時代遺構図 (1:300)

第11図 小地区新図1 (1:1,000)

IV 弥生・古墳時代

この時期の遺構には河道1条、方形周溝基10基、炉(竪穴住居)1基、溝2条、土坑2基がある。遺構の大半は、弥生時代末期から古墳時代前期のもので、須臾器を伴う古墳時代後期と思われる溝と土坑が若干ある。

I 河道

SD1 (第12~17図 P L 6・7、30~33)

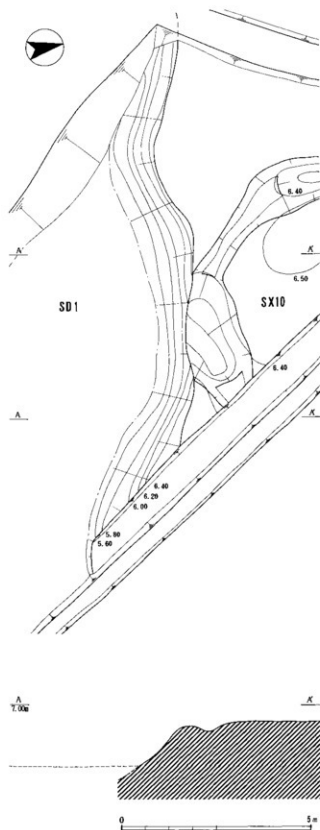
B地区西部で、河道の左岸肩部を約11m検出した。その流水方向に対して調査区が斜行していたため規模などは明確でないが、幅は40m以上と推定され、深さは2.2mまで確認した。その堆積状況に関して、調査区内で確認できたものは、概ね下位の黄褐色粗砂層(I層)、中位の黄褐色砂質土層(II層)、上位の黄褐色粘質土層(III層)に分けることができる。しかし、各層の境界は判然とせず、堆積・削平を繰り返して複雑になっている。当初は水の流れが相当活発であったが、次第に流量が低下し、最終的には湿地のような状態であったと考えられる。

遺物の取り上げは、上記の層位によって行ったが、各層出土遺物の示す時期は、必ずしもこれに対応しない。III層からは欠山式期の遺物と弥生時代V様式の遺物が混在しているが、遺物量は少ない。II層・I層からは欠山式期の遺物が大半を占めている。遺物の出土量はI層からが最も多く、完形品も多く含む。これらは、河道がその機能を停止した後、投棄されたものと考えられる。弥生時代後期の遺物は量的にも少なく、さらに下層の堆積が2次堆積によるものと思われる。また、東部の埋土上で検出された炉跡は元屋敷式期と考えられ、遅くともこの頃までには河道は完全に埋没していたと考えられる。

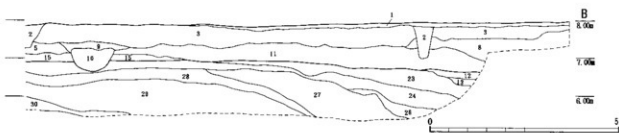
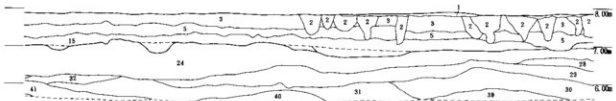
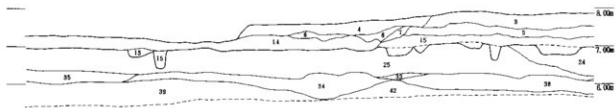
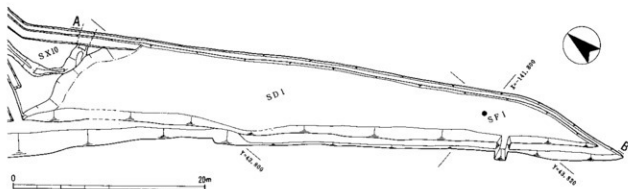
SD1は、その規模・出土遺物から調査区の南側を東流する旧安濃川の主流で、その流路が一時的に北に寄ったものと考えられる。

遺物 SD1の出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器がその大部分を占め、若干の石製品を含む。なお、木製品は掘削が保水層まで達しなかったため未確認である。

前述のように遺物は欠山式期の土器が大半であ



第12図 SD1実測図(1:100)



- | | | | | | |
|-----------------|-----------------------|-----------------|-----------------|------------|------------|
| 1. オリーブ褐色粘質土 | 9. 明黄褐色シルト | 16. 黄褐色粘質土 | 23. 黒黄褐色粘質土 | 31. 黄褐色粘質土 | 39. 黄褐色粘砂 |
| 2. 黄灰色粘質土 (壤泥) | 10. 灰黄褐色粘砂 | 17. 黄褐色粘質土 | 24. 黄褐色粘質土 | 32. 黄褐色粘質土 | 40. 黄褐色粘質土 |
| 3. 黄褐色粘質土 (兼作土) | 11. 黄褐色シルト | 18. 褐色粘質土 | 25. 褐色粘質土 | 33. 黄褐色粘質土 | 41. 黄褐色粘砂 |
| 4. 黄褐色粘質土 (兼土) | 12. 黄褐色粘質土 | 19. 黄褐色粘質土 | 26. 黒黄褐色粘質土 | 34. 黄褐色粘質土 | 42. 黄褐色粘砂 |
| 5. におい黄褐色粘質土 | 13. 明黄褐色粘砂 (17より粘性強い) | 20. 黄褐色粘質土 | 27. 黄褐色粘質土 | 35. 黄褐色粘質土 | 43. 黄褐色粘質土 |
| 6. 褐色粘質土 | 14. (赤田) 兼作土 | 21. 黄褐色粘質土 (砂混) | 28. 黄褐色粘質土 (砂混) | 36. 黄褐色粘質土 | 510 黄褐色粘土 |
| 7. 灰黄褐色粘質土 | 15. 黒褐色粘質土 | 22. 黄褐色粘砂 | 29. 黄褐色粘質土 | 37. 黄褐色粘質土 | |
| 8. におい黄褐色粘質土 | (平安時代遺物包含層) | 22. 褐色粘砂 | 30. 黄褐色粘質土 | 38. 黄褐色粘質土 | |

第13図 SD1土層断面図 (1:100)

り、特に層位的な特徴を抽出することができないため、層位に拠らず一括して扱うこととする。ただし若干時期の新しいものもある（おそらく竪穴住居などの遺構に伴うと思われるが、確認できなかった。）が、明確に分離できなかったのどこに含める。以下、土器の記述に関しては、主に口縁部の形態の特徴を重視した分類に従って行うことにする。なお、個々の遺物の出土位置・法量・調整技法の特徴などについては、遺物一覧表を参考にさせていただきたい。

壺 広口壺が大半を占めるが、受口壺・ヒサゴ形壺・台付直口壺も少量ある。

壺A（広口壺：1～18） 広口の口縁部をもつものを壺Aとした。壺Aには、口縁部が外反するものA1（1～9・11・12・16～18）、直線的に延びるものA2（13～15）がある。

A1は端面をもつもの（1～6・11・16・18）が多く、その大半が施文する（1～6・11・16）。文様は単斜の刺突列文で、2は棒状浮文も付き、頸部の突帯に刻み目を施す。体部の文様は肩部に集中し、10・11で櫛描直線文・同波状文・円形浮文が確認できる。16は、いわゆる柳ヶ坪形土器である。口縁端部には断面三角形の貼り付けがみられ、内外面に羽状刺突列文を施す。

A2の15は、頸部が直立し、口縁部が直線的に開く。肩部には櫛描直線文・波状文・羽状刺突列文が施され、塗朱されている。胎土も精良で乳茶色である。13・14は、薄い器壁で直線的に延びる口縁部をもつ。13は口縁端部に垂下する突帯を貼り付けた端面をもつ。いずれも端面に羽状の刺突列文・円形浮文を付す。14にはさらに棒状浮文、13には口縁部内面に波状文を施す。

壺B（19・20） 受口状の口縁部をもつものを壺Bとした。19の口縁部の屈曲は弱いが、頸部に櫛描直線文がある。20は器壁が厚く、下膨れの体部である。口縁部・肩部には貝殻刺突列文や櫛描直線文を施す。

壺C（21） 短く直立する口縁部をもつものを壺Cとした。球形の体部に内湾気味の脚が付く。ハケ調整が主体と思われる。

壺D（25） いわゆるヒサゴ形壺である。口縁部の内湾は弱い。へう磨き調整が主体である。

壺体部（22～24・26～28） 中小形のもの（24～26）

と大形のもの（28）がある。

28は頸部から肩部にかけて塗朱されているが、施文は認められない。26・27も塗朱された体部片であるが、櫛描直線文などの文様がみられ、28とは別個体である。

甕 甕は受口状口縁壺・S字状口縁台付甕・く字状口縁甕が大半を占める。

甕A（29～38） 受口状の口縁をもつものを甕Aとした。甕Aには、頸部が強く屈曲するA1（29・30）、頸部の屈曲がやや弱く端部に面をもつA2（33～36）、頸部の屈曲が弱く口縁端部をつまみ上げるA3（31・32）、頸部の屈曲が弱く口縁端部が外傾するものをA4（37～39）がある。

口縁部外面は、ほとんどに刺突列文を施すが、29だけが頸部に刻目文を施す。頸部の櫛描直線文はA1に限られ、肩部上部に刺突列文を施すものが多い。全形の判明するA2（35・36）は体部最大径が口径を上回るもので、底部はやや上げ底状である。

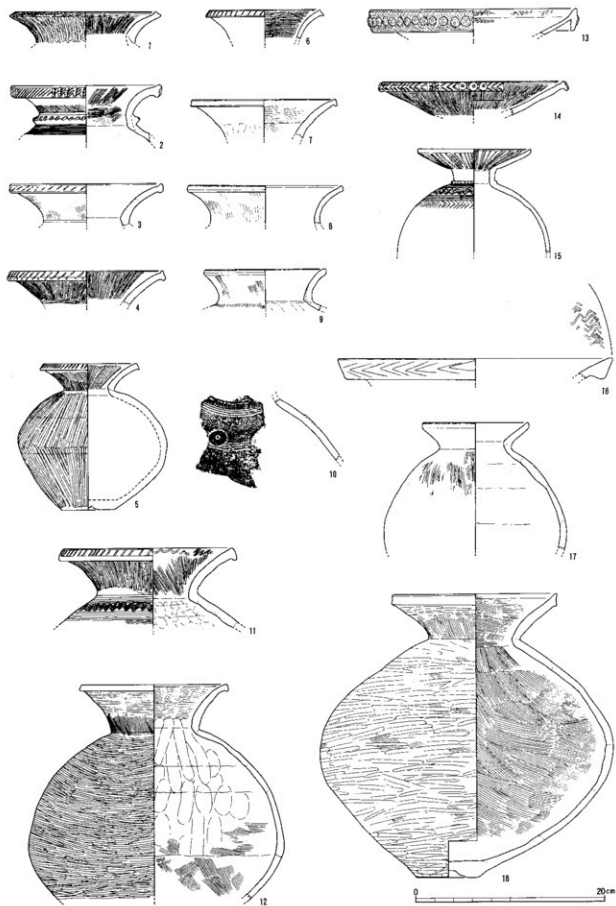
A4は、甕Aと甕Bの中間的な形態のものである。口縁部がS字状でない点以外は甕Bとの共通項が多いが、肩部に刺突列文をもつもの（37）や肩部のヨコハケが定型化していないもの（38）、口縁端部に内傾面をもつもの（39）、などの違いがある。

甕B（40～45） S字状口縁台付甕（以下「S字甕」とする。）を甕Bとした。甕Bには、口縁部が短く屈曲するB1（40～44）、口縁部の屈曲の弱いB2（45）がある。

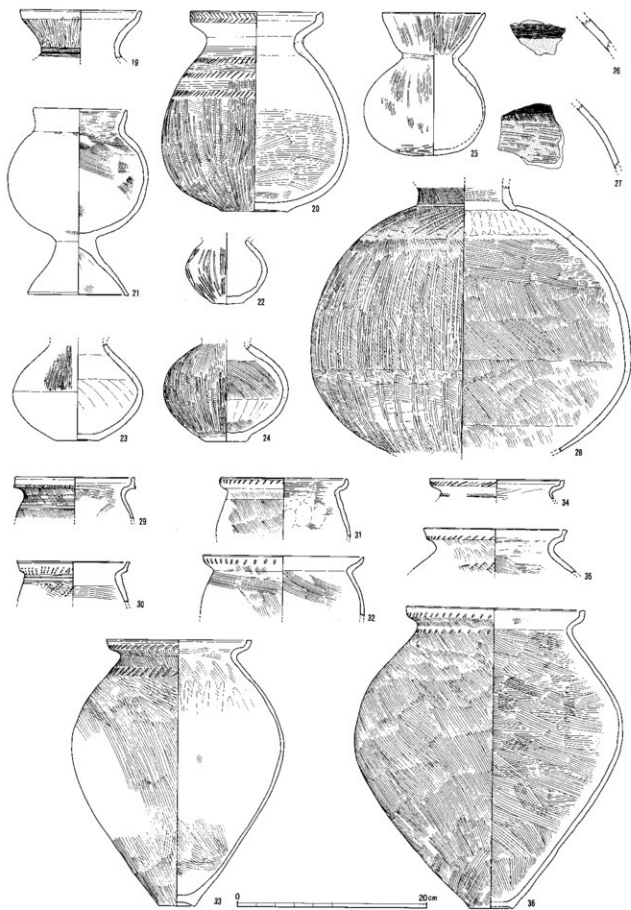
B1は口縁部外面に刺突押引文を施すが、44は波状文化している。肩部外面はタテハケ後、幅広あるいは2帯以上のヨコハケを施す。頸部内面はヨコハケ調整する。45の口縁部外面は無文で、頸部内面のヨコハケも欠落している。

甕C（46～49） 口縁部が直線的に短く外上方に延びるものを甕Cとした。中・小形のもの（46～48）と、大形のもの（49）がある。ハケ調整が主体であるが、46は底部外面をへう削り調整する。48は器壁が薄く、高台が付く。

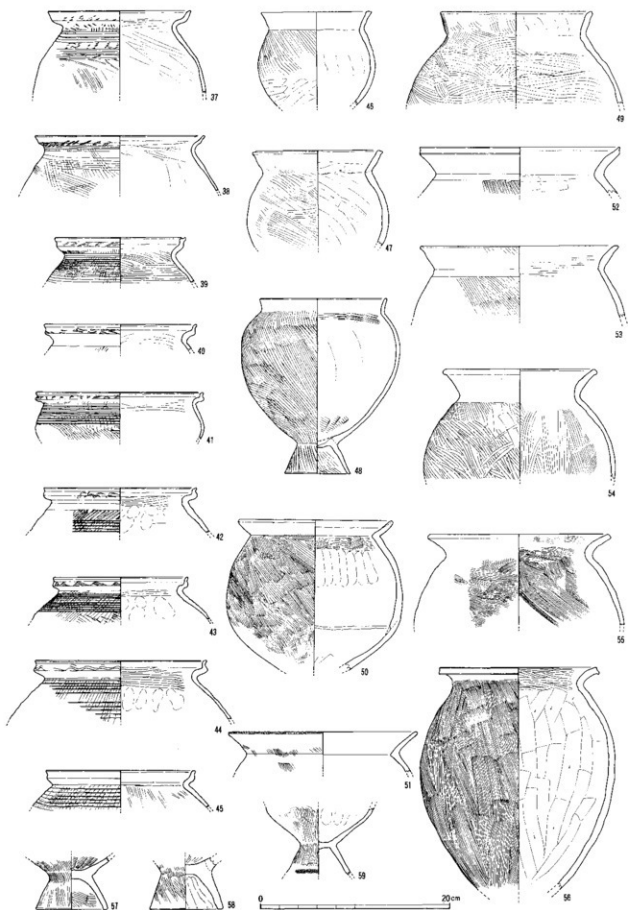
甕D（50～56） 口縁部がく字状になるものを甕Dとした。口縁部は厚手のものが多く、体部は56が倒卵形となる。内外面はハケ調整が主体であるが、56は内面をへう削り調整する。51は器壁が薄く、口縁



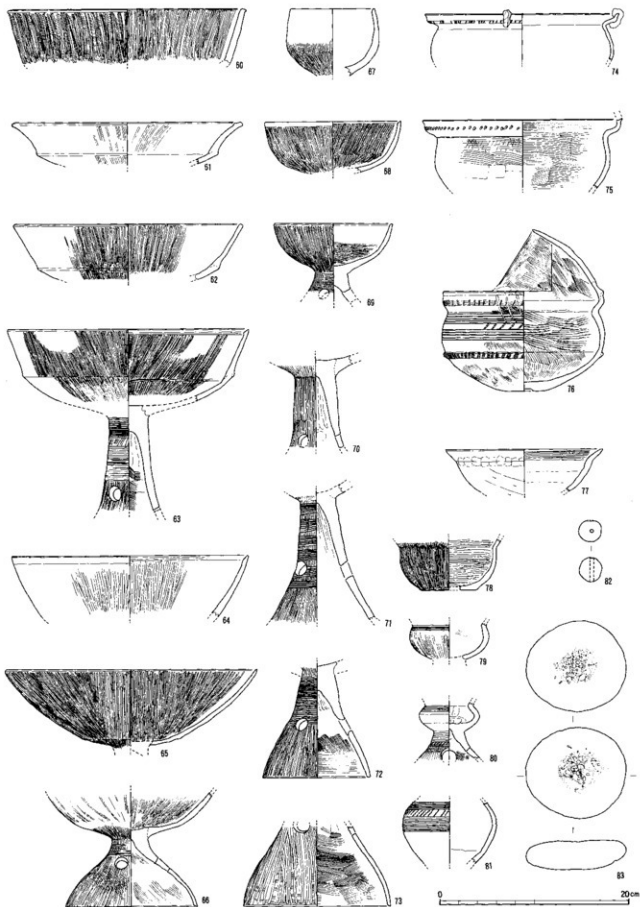
第14图 SD1 遗物实测图1 (1:4)



第15图 SD1 遺物実測图2 (1:4)



第16图 SD1 遗物实测图3 (1:4)



第17图 SD1 遗物实测图4 (1:4)

端部に刻みを施す。50の口縁部は内湾気味で端部を折り返し、体部は球形である。

脚台部(57~59) 確認された個体数は多いが、図示したものは3点である。いずれも直線的かわずかに内湾するもので、端部の折り返しはない。内外面ともハケ調整が主体である。この時期はいずれの壺にも台付のものがあり、対応関係は不明である。しかし、胎土などから57や58はS字罫に伴うものと思われる。59は端部に櫛描刺突文を密に施す。

高杯 個体数は多いが、全形の判明する個体はほとんどない。

高杯A(60~65・70~73) 大型の杯部をもつものを高杯Aとした。口縁部が短く外反する弥生時代後

期のものから、口縁部が長く内湾し内傾面をもつ欠山式期のもので連続して認められる。いずれも内外面に縦方向のヘラ磨きを密に施している。65は口縁端部の内傾面が消失する元屋敷式期のものである。

脚部は柱状部を残すもの(70)から、端部が大きく内湾するもの(73)までである。70は柱状部の櫛描直線文が欠落している。

高杯B(66~69) 小形で碗状の杯部をもつものを高杯Bとした。67は深い杯部で弥生時代後期のものである。68・69の杯部は内外面ともヘラ磨き調整され、口縁端部に内傾面をもつ。66は大型の杯部をもつもので、大きく内湾する脚部が付く。

手焙形土器(74~76) いずれも口縁部はS字罫と類似し、外面に刺突列文がある。76は体部に櫛描直線文・刺突列文がある。

鉢(77・78) 鉢には平底で丁寧なヘラ磨きを施す78と口縁部直下で屈曲する77がある。

ミニチュア土器(79~81) 79・80は脚付壺、81は壺を模したものであろう。

土鍾(82) 直径2.5cmの球形のもので、重さは12.4gである。

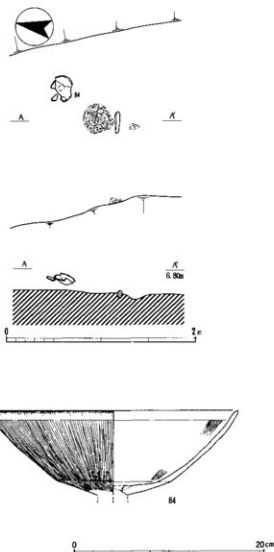
凹石(73) 長径10.6cmの自然石の両面中央を敲打している。

2 炉

S F 1 (第18図 P L 8・33)

B地区の南東部、S D 1上で検出された。径約30cmの範囲に焼土があり、その南側に東西方向に長さ25cmの枕石が埋め込まれていた。枕石は焼土側だけが被熱している。炉跡は竅穴住居床面に設けられたものと考えられるが、その平面形は確認できなかった。他にも狭い範囲に焼土が認められ、複数の竅穴住居が存在していた可能性がある。

遺物 炉の検出された面からやや浮いた状態であるが、焼土の周囲から高杯(84)が出土している。84の口縁部はわずかに内湾するが、端部は面をもたない。杯部は浅く、杯底部と口縁部の稜も不明確である。杯部内外面をヘラミガキ調整している。河道S D 1出土遺物より時期的に新しい元屋敷式のもので、この炉の設置された竅穴住居に伴うものと考えられる。



第18図 S F 1 実測図(1:40)、遺物実測図(1:4)

第3表 遺物一覧表2 (SD1・SF1)

No(報告) (登録)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整方法の特徴	胎土	焼成	色澤	残存度	備考
			口徑	底徑	高さ						
43	B c30	土師器 上腹部	(14.1)	—	—	口縁外面に押引文。体外面タテハ後ココハケ、内面ナド・オエエ。胴部内面ココハケ。	やや粗 ~1.5mmの小石含む	黄褐色に灰緑	口縁7/8		
43-01	SD11層	土師器 上腹部	(18.0)	—	—	口縁外面に押引文。体外面タテハ後ココハケ。胴部内面ココハケ、体面内面ナド。	やや粗 ~3mmの小石含む	灰白	口縁1/4		
45	B c39	土師器 上腹部	(15.6)	—	—	口縁部ココナデ、体面外面タテハ後ココハケ。	やや粗 ~1.5mmの小石を含む	黄褐色	口縁1/8		
019-01	SD11層	土師器 上腹部	(11.5)	—	—	口縁部ココナデ、体面外面上テハ、ドテヘラ削り、内面ナド。	やや粗 ~2.5mmの小石・砂粒	黄褐色に灰緑	口縁1/4		
018-01	SD11層	土師器 上腹部	(12.0)	—	—	口縁部ココナデ、体面外面へり磨き後ハケ、内面ナド。	やや粗 1 ~2.5mmの砂粒	灰白	口縁1/4		
009-04	B c30	土師器 上腹部	(13.1)	6.8	18.4	口縁部ココナデ、体面外面タテハケ、内面ココハケ。底ナド。胴部ハケ・ココナデ。	やや粗 ~4mmの小石含む	灰白	口縁1/4	胴部存在	
031-01	SD11層	土師器 上腹部	(16.0)	—	—	口縁部ココナデ、体面内外面ココハケ。内面に磨合痕あり。	やや粗 ~2mmの小石含む	灰白	口縁存在		
029-01	SD11層	土師器 上腹部	(16.0)	—	—	口縁部端部削り返す。口縁部ココナデ、体面外面ハケ。体面内面に磨合痕あり。	やや粗 ~2mmの小石含む	黄褐色	口縁・体面	体面外面残存	
50	B c38	土師器 上腹部	(19.7)	—	—	口縁部ココナデ、端部削み。胴部以下ハケナド。	やや粗 ~4mmの小石含む	黄褐色	口縁1/4		
031-01	SD11層	土師器 上腹部	(20.8)	—	—	口縁部ココナデ、体面外面タテハケ、内面ナド。	やや粗	黄褐色	口縁1/6		
016-01	B c39	土師器 上腹部	(20.9)	—	—	口縁部ココナデ、内面ココハケ。体面外面ハケ、内面ナド。	やや粗 3mmの石含む	黄褐色	口縁1/2		
94	B e41	土師器 上腹部	15.8	—	—	口縁部ココナデ、体面外面ハケ後へり削り後ハケ磨き、内面ハケ。	黄褐色の石・黄砂粒を含む	黄褐色	口縁1/2		
55	B c38	土師器 上腹部	(18.9)	—	—	口縁部ココナデ。体面内外面ハケ。	黄褐色の石 ~2.5mmの小石含む	黄褐色	口縁1/4		
016-04	SD11層	土師器 上腹部	16.6	—	—	口縁部ココナデ、へり磨き。体面外面タテハケ、内面へり削り。	黄	黄褐色	口縁存在		
56	B c38	土師器 上腹部	—	7.5	—	外面タテハケ。体面内面・胴部内面ハケ。胴部ココナデ。	やや粗 ~4mmの石含む	黄褐色	胴部ほぼ完全		
027-02	SD11層	土師器 上腹部	—	7.6	—	外面タテハケ。体面内面ハケ。胴部内面ナド・オエエ。	やや粗	黄褐色	胴部完全		
58	B c39	土師器 上腹部	—	—	—	底面外面ハケ、内面ナド。胴部外面ハケ・削り文、内面ナド・ココナデ。	やや粗 ~2mmの石含む	灰白	胴部1/2		
028-01	SD11層	土師器 上腹部	(24.1)	—	—	口縁部ココナデ。杯部内外面ハケ後へり磨き。	やや粗 ~1.5mmの砂粒を含む	黄褐色	口縁1/4		
60	B Y36	赤土器 高杯 A	(23.5)	—	—	口縁部内外面へり磨き。	やや粗 ~4mmの石含む	黄褐色	口縁1/4	磨耗が著しく調整不明瞭	
031-01	SD11層	赤土器 高杯 A	(23.5)	—	—	口縁部ココナデ。杯部内外面へり磨き。	やや粗 ~2mmの石含む	黄褐色	口縁1/2		
023-02	SD11層	赤土器 高杯 A	(25.2)	—	—	杯部内外面タテハケ後へり磨き。胴部内面に磨合痕直線・3方透孔・へり磨き、内面ハケ。	黄 ~3mmの小石含む	黄褐色	杯部1/8		
033-01	SD11層	赤土器 高杯 A	(24.8)	—	—	口縁部端部へり磨き後ココナデ。杯部内外面へり磨き。	黄	黄褐色	口縁1/2		
61	B Y38	赤土器 高杯 A	26.3	—	—	口縁部内外面とにもへり磨き。	やや粗 ~1mmの石含む	黄褐色	口縁1/2		
036-04	SD11層	赤土器 高杯 A	(13.8)	—	—	杯部内外面へり磨き。胴部外面に磨合痕直線・3方透孔・へり磨き、内面ハケ。	やや粗 ~5mmの砂粒を含む	黄褐色	胴部1/8		
68	B c38	土師器 高杯 B	(8.8)	—	—	杯部外面下平へり磨き、内面ナド。杯部上平磨削のため不明。	やや粗 ~2mmの砂粒を含む	黄褐色	口縁1/5		
008-04	SD11層	土師器 高杯 B	(14.2)	—	—	口縁部端部ココナデ。杯部内外面へり磨き。	黄 ~1.5mmの石含む	黄褐色	口縁1/5		
037-01	B c38	土師器 高杯 B	12.4	—	—	口縁部端部ココナデ。杯部内外面へり磨き。磨合痕直線・3方透孔・へり磨き。	やや粗 ~3mmの石含む	黄褐色	口縁存在		
67	B c38	土師器 高杯 B	—	—	—	杯部内外面へり磨き。胴部外面へり磨き、3方透孔。外面オエエ、削り痕。	やや粗 ~2.5mmの石含む	黄褐色	杯部完全		
019-07	SD11層	土師器 高杯 B	(8.8)	—	—	杯部外面に磨合痕直線・3方透孔・へり磨き、内面ナド。	やや粗 ~4mmの石含む	黄褐色	杯部完全		
69	B e40	土師器 高杯 B	(11.3)	—	—	杯部外面に3本の磨合痕直線・3方透孔・へり磨き、内面ナド・ハケ。3方透孔ココナデ。	やや粗 ~3mmの石含む	黄褐色	胴部1/8		
038-01	SD11層	土師器 高杯 B	(15.5)	—	—	外面ハケ後へり磨き・3方透孔、内面ハケ。	黄 ~1.5mmの小石・砂粒	黄褐色	胴部1/4		
040-04	SD11層	土師器 高杯 B	(20.4)	—	—	口縁部ココナデ。削り文、林状浮文。体面外面ナド、内面残ナド。	やや粗	黄褐色	口縁1/7		
009-05	SD11層	土師器 高杯 B	(21.0)	—	—	口縁部外面に削り文。体面外面ハケ、へり削り、内面ココハケ。	やや粗 ~3mmの石含む	灰白	口縁1/7		
75	B e40	土師器 高杯 B	(17.0)	(4.0)	17.0	底部内外面ハケ。体面外面に磨合痕直線・直線文・削り文刻み。体面ハケ。	黄 ~1mmの小石含む	黄褐色	全体7/8		
039-01	B c39	土師器 高杯 B	(16.6)	—	—	口縁部外面ナド、内面ハケ。体面外面へり削り・オエエ、内面ココナデ。	やや粗	黄褐色	口縁1/4		
017-03	SD11層	土師器 高杯 B	—	5.6	—	杯部内外面ハケ後へり磨き。平底。	やや粗 ~1mmの砂粒を含む	黄褐色	体部1/4		
79	B Y37	土師器 高杯 B	—	—	—	杯部外面に磨合痕直線。体面外面へり磨き、内面ナド。	やや粗	黄褐色	胴部1/3		
027-06	SD11層	土師器 高杯 B	—	—	—	杯部ココハケ。ナド。胴部外面磨合痕直線・削り文、内面ハケ・削り痕。	黄 ~2mmの小石砂粒を含む	黄褐色	杯部1/4		
80	B c38	土師器 高杯 B	—	—	—	杯部外面に磨合痕直線・削り文、他はナド。	黄 ~4mmの石含む	黄褐色	体部1/4	体部最大径 9.9cm	
040-02	SD11層	土師器 高杯 B	82	2.5	重12.4	口縁3.0 ナド。	黄 黄砂粒を含む	黄褐色	口縁1/4	完整	
81	B e40	土師器 高杯 B	長10.6	幅9.5	—	両面中央に磨打痕あり。	—	—	—	完整	
008-02	B c39	土師器 高杯 B	(26.2)	—	—	口縁部ココナデ。杯部内外面に縦方向のへり磨き。	やや粗	黄褐色	口縁1/2 杯部1/4		

3 方形周溝墓

方形周溝墓は推定を含めて10基確認された。これらはA地区の南部に集中し、さらに調査区の南側に広がるものと考えられる。

土層断面によれば、周溝は後世の遺構と同一面から掘り込まれていたが、その埋土は検出面と判別が非常に困難であったため、結局本来の検出面より20cm程下げた部分で検出した。したがって、各方形周溝墓は周溝底をわずかに検出したに過ぎず、中には土層断面にのみ確認し得た周溝もあった。なお、規模は周溝底の墳丘傾斜変換点線で計測した。

S X 1 (第19図 P L 8・34)

B地区の南西部で確認されたが、その大半は調査区外である。また、検出できたのは東周溝の一部だけで、他は土層断面によってその形状を推定した。

規模は南北4.3m以上で、東西は不明である。周溝は北溝で幅0.45~0.6m、深さ0.2mである。埋土は黄色砂が若干混じる灰色粘質土である。

遺物出土状況 東周溝出土遺物は細片のみで図化できるものはないが、上部掘削時、北周溝中央付近から比較的まとまって出土した85は、S X 1に伴う可能性が高い。

遺物 85は高杯Aの杯部である。内湾気味の口縁部は端部で肥厚し、内傾面をもつ。内外面ともタテ方向のヘラ磨き調整である。

S X 2 (第20図 P L 10・34・35)

S X 1の約2m東で確認されたものであるが、検出できたのは東周溝の一部だけである。遺物のまとまって出土したJ31小地区付近を周溝と仮定すれば、やや歪んだ東西約5m、南北約6mの規模と推定できる。

東周溝は、検出面で幅0.2~0.4m、深さ0.1m、長さ4.7mほど確認された。埋土は灰色砂質土である。周溝の切合い関係からS X 4より新しい。

遺物出土状況 J31小地区付近からは、89~95が出土した。完形近くに復元できるものが多く、他の部分ではこのような状況は認められなかったことから、墳丘から転落した一群の可能性が高い。なお、東周溝からは細片が出土しているが、図示できるものはない。

遺物 壺D(89)は直立する短い口縁をもつもので、

体部中位を穿孔する。高杯A(90~92)の内、90と91は内湾する長い口縁部の端部に内傾面をもつ。脚部は直線的で端部近くでわずかに内湾する。3方向透孔と幅の狭い櫛描直線文帯は上位に集中する。92は脚部の櫛描直線文が欠落し、端部は内湾する。甕A4(93)の口縁部はS字甕と類似するが、肩部外面に刺突列文があり、頸部内面のヨコハケがない点が異なる。甕B2(94)は典型的なS字甕A1類で、頸部は屈曲せずに丸みを帯びる。体部には単斜のハケが施される。95は台付甕の脚台部と思われる。

S X 3 (第19図 P L 10・11・34)

S X 2の約4m東で確認したもので、今回検出した方形周溝墓の中では最も規模の小さなものである。

南東隅部は検出できなかったが、東西4.3m、南北5.4mと推定できる。平面形は長方形に近いが、北西部が外側に張り出し気味である。少なくとも検出した部分では周溝の途切れる部分はなく、周溝は全周するか1隅が切れるものと考えられる。

周溝は幅0.4~0.65m、深さ0.05~0.1mで、埋土は、灰色粘質土に若干の黄色粘質土が混じる。

遺物出土状況 北周溝の中央やや西よりで、周溝底から86と88が出土した。88は横倒しの状態である。86は口縁部の一部を欠く以外は完形で、供献土器の可能性はある。

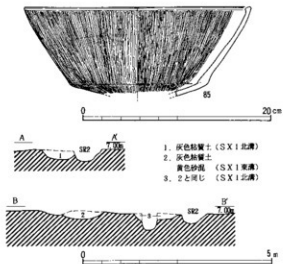
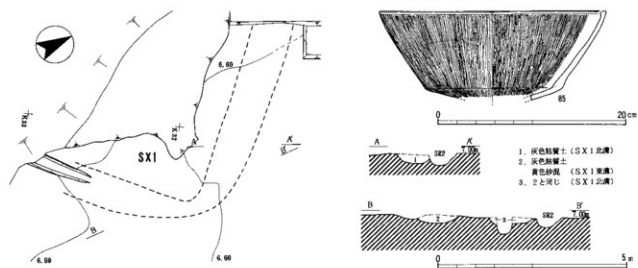
遺物 甕B1(88)は、口縁部が直立し端部には内傾面をもち、外面には刺突文を施す。頸部は強く屈曲し、内面には粗いヨコハケが残る。肩部外面には2帯のヨコハケを施す。脚台部は短く、端部内面の折返しは見られない。内外面ともハケ調整が主体で、脚台部には羽状のハケが残る。壺D(86)は内湾する口縁部と下影れの体部からなる。体部内面をハケ調整する以外は、ヘラ磨きを施す。

S X 4 (第20図 P L 9)

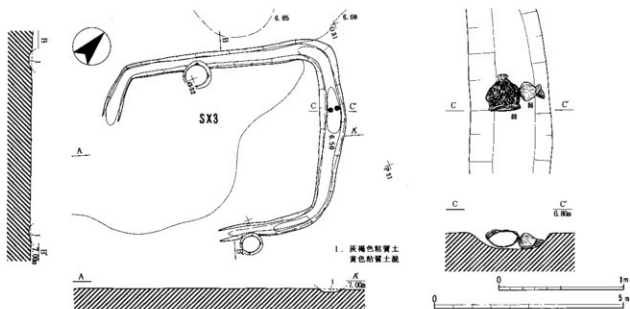
S X 2の南西部と一部重複する位置で周溝の北東隅付近が検出された。規模・形状は、ほとんどが調査区外のため不明である。周溝は幅0.6~0.9m、深さ0.3mで、埋土は灰色粘質土である。土層断面にみられる周溝の切合い関係から、S X 2より古い。

遺物出土状況 東周溝から96が出土しているが、北周溝は遺物は出土しなかった。

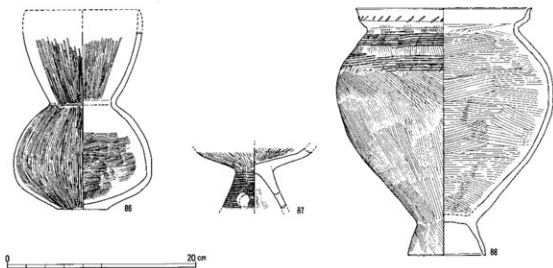
遺物 96は高杯Aの脚台部である。脚部に櫛描直



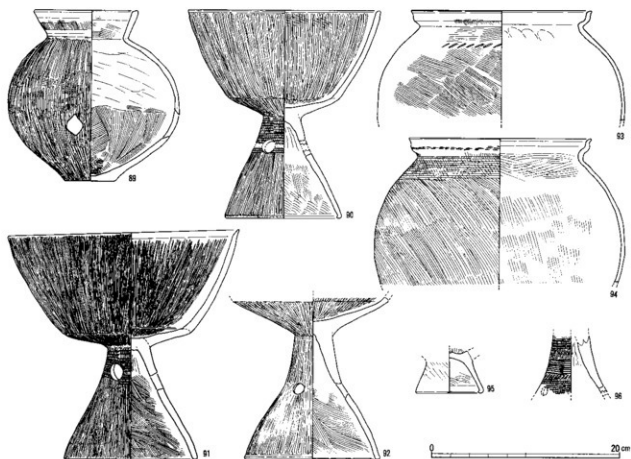
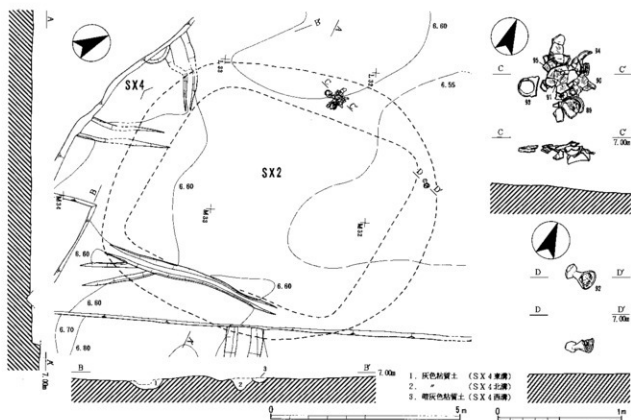
1. 灰色粘質土 (SX1北溝)
2. 灰色粘質土
黄色砂質土 (SX1東溝)
3. 2と同じ (SX1北溝)



1. 灰褐色粘質土
黄色粘質土層



第19圖 SX1・3実測図 (1:100)、遺物出土状況図 (1:30)、遺物出土状況 (1:4)



第20图 SX2·4实测图(1:100)、遗物出土状况图(1:30)、遗物实测图(1:4)

線文と透孔が確認できる。

S X 5 (第21図 P L 9・35)

S X 4の約3m東で検出された。北半の周溝は断続的に検出されたが、南周溝は検出面以下20~30cmが青色に変色していたために確認できなかった。平面形は南北が若干長い長方形と考えられ、北西隅が張り出す。形態は明確でないが、少なくとも東・北・西各辺中央には陸橋部をもつことはない。規模は、東西5.0m、南北5.5m以上である。周溝は、最も残りの良い北周溝で幅1.0m、深さ0.2mである。

遺物出土状況 各周溝から出土した遺物は、細片がほとんどで図示できるものはない。しかし、上部掘削中にM34小地区から出土した97は、その位置関係からS X 5に伴う可能性が高い。

遺物 97は高杯Aの脚部で、端部は内湾する。透孔は千鳥状に2段あり、上半に櫛溝直線文を断続的に施す。やや古い様相を残すものである。

S X 6 (第22図 P L 12・35・36)

S X 5の約4m東で検出されたもので、周溝のほぼ全容を確認できた。平面形は方形を基調とするが、北西隅がやや外側に張り出す。形態は東周溝の中央が途切れて陸橋部となり、外側に拡張傾向を示す。周溝内側ラインは直線的であるのに対して外側ラインは外側に膨らんでいる。規模は、東西5.1m、南北5.0mである。周溝は幅0.5~1.2m、深さは残りの良い部分で0.2m、埋土は褐色砂質土である。

遺物出土状況 北東周溝底から102が横倒しの状態で、南周溝からは、4.2m離れて擦石(103)と石皿(104)が周溝底から若干浮いた状態で出土している。また、99~101は南東周溝部付近で上部掘削中に出土したもので、S X 8に伴う可能性が高い。

遺物 壺C(101)は頸部のくびれは弱い。口縁部には2条、体部には2条の二枚貝腹縁による連弧文がある。99・100は小形鉢で内外面とも丁寧へら磨き調整されている。99には片口が付く。壺A(102)は、短く延びる口縁部と中位に最大径をもつ体部からなる。体部外面はへら磨き調整、内面下位にはハケメが、上位には粘土巻上げ痕が残る。

103は長さ12cm、幅6.8cmの自然石(チャート)を利用した擦石で、一方の端部には朱が付着している。104は103とセットになると考えられる石皿で、安山

岩である。上面は平滑に整えているが、側面や底面は粗割りのままである。上面には径約11cmの範囲に朱が付着し、中央は擦り減って窪んでいる。

S X 7 (第21図 P L 11・35)

S X 6の約3m南東で検出されたが、南半は調査区外で不明である。確認された周溝は、西周溝の一部と北周溝の西半部だけであるが、南壁の土層断面で認められた落込みを東周溝と考えるならば、東西6.8m、南北5.4m以上の規模となる。

周溝北西隅部は、他の部分より浅くかつ細くなる。周溝の内側ラインは直線的で、外側ラインは外に膨らみ気味である。周溝は残りの良い部分で幅0.8m、深さ0.3m、埋土にはふい褐色砂質土である。

遺物出土状況 S X 7に確実に伴う遺物は出土していないが、上部掘削中にS36小地区から出土した98は、S X 9に伴う可能性が高い。

遺物 壺A(98)は、口縁端部に直立する面をもち、頸部に断面三角形の突帯がある。体部は球形で、外面をへら磨き調整する。

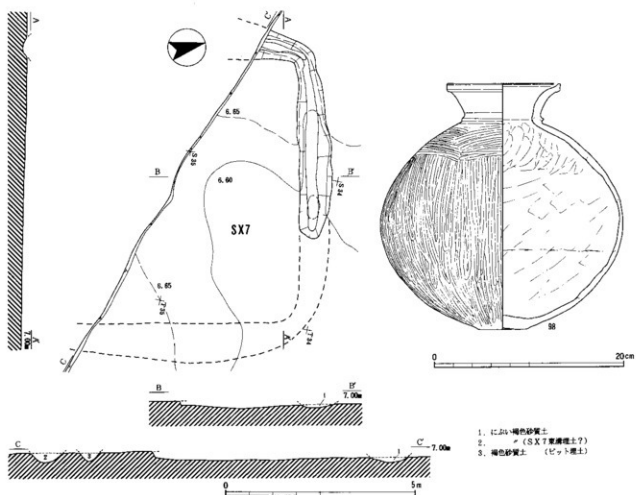
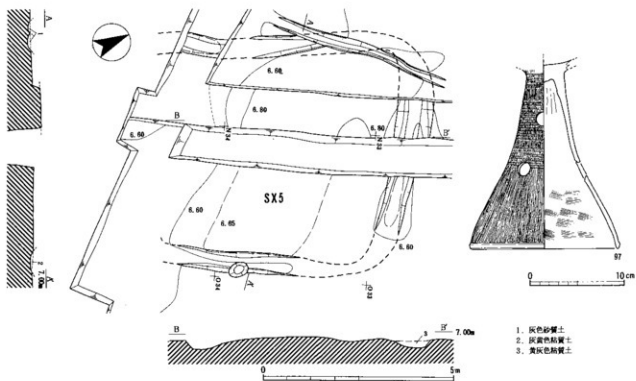
S X 8 (第23図 P L 12・13・36)

S X 7の約3m北東で検出されたもので、ほぼ全容を確認できる。規模は、東西5.5~6.0m、南北5.5mで、周溝は幅0.6~1.2m、残りの良い部分で深さ0.2mである。平面形は方形だが、北西隅部がやや外側に張り出す。東周溝の中央が途切れ、幅1.5mの陸橋部を有するが、S X 6のように拡張傾向はみられない。

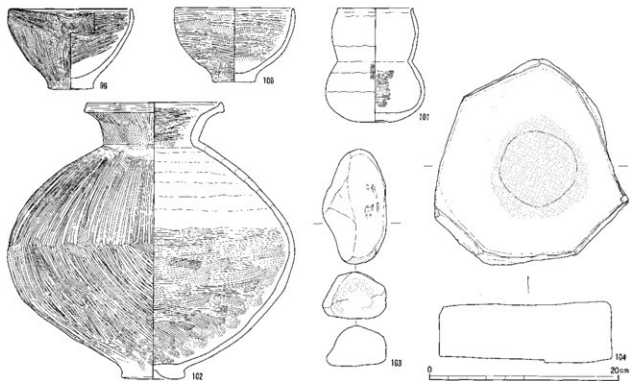
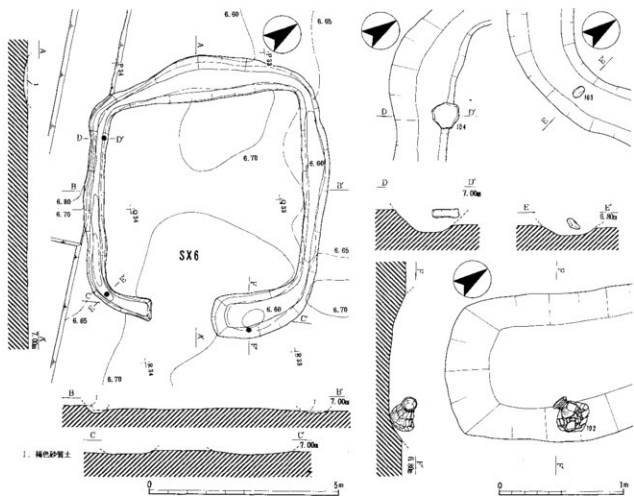
周溝北西隅部は、南西隅部とともに他より浅くかつ狭くなっている。周溝埋土は、ほとんどが灰褐色砂質土であるが、北周溝の中央部では上部に黄褐色粘質土が認められた。

遺物出土状況 南西周溝中央の底から105が出土しているが、現位置を保つものではなく、転落し割れたものと考えられる。また、これ以外でも各周溝から遺物が出土しているが、いずれも細片で図示できるものはない。

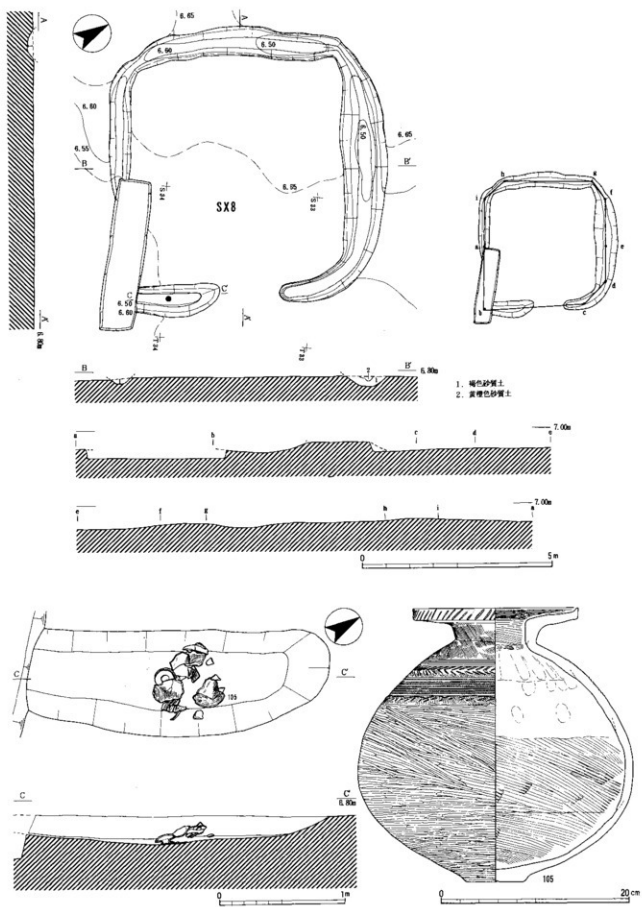
遺物 壺A 3(105)は直立する頸部と水平方向に延びる口縁部からなり、端部をつまみ上げ、口縁端部外面に櫛溝刺突文がある。体部最大径は下位にあり、文様は肩部上半に集中し、櫛溝直線文・羽状刺突文・二枚貝腹縁による連弧文などを施す。



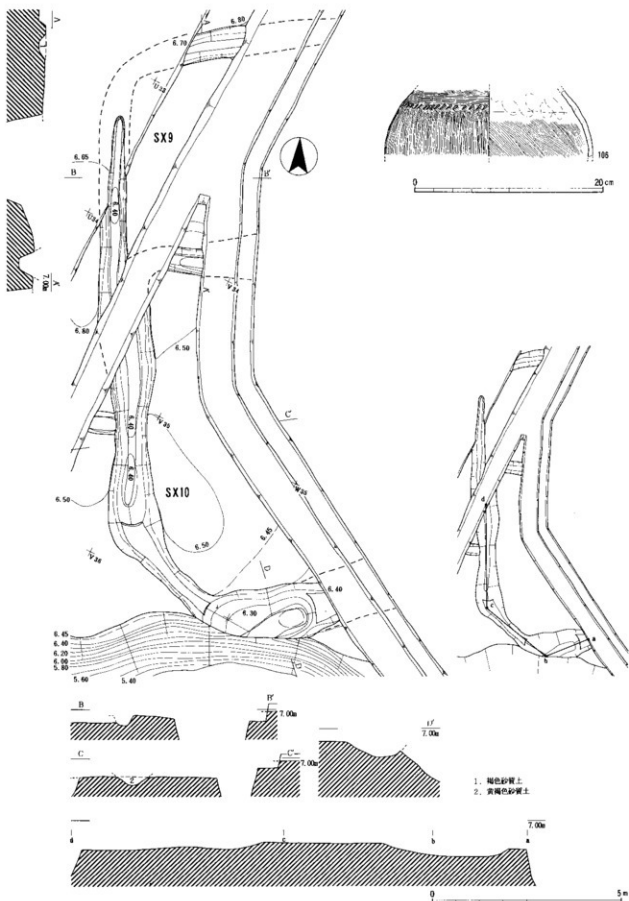
第21図 SX5・7実測図(1:100)、遺物実測図(1:4)



第22図 SX6実測図(1:100)、遺物出土状況図(1:30)、遺物実測図(1:4、トーンは朱附着範囲)



第23图 SX 8 实测图 (1:100)、遗物出土状况图 (1:30)、遗物实测图 (1:4)



第24图 SX9·10实测图(1:100)、遺物实测图(1:4)

S X 9 (第24図 P L13)

S X 8のすぐ東側で検出されたものであるが、東半部が調査区外となり、全体の形状は不明である。周溝も部分的に確認されたに過ぎないが、その位置関係から、S X 10の北周溝を利用し北側に連続して築造されたものと考えられる。規模は東西5.1m以上、南北4.8m、西周溝で幅0.7m、深さ0.3mである。

遺物出土状況 周溝からの遺物の出土は少なく、図示できるものでは、106が西周溝から出土しているに過ぎない。

遺物 106は小形壺の体部である。肩部に櫛描直線文・刺突列文がある。

S X 10 (第24図)

S X 9の南側で検出されたが、東半部は調査区外となる。規模は、東西5.3m以上、南北8.5mであり、今回検出した方形周溝墓の中では最も規模の大きなものである。形態は明らかでないが、少なくとも調査区内では陸橋部は存在しない。各周溝はほぼ正方位を向き、幅0.6~1.5m、深さ0.1~0.4mである。周溝南西隅部は他より浅くかつ細くなり、南周溝西寄り是一段低くなる。また、切合い関係から河道S D 1より新しい。

遺物出土状況 周溝からの遺物の出土は非常に少なくかつ細片がほとんどであり、図示できるものはないが、手焙形土器などがある。

4 下層出土遺物 (第25図 P L37)

古墳時代後期以降の遺構を検出した面以下(以下「下層」とする。)にも遺物を含むことから、この部分についても調査を行った(結果的に方形周溝墓を確認)。そこからの出土遺物の多くは、前述の方形周溝墓に伴うものと考えられ、限定された位置で完形近くに復元できるものは、方形周溝墓出土として扱ったが、それ以外はその帰属を特定することが困難なため、ここに含めた。また、下層からは明らかに時期の遡る弥生時代中期後葉から後期前半の遺物も出土しており、河道の二次堆積に伴うものと考えられる。ここではこれらを一括して記述する。

壺 壺A 1(110・111)の内、110はいわゆる宮廷式土器で、口縁部外面に櫛描横線文が、内面には羽状刺突列文と竹管文がある。頸部には断面三角形の突帯が付き、肩部に櫛描直線文を施すが、朱彩は認

められない。111は口縁端部に2個一対の円形浮文が付く。肩部外面には櫛描直線文帯の間に波状文と刺突文を施す。壺A 2(109)の口縁端面には単斜の刺突列文と円形浮文がある。壺C(112・113)の内、112は口縁部内外面をへら磨き調整する。113は卵形の体部で、ハケ調整が主体である。壺D(107・108)の口縁端部に内傾面をもち、内外面をへら磨き調整する。107の頸部には櫛描直線文を施す。

壺 壺A 2(114)は、口縁部外面に刺突列文、頸部外面に櫛描直線文がある。壺B 1(115)は、口縁部外面には押し刺突列文があり、頸部内面にヨコハケ目が残る。116・117は台付壺の脚台部で、117は壺Bの脚台部と思われる。

鉢(118)口縁端部外面に突帯が付き、糜状文と6本一組の棒状浮文(8方向か)を施す。磨耗は少なく、弥生時代中期後葉に比定できる。

高杯 高杯A(119~124・127~129)の杯部は、口縁部の直線的な119と内湾する120~124があり、いずれも口縁端部には内傾面をもつ。脚部では、直線的に開き縦位の透孔列のある127は後期初頭に位置付けられる。他には、裾部が開くもの(128)、内湾するもの(129)などがある。低平な125・126は、脚付壺の脚部の可能性がある。高杯Bの130は、杯部の破片で、内外面ともへら磨き調整する。

ミニチュア土器(131~133) 131は脚付壺、132は高杯、133は壺を模したものであろう。

土鍾(134) 直径3.2cmの球形の土鍾で、孔径0.9cm、重さ28.4gである。

5 溝

S D 2・3 (第26図)

いずれもA地区の南東部で検出された。S D 2は小規模の自然流路と思われる。埋土は灰白色シルトで、同様の埋土のS D 3も位置関係から一連のものと思われる。

遺物は土師器の小片が多いが、須恵器を含むことから古墳時代後期以降のものと考えられる。

6 土坑

S K 1・2 (第26図)

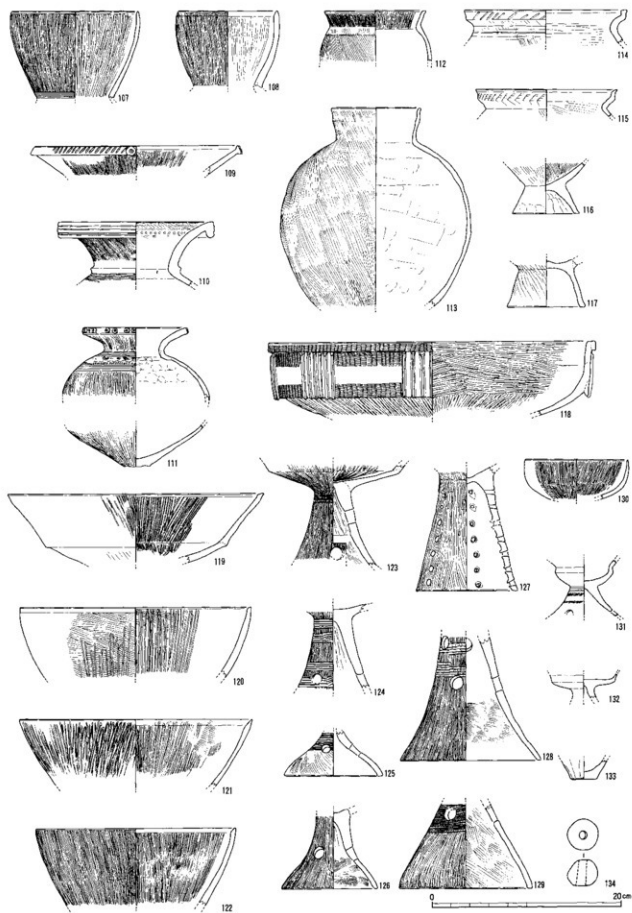
S K 1としたが、S D 2に伴う落ち込みと考えた方が良いかもしれない。埋土はS D 2・3と同様で、須恵器と土師器が出土した。

第4表 方形周溝墓一覧表

遺構名	形態	堀		遺物	時期	切り合い	備考
		墳	溝				
S X 1	不明	南北 4.3m以上、東西不明	幅0.45~0.6m、深さ 0.2m	高杯	矢山式中段階	—	
S X 2	不明	東西約 5m、南北約 6m	幅 0.2~0.4m、深さ 0.1m	壺・高杯・甕	矢山式中・新段階	S X 4・5 階溝を切る	
S X 3	不明	東西 4.3m、南北 5.4m	幅 0.4~0.60m、深さ 0.05~0.1m	壺・高杯・甕	矢山式中段階	—	
S X 4	不明	不明	幅 0.6~0.9m、深さ 0.3m	高杯	矢山式中段階?	S X 2 階溝に切られる	
S X 5	不明	東西 3.0m、南北 3.5m以上	幅 1.0m、深さ 0.2m	高杯	矢山式中段階	S X 2 階溝に切られる	甕類検出箇の色で検出できず
S X 6	東辺中央に陸橋部	東西 5.1m、南北 5.0m	幅 0.5~1.2m、深さ 0.2m	壺・鉢・磨石・石皿	矢山式	—	
S X 7	不明	東西 6.8m、南北 5.4m以上	幅 0.8m、深さ 0.3m	壺	矢山式	—	
S X 8	東辺中央に陸橋部	東西 5.5~6.0m、南北 5.5m	幅 0.6~1.2m、深さ 0.2m	壺	矢山式	—	
S X 9	不明	東西 5.1m以上、南北 4.8m	幅 0.7m、深さ 0.3m	壺	矢山式	—	S X 10の北溝を利用して築造
S X 10	不明	東西 5.3m以上、南北 8.5m	幅 0.6~1.5m、深さ 0.1~0.4m	手鏡形	矢山式	S D 1 埋土を切る	

第5表 遺物一覧表 3 (方形周溝墓)

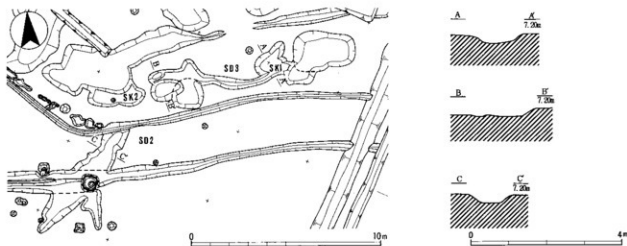
No(報告) (位跡)	出土位置	部 種	計測値 (cm・g)			形 形・調整技法の特長	胎 土	状態	色 調	残存度	備 考
			口 径	底 径	部 高						
85	A 131	土師器 高杯 A	(23.7)	—	—	口縁端部コナダ。杯部内外面へラ磨き。	やや粗	茶	焼	口縁1/2	
044-01	A 131	土師器 高杯 A	—	5.3	—	口縁部内外面へラ磨き。杯部外面へラ磨き。杯部内面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 小石を含む	良	焼	杯部完全 口縁1/2	
86	A N21	土師器 高杯 A	—	—	—	杯部内外面へラ磨き。脚部外面に2帯以上の磨造 痕跡・磨造痕跡・3方透孔、内面ナダ。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	茶	焼	杯部1/4	
046-01	A N21	土師器 高杯 A	—	—	—	口縁端部内外面に刺突列文。杯部外面タテハ後2帯の ヨコハタ、内面ヨコハタ。脚部内面ナダ。	やや粗 ~ 4mmの 砂粒を含む	良	灰白	杯部完全 口縁1/4	
88	A X32	土師器 高杯 A	18.4	8.1	28.0	口縁端部コナダ。杯部内外面へラ磨き。	やや粗 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	杯部完全 口縁1/3	脚部穿孔
050-01	A K22	土師器 高杯 A	(10.5)	5.0	18.0	口縁部内外面へラ磨き。杯部外面タテハ後2帯の ヨコハタ、内面ヨコハタ。	やや粗 ~ 1.5mmの 砂粒を含む	茶	焼	杯部完全 口縁1/2	
047-03	A K22	土師器 高杯 A	19.5	12.1	21.9	口縁端部コナダ。杯部内外面へラ磨き。脚部外面 磨造痕跡・3方透孔、内面ナダ。	やや粗	良	焼	灰白	口縁2/3
91	A K22	土師器 高杯 A	24.1	14.0	34.4	口縁部内外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き。3方透 孔、内面ナダ。脚部コナダ。	磨 ~ 5mmの 小石・砂粒を含む	茶	焼	灰白	口縁1/2
046-02	A K22	土師器 高杯 A	—	14.2	—	口縁部コナダ。杯部外面タテハ後2帯のヨコハタ、 内面ヨコハタ。脚部コナダ。	やや粗 ~ 1.5mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/4	
92	A K21	土師器 高杯 A	—	14.2	—	杯部内外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き。3方透 孔、内面ナダ。脚部コナダ。	磨 ~ 5mmの 小石・砂粒を含む	茶	焼	灰白	口縁1/2
046-02	A K21	土師器 高杯 A	—	14.2	—	杯部内外面へラ磨き。脚部外面へラ磨き。3方透 孔、内面ナダ。脚部コナダ。	磨 ~ 5mmの 小石・砂粒を含む	茶	焼	灰白	口縁1/2
93	A K22	土師器 高杯 A	(18.9)	—	—	口縁部内外面へラ磨き。杯部外面タテハ後2帯のヨコハタ、 内面ヨコハタ。脚部コナダ。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	茶	焼	灰白	脚部完全 口縁1/4
048-01	A K22	土師器 高杯 A	14.1	—	—	口縁部内外面へラ磨き。杯部外面タテハ後2帯のヨコハタ、 内面ヨコハタ。脚部コナダ。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	茶	焼	灰白	脚部完全 口縁1/4
94	A K22	土師器 高杯 A	—	(6.9)	—	外内面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/2	
047-01	A K22	土師器 高杯 A	—	(6.9)	—	外内面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/2	
95	A K22	土師器 高杯 A	—	(6.9)	—	外内面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/2	
047-02	A K22	土師器 高杯 A	—	(6.9)	—	外内面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/2	
96	A K21	土師器 高杯 A	—	—	—	外周3帯の磨造痕跡・刺突列文・へラ磨き、内 面ナダ、灰白焼。	磨 砂粒含む	良	焼	脚部1/3	
036-02	S X 4 階溝	土師器 高杯 A	—	—	—	外周に4帯の磨造痕跡・2段3方透孔・へラ磨 き、内面ナダ・ナダ。端部コナダ。	やや粗	茶	焼	灰白	脚部1/2
87	A M41	土師器 高杯 A	—	(15.5)	—	口縁部コナダ。脚部内外面へラ磨き。杯部外面へラ磨 き、内面ナダ。脚部コナダ。	やや粗 ~ 1mmの 砂粒を含む	良	焼	口縁1/2	
98	A S30	土師器 高杯 A	11.8	5.0	26.1	口縁部内外面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。杯部 外面へラ磨き、内面ナダ。	やや粗 ~ 1mmの 砂粒を含む	良	焼	口縁1/2	
057-01	A P22	土師器 高杯 A	13.4	4.8	8.5	口縁部内外面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。 杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	磨 ~ 1mmの 小石を含む	良	焼	口縁1/2	
051-03	A P22	土師器 高杯 A	—	—	—	口縁部内外面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。 杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	磨 ~ 1mmの 小石を含む	良	焼	口縁1/2	
100	A P31	土師器 高杯 A	(12.5)	4.5	7.8	内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/4	
054-02	A P31	土師器 高杯 A	(12.5)	4.5	7.8	内外面へラ磨き。	磨 ~ 1mmの 砂粒を含む	茶	焼	口縁1/4	
101	A P36	土師器 高杯 A	7.8	—	12.0	磨造り調整不明。口縁部・杯部内外面に二枚瓦 縁透風文。杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	磨	良	焼	全体1/2	
051-02	A P36	土師器 高杯 A	7.8	—	12.0	磨造り調整不明。口縁部・杯部内外面に二枚瓦 縁透風文。杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	磨	良	焼	全体1/2	
102	A P32	土師器 高杯 A	14.1	6.6	29.2	口縁部内外面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。 杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	やや粗 ~ 1mmの 小石を含む	良	焼	灰白	杯部完全 口縁1/2
052-01	A P32	土師器 高杯 A	14.1	6.6	29.2	口縁部内外面へラ磨き。杯部内外面へラ磨き。 杯部外面へラ磨き、内面ナダ。	やや粗 ~ 1mmの 小石を含む	良	焼	灰白	杯部完全 口縁1/2
103	A P36	土師器 高杯 A	長12.0	幅 6.8	重 485	チャート。 方の端部に朱付着。	—	—	—	—	完形
053-01	A P36	土師器 高杯 A	長12.0	幅 6.8	重 485	チャート。 方の端部に朱付着。	—	—	—	—	完形
104	A O36	土師器 高杯 A	長19.5	幅 12.7	—	六角形に磨造り。上面は平滑になり、中央僅約11 mmの範囲に朱付着。	—	—	—	—	完形
053-02	S X 6 階溝	土師器 高杯 A	長19.5	幅 12.7	—	六角形に磨造り。上面は平滑になり、中央僅約11 mmの範囲に朱付着。	—	—	—	—	完形
105	A S30	土師器 高杯 A	17.3	6.0	29.0	口縁部内外面に刺突列文。杯部外面に磨造痕跡・ 刺突列文・耳縁磨造痕跡・へラ磨き。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	良	磨・黒黒	杯部完全 口縁1/3	
058-01	S X 3 階溝	土師器 高杯 A	—	—	—	口縁部内外面に刺突列文。杯部外面に磨造痕跡・ 刺突列文・耳縁磨造痕跡・へラ磨き。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	良	磨・黒黒	杯部完全 口縁1/3	
106	A T31	土師器 高杯 A	—	—	—	口縁部内外面に刺突列文。杯部外面に磨造痕跡・ 刺突列文・耳縁磨造痕跡・へラ磨き。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	良	磨・黒黒	杯部完全 口縁1/3	
056-04	S X 9 階溝	土師器 高杯 A	—	—	—	口縁部内外面に刺突列文。杯部外面に磨造痕跡・ 刺突列文・耳縁磨造痕跡・へラ磨き。	やや粗 ~ 2mmの 砂粒を含む	良	磨・黒黒	杯部完全 口縁1/3	



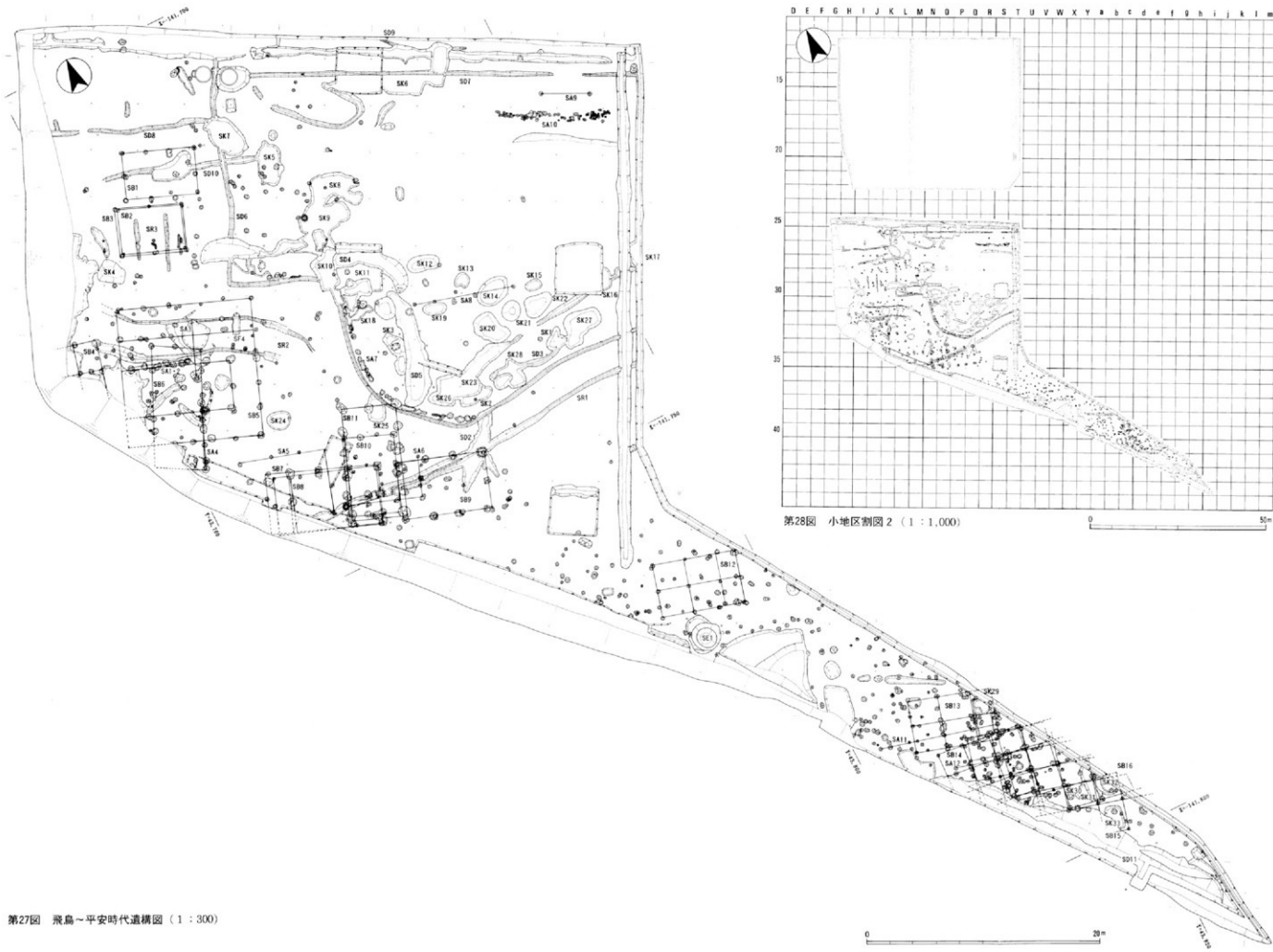
第25图 下層出土遺物実測図(1:4)

第6表 遺物一覧表4 (下層出土遺物)

No(層内) (發掘)	出土位置	部種	計測値 (cm・g)			形状・調整技法の特徴	胎土	器底	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
107 059-06	A J31 T7E	土師器 段D	(13.2)	-	-	口縁部内外面ヘラ磨き。高麗ココナデ。頸部外面に磨痕直線文。	やや粗	黒	にぶい橙	口縁1/8	
108 051-01	A Q34 T7E	土師器 段D	10.3	-	-	内湾する口縁。端部に内傾。口縁端部ココナデ。口縁部内外面ヘラ磨き。	やや密 ~1.5mmの砂粒を含む	黒	にぶい橙	口縁1/3	
109 059-01	A N21 T7E T r	土師器 段A2	(21.3)	-	-	口縁部に刺突列文・円形浮文。口縁部内外面ヘラ磨き。	やや密 磨砂粒含む	灰白	橙	口縁1/6	
110 019-04	A M3 T7E	土師器 段C	(16.2)	-	-	口縁部外面横線文。内面に羽状刺突列文・竹管文。頸部ハケ。突帯。体部外面に磨痕直線文。	やや粗 ~3mmの砂粒を含む	良橙	橙	口縁1/3	
111 001-04	A H32 T7E	土師器 段A1	10.6	2.6	-	口縁端部に円形浮文。頸部に磨痕直線文・波状文・刺突列文。	粗 ~3mmの砂粒を多く含む	黒	にぶい赤褐・黒灰	口縁完存 底面完存	
112 059-04	A O32 T7E	土師器 段C	(10.5)	-	-	口縁部内外面ヘラ磨き。高麗ココナデ。体部外面タテハケ。内面ナデ。	やや密	黒	にぶい橙	口縁1/6	
113 060-01	A J32 T7E	土師器 段C	(9.2)	-	-	口縁部ハケ後ナデ。体部外面ハケ。内面オオセ後ナデ。	やや粗 ~3mmの砂粒含む	やや不良	にぶい橙	口縁1/3	
114 017-01	A L32 T7E	土師器 段A3	(17.1)	-	-	口縁部外面に刺突列文。頸部内外面ナデ・ココナデ。	やや密 ~1mmの石稜角を含む	やや不良	にぶい橙	口縁1/4	
115 017-06	A J32 T7E	土師器 段B1	(14.9)	-	-	口縁部ココナデ。外面に刺突列文。体部内外面ハケ。	やや密 ~3mmの石稜角を含む	黒	明灰	口縁1/6	
116 064-04	A N32 T7E	土師器 段A2	-	(6.9)	-	体部内外面ハケ。頸部内外面ナデ。オオセ。	やや密 ~1mmの小石を含む	灰白	黄緑	頸部1/2	
117 061-01	A K32 T7E	土師器 段A	-	(8.1)	-	体部内面ココナデ。頸部外面ハケ。内面オオセ・ナデ。	やや密 ~1mmの小石を含む	灰白	黄緑	頸部1/2	
118 051-01	A S34 T7E	弥生土器	(34.8)	-	-	口縁部に横線文・6本一組の縁状浮文8方向。内面ヘラ磨き。	密	良	にぶい黄緑	口縁1/4	平成元年埋 試掘後
119 065-01	A K31 T7E	土師器 段A	(26.8)	-	-	口縁端部ココナデ。杯部内外面ヘラ磨き。	やや密	黒	にぶい橙	口縁1/8	
120 066-02	A J31 T7E	土師器 段A	(24.2)	-	-	口縁端部ココナデ。杯部内外面ハケ後ヘラ磨き。	やや密	黒	黄緑	口縁1/8	
121 036-03	A K32 T7E	土師器 段A	(24.6)	-	-	口縁端部ココナデ。杯部内外面ヘラ磨き。	密	良	にぶい橙	口縁1/5	
122 066-01	A O32 T7E	土師器 段A	(21.0)	-	-	口縁端部ココナデ。杯部内外面ヘラ磨き。	やや密	黒	灰白 浅黄緑	口縁1/7	
123 036-01	A L31 T7E	土師器 段A	-	-	-	杯部内外面ヘラ磨き。脚部外面に磨痕直線文・2段3方透孔・ヘラ磨き。内面ハケ後ナデ。	密	良	黄緑	頸部1/3	
124 057-06	A P33 T7E	土師器 段A	-	-	-	外面4等以上の磨痕直線文・3方透孔・ヘラ磨き。内面ナデ・段ナデ。	やや粗 1~2mmの砂粒多	黒	にぶい橙	粒状底 上平完存	
125 035-02	A M31 T7E	土師器 段B	-	10.2	-	外面に磨痕直線文・3方透孔・タテハケ。内面ナデ。	やや密 ~2mmの砂粒を含む	良	にぶい黄緑	頸部1/3	
126 072-01	A M3 T7E T r	土師器 段A	-	10.0	-	外面ヘラ磨き・3方透孔。内面ハケ。	やや粗 ~3mmの砂粒多	黒	橙	頸部1/2	
127 059-06	A T30 T7E T r	弥生土器	-	(10.6)	-	外面ヘラ磨き。縦位に7孔5方向に透孔。内面ナデ。端部ココナデ。段ナデ。	やや粗 ~3mmの砂粒を含む	黒	にぶい橙	頸部1/3	
128 037-03	A S33 T7E	土師器 段A	-	(14.6)	-	外面に2本の磨痕直線文。2段3方透孔。ヘラ磨き。内面ナデ。ハケ。	やや粗 ~2mmの砂粒を含む	黒	橙	頸部1/2	
129 060-02	A J32 T7E	土師器 段A	-	(14.0)	-	外面に磨痕直線文。3方透孔。ヘラ磨き。内面ハケ。端部ココナデ。	密	やや不良	にぶい橙	頸部1/3	
130 067-04	A H32 T7E	土師器 段B	(11.0)	-	-	杯部内外面ヘラ磨き。	密 ~1mmの砂粒少し含む	黒	明赤褐色	口縁1/4	
131 059-03	A P32 T7E	土師器 段B	-	-	-	底面磨耗で調整不明。脚部外面磨痕直線文。良段刺突列文・3方透孔。内面ナデ。	やや粗 磨砂粒含む	黒	浅黄緑	口縁1/4	
132 067-03	A L31 T7E	土師器 段B	-	-	-	ナデ。	やや密 ~1mmの砂粒含む	黒	にぶい橙	杯底完存	
133 062-03	A T31 T7E	土師器 段B	-	2.9	-	内面ナデ。黒灰あり。	密 磨砂粒を含む	黒	浅黄緑	底面完存	
134 066-04	A J31 T7E	土師器 段A	長 2.7 幅 3.2	孔径 0.9	-	ナデ。	やや粗	黒	にぶい橙	完形	



第26図 SD2・3、SK1・2実測図 (1:200)



第27图 飛鳥～平安時代遺構図 (1:300)

第28图 小地区図2 (1:1,000)

V 飛鳥・奈良時代

この時期の遺構には、道路状遺構2条・焼土炭化物集積（推定竪穴住居）が2基ある。

1 道路状遺構

SR1（第29図 P L14・15・18）

A地区の南部から東部で、南側溝の全面と北側溝の東半部が検出できた。検出時の埋土は白色砂質土の単層で、これは何時期と考えられるSR2の埋土の下層に相当する。上層は検出面に酷似する黄褐色砂質土と思われ、相対的に高位にある南側は埋土下層まで削平あるいは掘削され確認できたが、以北ではその検出が容易でなかったためと考えられる。

残りの良い東半部では、両側溝の心々距離は6.0～7.0mで、約2丈に相当する。側溝幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.15mである。両側溝は、若干湾曲するものの、ほぼ東西方向に延びる。南側溝は西部で掘り直しが確認されており、北側が新しい。また、北側溝でもその西部で幅が広がっており、切り合いは確認できなかったが掘り直しと考えられる。

切り合い関係は、古墳時代後期の溝SD2より新しく、平安時代中期から後期の土坑・掘立柱建物のどれよりも古い。なお、路面整形の痕跡は確認されていない。

遺物 側溝からの出土遺物には土師器・須恵器があるが細片が多く、図示できるものは135のみである。135は土師器の甕である。時期決定は難しいが、口縁部内面の肥厚が顕著でない点、頸部の屈曲が弱い点、などから奈良時代後期であろうか。

SR2（第29・30図 P L15）

A地区の西部で確認された。埋土上層が検出面と酷似し（自然堆積で埋没したものと考えられる。）、SR1と同一の検出面で確認することができなかった。しかし、埋土下層が灰白色シルト層でSR1埋土と同質のものであることと、SR2の南延長がSR1と直交関係になると推定されることから、一連の遺構と考えられる。

SR2はS字状に湾曲しながら約18m確認された。両側溝の心々距離は2.9～3.1mで、約1丈に相当する。側溝は残りの良い部分で幅0.3～0.6m、深さ0.4～0.5mである。なお、切り合い関係は不明であり、

路面整形の痕跡も確認されていない。

遺物には、土師器と須恵器の細片があるが、ほとんどは混入と思われ、図化できるものはない。

2 焼土・炭化物集積

B地区で下部遺構掘削中に飛鳥・奈良時代の遺物とともに焼土・炭化物の集中する地点を2箇所（SF2・3）確認した。遺物や状況からこの時期の竪穴住居に伴う竈と推定されるが、平面形を確認することはできなかった。

SF2（第31・32図）

B地区の中央部で確認された。トレンチ断面に周囲とは若干異なる焼土と黒色粘質土が認められたが、この層は周辺への広がりがほとんどなかった。

遺物 黒色粘土層から出土した141は、接合しなかったが、同一個体と思われる体部片から、長胴甕と考えられる。

SF3（第31・32図）

B地区の東部で検出された。東西1.5m以上、南北5m以上の範囲で炭化物層が広がり、その上に焼土層がみられた。

遺物 土師器甕(142)は焼土層からの出土で、口縁部は短く外反し、端面をもつ。須恵器杯A蓋(146)は口縁部が強く屈曲し、天井部は直線的である。

3 下部出土遺物（第32図 P L38）

平安時代遺構の掘削後の、下部掘削中に出土した遺物(136～140・143～145・147～154)は、飛鳥・奈良時代のものが大半であるが、一部は平安時代に下るものも含まれる可能性がある。これらは平安時代の遺構などに伴うものと考えられるが、その検出ができなかったため、ここでは一括して記述する。

土師器 杯(136～138)には、口縁部が直線的に延びるもの(136・137)と、内湾し端部で外反するもの(138)がある。138の底部はヘラ磨き調整である。137の内面には暗文がある。皿(139)の底部は、ヘラ削りの後ナデ調整する。

甕(140)は、口縁部の肥厚が顕著でなく、奈良時代頃と考えられる。

須恵器 杯皿蓋(143)の天井部はヘラ切り未調整

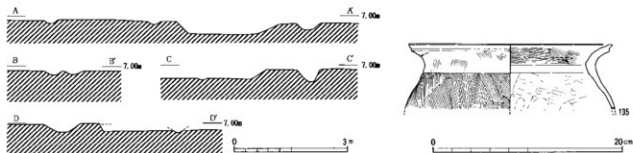


第29图 SR1・2实测图(1:200)

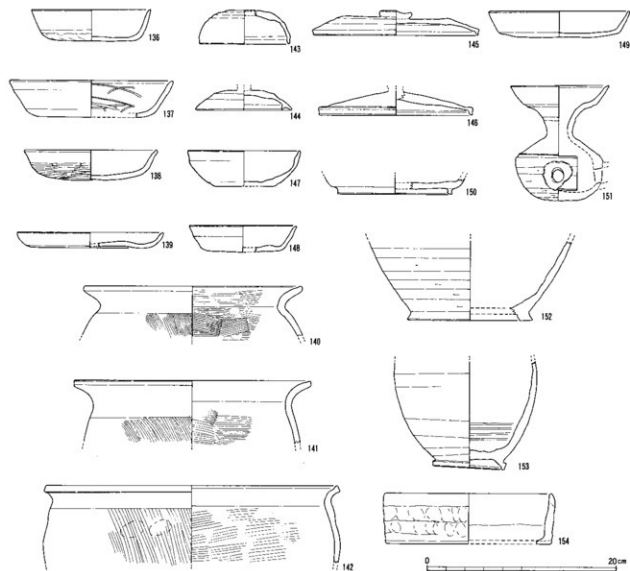
である。杯G蓋(144)のかえりは短い。杯G(147)の底部はヘラ切り未調整である。杯A蓋(145)の口縁端部の屈曲は弱く、犬井部は平坦である。杯A(149)は口縁部が直線的で、底部はロクロ削り調整する。杯B(150)の高台は外端で接地する。甕(151)は、注

口部が剝離している以外は完存である。壺(152)・鉢(153)は、いずれも底部外面をロクロ削り調整するものである。

製塩土器(154) 口縁部の器壁は6~8mmで、指オサエ痕が顕著に残る。



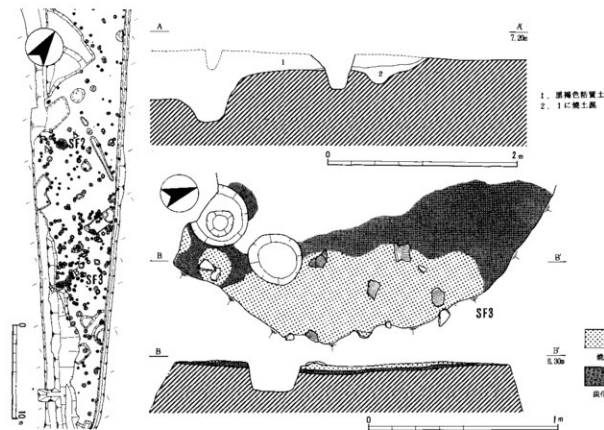
第30図 SR1・2断面図(1:100)、遺物実測図(1:4)



第31図 SF2・3他遺物実測図(1:4)

第7表 遺物一覧表5 (飛鳥・奈良時代)

No(新内) (Q線)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整技法の特徴	胎土	器式	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
135	A R32	土師器	(21.4)	—	—	口縁部ハケ後コナデ。体部外面タテハケ。内面	粗 1-5mmの	茶	灰白	口縁1/3	
027-09	下層	甕				板ナデ・オサエ。	小石含む				
136	B e40	土師器	12.5	—	3.3	口縁部コナデ。底面工具ナデ。	やや粗 ~2	茶	緑	口縁7/8	
070-04	F3E	杯					mmの石・砂粒				
137	B X37	土師器	(17.0)	—	3.9	口縁部コナデ。底面ナデ。内面焼文。	やや粗	茶	緑	口縁1/9	
068-03	F3E	杯									
138	B Y38	土師器	13.8	—	3.2	口縁部コナデ。底面へう磨き。内面ナデ。	やや粗	茶	にぶい緑	口縁1/2	
068-04	F3E	杯									
139	B e39	土師器	(15.3)	—	1.6	口縁部コナデ。底面へう磨きナデ。	やや粗	茶	にぶい緑	口縁1/5	
070-05	F3E	甕									
140	B e39	土師器	(22.6)	—	—	口縁部コナデ。体部外面タテハケ後内面コナ	やや粗 ~1.5	茶	にぶい緑	口縁1/5	
141	B Y39	土師器	(25.0)	—	—	口縁部コナデ。体部外面タテハケ。内面コナ	やや粗 ~1	茶	にぶい緑	口縁1/6	
005-02	SF2	甕				ケ。	mmの砂粒含む				
142	B d40	土師器	(30.5)	—	—	口縁部コナデ。体部外面タテハケ後内面コナ	やや粗 黄砂	茶	浅黄緑	口縁1/4	
071-01	SF3	甕				ケ。	粒含む				
143	B e39	土師器	9.3	—	3.6	ロクロナデ。天井部ナデ。	やや粗 ~3	茶	灰白	口縁1/2	
089-01	F3E	杯					mmの小石含む				
144	B e39	土師器	(10.0)	—	—	ロクロナデ。天井部コクロ削り。	粗 ~1mmの	茶	灰	口縁1/6	
072-06	下層	甕					砂粒含む				
145	B e39	土師器	(17.3)	—	3.2	天井部コクロ削り。ロクロナデ。	粗 ~3	茶	灰白	口縁1/2	
079-05	下層	甕					mmの砂粒				
146	B d40	土師器	(16.0)	—	—	ロクロナデ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/6	
065-02	F3E	杯									
147	B e39	土師器	(11.8)	—	(3.8)	ロクロナデ。天井部未調整。	粗 ~4mmの	茶	灰	口縁1/10	
072-09	下層	甕					砂粒含む				
148	B b39	土師器	(11.1)	—	2.8	ロクロナデ。	やや粗 ~6	茶	灰	口縁1/6	
069-02	SF3	甕					mmの小石含む				
149	B Y38	土師器	(15.0)	—	2.7	ロクロナデ。底面外面コクロ削り。	やや粗	茶	浅黄	口縁1/5	
003-01	F3E	杯									
150	B d40	土師器	(12.0)	—	—	ロクロナデ。貼付け高台。底面外面ナデ。	やや粗 ~2	茶	灰黄	高台1/2	
069-04	F3E	杯					mmの石含む				
151	B 74	須恵器	10.3	—	12.2	ロクロナデ。底面外面コクロ削り。注口割断。	やや粗 ~4	茶	灰	ほぼ定形	
073-03	F3E	杯					mmの小石含む				
152	B e40	土師器	—	7.5	—	体部外面コクロ削り。内面コクロナデ。底面ナデ。	やや粗 ~4	茶	にぶい黄	底面定形	
073-01	F3E	杯				ロクロナデ。	mmの石含む				
153	B e40	土師器	(13.1)	—	—	外面コクロ削り。内面コクロナデ。	やや粗 ~2	茶	灰黄	底面1/7	
073-02	F3E	杯					mmの砂粒含む				
154	B W06	新塩土器	17.4	17.4	5.3	口縁部コナデ。体部外面ナデ・オサエ。内面	粗 1-3mm	茶	緑	口縁1/2	池原式
013-02	F3E	甕				ナデ。	の砂粒多い				



第32図 SF2・3実測図 (1:20, 1:40)

VI 平安時代

この時期の遺構には、掘立柱建物16棟、柱列または垣根状遺構12条、井戸1基、溝7条、土坑31などがある。

1 掘立柱建物

A地区の掘立柱建物は11棟（SB1～11）あり、北西部・南西部・南部の3カ所に集中する。平安時代中期から後期のものと考えられる。B地区の掘立柱建物は5棟あり、中央部から東部に多い。柱掘形は小さく、総柱建物である。

SB1（第33図 P L16・38）

A地区の北西部で検出された桁行3間、梁行2間の東西棟（E22°S）の側柱建物である。桁行6.3m、梁行4.2mで、柱間2.1m（7尺）の等間とし

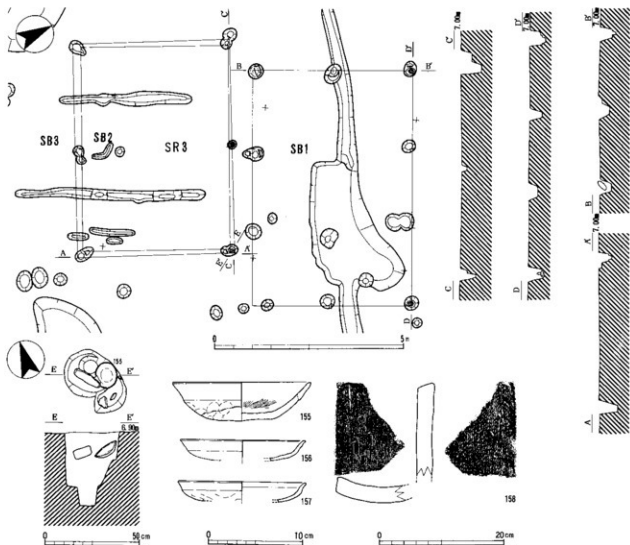
だが、南東隅柱穴の柱通りは悪い。

柱掘形は径35～50cmで、北東隅柱穴には柱根と礎板と思われる木質が残存していた。また、南西隅柱穴には30cm大のやや扁平な石材があったが、斜めになって根石と考えるには疑問が残る。

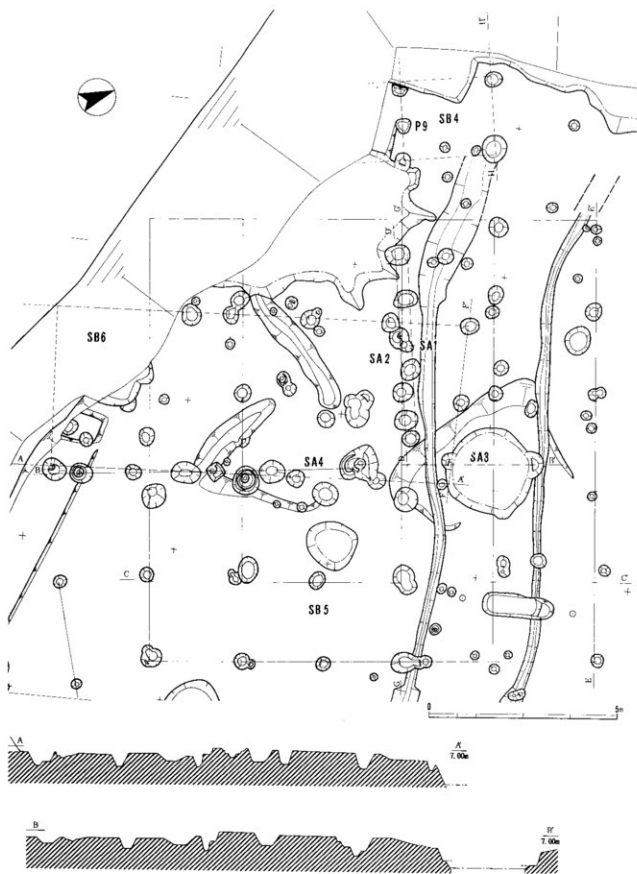
遺物 土師器皿(156・157)はいずれも強いヨコナデで外反する口縁部からなるが、器高は低い。平瓦(158)は凹面に布目、凸面に縄目があり、側面をへら削りする。

SB2・3（第33図 P L17・39）

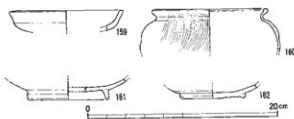
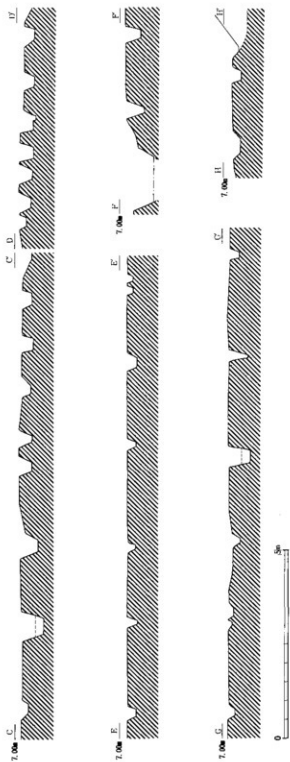
SB1の南側に隣接して検出された。ほぼ同一地点・同一規模で、SB2からSB3への建替えと考えられる。いずれも桁行2間、梁行1間の側柱建物



第33図 SB1～3実測図（1：100）、遺物出土状況図（1：20）、遺物実測図（1：4、158は1：6）



第34图 SB4~6、SA1~4实测图(1:100)



第35図 SB4～6・SA1～4断面図(1:100)、
遺物実測図(1:4)

で、棟方向はE22° S前後を示す東西棟である。桁行は5.4mから5.7m、梁行は3.9mから4.2mとわずかに拡張している。

柱掘形は、桁行中央柱穴がやや小さく浅い以外、径30cm前後である。SB3北東隅柱穴から出土した155は、柱痕跡との位置関係から柱抜き後の埋納と考えられる。

遺物 土師器皿(155)はほぼ完形で、器壁が厚く外面には粘土接合痕が、内面にはハケ目が残る。斎宮跡の土師器¹⁵⁾に対応させれば、「平安時代後I期」、東山72号窯式期¹⁶⁾に相当する。

SB4 (第34・35図 PL18)

A地区南西部の比較的しっかりしたビット4個を建物の北東部と考えたが、大半が調査区外のために、規模などは確定できず、隣接するSA1・2またはSB5の一部あるいは付属部分の可能性もある。

確認できた規模は東西・南北とも1間分で、東西が2.1m、南北が2.4mである。棟方向も不確定だが、あえて東西方向で表せばE19° Sである。

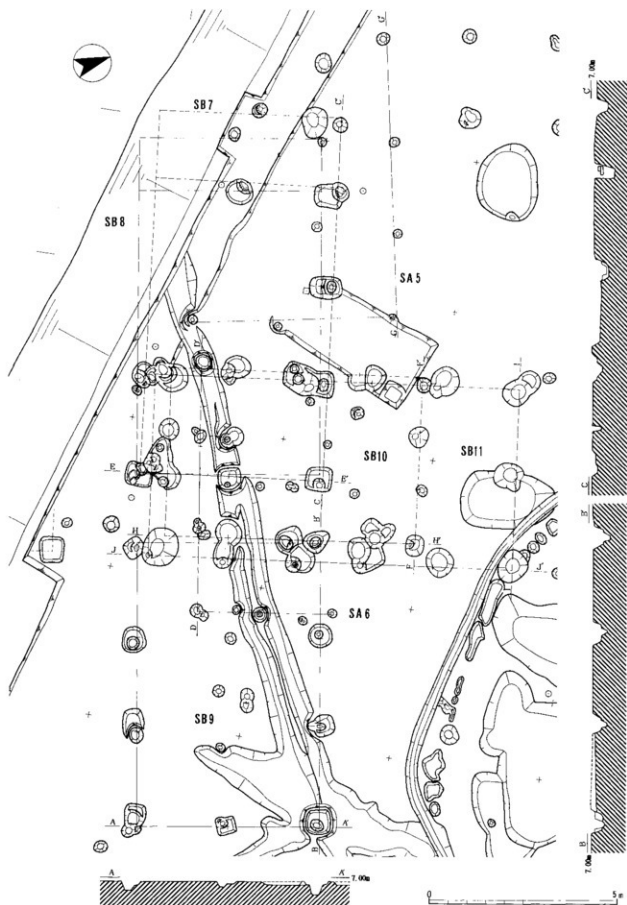
柱掘形は径40～70cmであるが、柱痕跡は確認できなかった。柱穴出土遺物は細片のみで図化できるものはない。

SB5 (第34・35図 PL19)

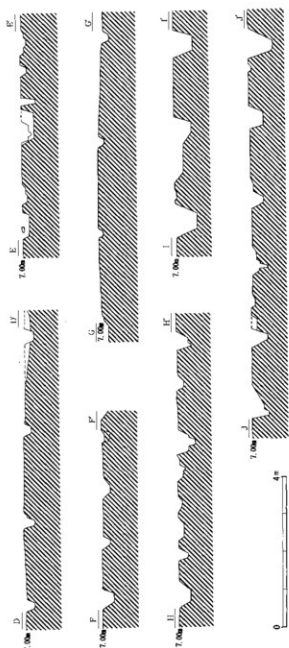
SB4の東側で検出された。建物南西部は調査区外でもあり、後世の擾乱などで不明確であるが、桁行5間、梁行5間の総柱建物である。3間×2間の身舎に西面を除く三面廂、さらに北面には孫廂が取り付く。規模は、桁行・梁行ともに11.7m(39尺)である。身舎桁行は9.6mで2.4m(8尺)の等間、同梁行は4.2mで2.1m(7尺)の等間である。廂の柱間は南北面が2.4m(8尺)、東面が2.1m(7尺)、孫廂が2.7m(9尺)である。棟方向はE22° Sを示す東西棟で、SB1～3・7・10・11と一致する。

柱掘形は、孫廂部分が径15～26cm、深さ15～26cmと小さく浅い以外は径35～78cm、深さ15～58cmと身舎・廂ともばらつきが大きく明確な差はない。柱痕跡は径20～25cmのものが確認された。

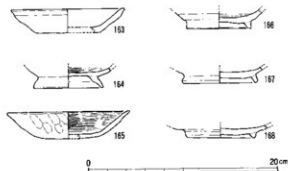
遺物 土師器皿(159)は口縁部を強くヨコナデするが、外反せずに端部に弱い面をもつ。土師器甕(160)は、薄い器壁の小形甕で、外面に煤が付着する。灰釉陶器(161・162)の内、161は高い高台をも



第36圖 SB7~11、SA5・6実測図(1:100)



第37図 SB 7～11、SA 5・6 断面図（1：100）、
遺物実測図（1：4）



つ深施で、底部はロクロ削りである。162は底部に糸切り痕を残し、低平な高台が付く。灰軸陶器は東山72号窯式に相当し、SB 5は平安時代後期の建物と考えられる。

SB 6（第34・35図 P L18）

SB 5と重複して検出された。南部が調査区外のため、規模は不明であるが、桁行5間以上、梁行2間の側柱建物と考えられる。規模は桁行10.5m、梁行4.2mで、柱間は桁行・梁行とも2.1mの等間である。棟方向はN25° Eを示す南北棟で、今回検出された掘立柱建物の中で、最も当地域に残存する条里方向に近いものである。北側梁行の柱穴は桁行柱穴と直交せず、東西側柱々穴も対応せず南北方向に半柱穴分ほどずれている。

柱掘形は径40～75cmで比較的揃い、径20cm前後の柱痕跡を確認したものもある。切合い関係から柱列SA 3より新しい。柱穴出土は細片のみで遺物で図示できるものはない。

SB 7・8（第36・37図 P L21）

A地区の南部で検出された建物で、ほぼ同一地点で同一規模に建替えられている。身舎桁行3間、梁行2間の側柱建物に西面廂が付く。棟方向はSB 7がE19° S、SB 8がE22° Sを示し、SB 7は桁行が南北ともSB 9と柱筋を揃える。身舎桁行はSB 7が7.5m、SB 8が7.8mで、で柱間は各2.5・2.6mの等間である。梁行は4.8mで、2.4mの等間である。

柱掘形は、一辺60～70cmの方形のものが多い。柱痕跡は径20cm前後のものが確認され、4柱穴に扁平な石材を2～3枚重ねた根石がある。

遺物 黒色土器A類の台付碗(164)は脚台部は八字状に広がり、底部内面にハケ目が残る。

SB 9（第36・37図 P L21）

SB 7・8の東側で検出された桁行3間、梁行2間の側柱建物である。棟方向はE19° Sを示す。約1.8mの間隔を置いたSB 7と、南北両面の桁行柱筋を揃える。規模は、桁行7.5m、梁行4.8mで、柱間は桁行が2.5mの等間、梁行が2.4mの等間であり、SB 7の身舎と同一規格である。

柱掘形は円形と方形が混在するが、50～60cm大のものがほとんどで、径20cmの柱痕跡がほとんどの柱



第38图 SB12・13、SK29、SA11・12实测图（1：100）、遗物实测图（1：4）

掘形で確認された。

遺物 土師器杯(163)は平底で、厚手の口縁部を幅広くヨコナデ調整する。

S B 10 (第36・37図 P L 20)

S B 7～9と重複して検出された桁行4間、梁行3間の側柱建物である。棟方向はN22° Eを示し、S B 7と直交する。規模は桁行6.6m、梁行4.5mで、柱間は桁行が1.65m(5尺半)、梁行が1.5m(5尺)の等間である。

柱掘形は、他の建物と重複するものが多く明確でないが、径50cm前後のものが多い。切合い関係からS B 7～9より新しく、S B 11より古い。

遺物 柱穴出土遺物は細片のみで図化できるものはないが、ロクロ成形の土師器を含むことから、S B 10は平安時代後期以降のものと考えられる。

S B 11 (第36・37図 P L 20)

S B 10と重複して検出された桁行5間、梁行2間の側柱建物で、棟方向はN22° Eを示す。規模は桁行9.6m、梁行4.8mである。柱間は、桁行の両端の間が2.1mだが、中央3間分は1.8mの等間で、梁行は2.4mの等間である。

柱掘形は径70～90cmの大形のもので、径20～30cmの柱痕跡を確認したものもある。

遺物 土師器皿(165)の口縁部は直線的に延び、内面にヨコハケ、外面に指頭圧痕が残る。S K 20出土例に類似する。灰軸陶器皿168は底部外面をロクロ削りし、内面に重焼き痕が残る。緑軸陶器碗166は比較的厚く施釉され、底部内外面には三又トチン痕が残る。美濃産の可能性が高い。

灰軸陶器は東山72号窯式に相当し、S B 11は平安時代後期の建物と考えられる。

S B 12 (第38図 P L 22)

B地区の西部で検出された桁行3間、梁行2間の東西棟(E17° S)の総柱建物である。桁行は7.2mで、柱間は西側2間分が2.7mの等間、東1間分が1.80mである。梁行は4.5mで柱間は2.25mの等間である。

柱掘形は径30～40cmの小形のもので、径15cm程の柱痕跡を確認した柱穴もある。

遺物 柱穴出土遺物は細片のみで図化できるものはないが、S B 13と同一規格を採ることから平安時代

末期のものと思われる。

S B 13 (第38図 P L 22)

B地区の中央やや東寄りで検出した。桁行3間、梁行2間の総柱建物で、東部には不整形円形の土坑S K 29がある。棟方向は東西棟で、E17° Sを示す。規模は桁行は7.2m、梁行は4.5mで、柱間もS B 12と同一規格である。

柱掘形は径30～40cmの小形のもので、柱痕跡は確認できなかった。

遺物 土師器甕(169)は口縁部を折り曲げる。頸部内面以外にはハケメはみられない。

柱穴出土遺物や土坑出土遺物から、平安時代末期の建物と考えられる。

S B 14 (第39図 P L 22)

B地区の東部、S B 13と一部重複して検出された。身舎桁行3間、梁行2間に北面廂の付く建物と復元したが、南側に延びる可能性がある。身舎桁行7.2m、同梁行3.6mで、柱間は桁行が2.4m、梁行が1.8mの等間である。廂の柱間は2.1mである。棟方向はE7° Sを示す東西棟である。

柱掘形は径30～40cmの小形のもので、柱痕跡を確認したものはない。

遺物 土師器皿(174)はロクロ成形で、底部に糸切り痕が残る。土鏝(175)は完形であり、全長4.7cm、孔径0.4cm、重さ7.1gである。

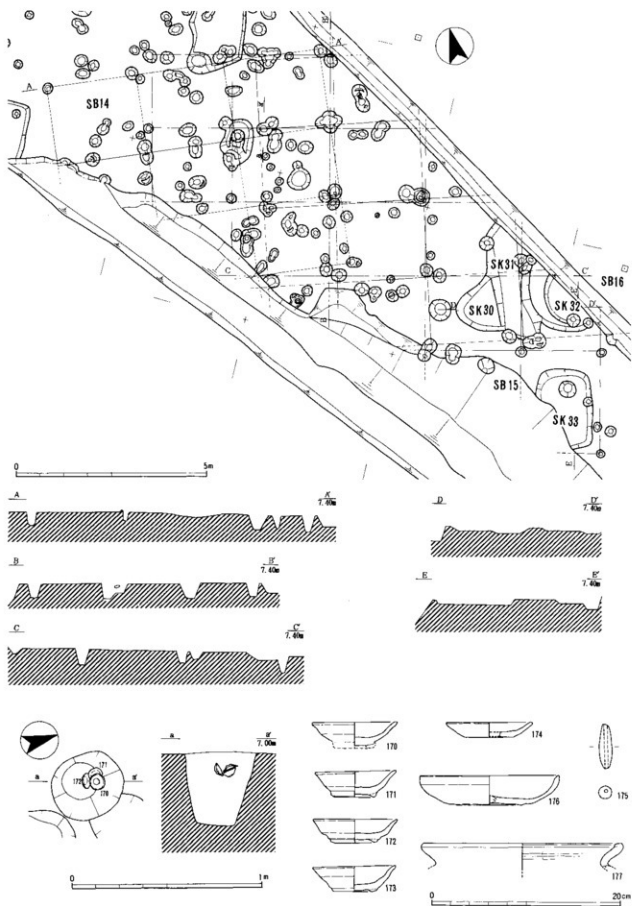
S B 15 (第39図 P L 23)

S B 14と重複して検出された。調査区に制約され、規模などは確定できないが、一応東西棟(E15° S)の桁行5間、梁行5間の総柱建物と復元した。構造は3×2間の身舎に四面廂さらに南面孫廂が付くと思われるが、建物南東はS K 2を包括する張出しの可能性もある。規模は、身舎が桁行7.65m、梁行3.9mで、柱間は桁行が2.55m、梁行が1.95mの等間である。部分は東西が2.1m、南北が1.95m、孫廂が2.7mである。

柱掘形は径20～40cmと小さく、柱痕跡は確認されていない。

遺物 土師器甕(177)は口縁部を折曲げ、頸部内面にハケ目が残る。

S B 15は、柱穴出土遺物から平安時代末期と考えられ、S K 33出土遺物も同時期のものである。S B



第39图 SB14~16、SK30~33实测图(1:100)、遺物出土状況图(1:20)、遺物实测图(1:4)

第8表 掘立柱建物一覧表

遺構名	棟方向	規模	構造	柱間 (m)		柱掘形	時期	備考
				船間	船間			
S B 1	東西棟 E22° S	3 × 2 6.3 × 2.2	榎柱	2.1 × 3	2.1 × 2	30~50	円	南東隅柱穴柱通り悪い、北東隅柱穴に柱根、南東隅柱穴に榎柱
S B 2	東西棟 E22° S	2 × 1 5.4 × 3.9	榎柱	2.7 × 2	3.9	30	円	平安後期
S B 3	東西棟 E22° S	2 × 1 5.7 × 4.2	榎柱	2.85 × 2	4.2	30	円	平安後期
S B 4	東西棟 E19° S	(1) × (1) (2.1) × (2.4)	不明	2.1	2.4	40~70	円	平安中期?
S B 5	東西棟 E22° S	3 × 2間の身舎に西面を 除く一連列・北東隅	身舎2.4 × 4 東壁2.1	身舎2.1 × 2 南北壁2.4 柱間2.7	身舎35~78 15~26	40~75	円	平安後期
S B 6	南北棟 N35° E	(5) × 2 9.0 × 4.8	榎柱	2.1 × 5	2.1 × 2	40~75	円	平安後期?
S B 7	東西棟 E19° S	4 × 2 9.0 × 4.8	3 × 2間の身舎に西面を 除く一連列	身舎2.5 × 3 西壁1.3	2.4 × 2	60~70	円	平安中期
S B 8	東西棟 E22° S	4 × 2 9.3 × 4.8	3 × 2間の身舎に西面を 除く一連列	身舎2.6 × 3 西壁1.3	2.4	60~70	円	平安中期
S B 9	東西棟 E19° S	3 × 2 7.5 × 4.8	榎柱	2.5 × 3	2.4 × 2	50~60	円	平安中期
S B 10	南北棟 N22° E	4 × 3 6.6 × 4.5	榎柱	1.65 × 4	1.5 × 3	30~60	円	平安後期?
S B 11	南北棟 N22° E	5 × 2 9.6 × 4.8	榎柱	並から 2.1 + 1.8 × 3 + 2.1	2.4	70~90	円	平安後期
S B 12	東西棟 E17° S	3 × 2 7.2 × 4.5	榎柱	西から2.7 × 2 + 1.8	2.25 × 2	30~40	円	平安末期
S B 13	東西棟 E17° S	3 × 2 7.2 × 4.5	榎柱	西から2.7 × 2 + 1.8	2.25 × 2	30~40	円	平安末期
S B 14	東西棟 E17° S	3 × 3 7.2 × 5.7	3 × 2間の身舎に北面を 除く一連列	2.4 × 3	身舎1.8 × 2 北壁2.1	30~40	円	平安末期
S B 15	東西棟 E17° S	(5) × (5) 12.3 × (10.5)	3 × 2間の身舎に東の除 く一連列・南面を	身舎2.25 × 3 西壁2.1 船間2.5	身舎1.85 × 2 南北壁1.95 船間2.7	30~40	円	平安末期
S B 16	東西棟 E12° S	(4) × (4) (9.0) × (7.8)	3 × 2間の身舎に北・西・ 南面を。東部は不明	身舎2.4 × 3 西壁1.8	身舎2.1 × 2 南北壁1.8	30~40	円	平安末期

16とはその位置や規模などから、建替えの可能性が高いが、その前後関係は不明である。

S B 16 (第39図 P L 23・39)

S B 15と重複して検出された。調査区の制約で規模は確定できないが、桁行4間以上、梁行4間の東西棟 (E12° S) の建物である。構造は、桁行3間以上梁行2間の身舎に、少なくとも北・西・南の三面に廂が付くと考えられ、南東部のS K 32はいわゆる「南東隅土坑」に相当する可能性がある。規模は身舎桁行が7.2m、梁行が3.9mで、柱間は桁行が2.4mの等間、梁行が1.95mの等間である。廂部分は南北が1.95m、西が1.8mである。

柱掘形は径30~40cmで、柱痕跡は確認されていない。なお、西面廂の北から2つ目の柱穴からは、その出土位置が掘形内か柱痕跡内か不明であるが、完形の無釉陶器小碗(170~173)が一括出土した。

遺物 無釉陶器小碗(170~173)は、170の高台が剝離している以外はほぼ同様の形状である。厚手の底部から内湾する体部と、薄手で外反する口縁部からなる。底部外面には糸切り痕が残る。藤澤編年の4型式に相当する。土師器杯(176)はロクロ成形で、口縁部は肥厚し内湾する。

S B 16は、柱穴出土遺物から平安時代末期中葉の

建物と考えられ、S K 32出土遺物もほぼ同時期のものである。

2 柱列・垣根状遺構

S A 1・2 (第34図 P L 19)

A地区の南西部でS B 5・6と重複して検出された。ほぼ同一地点でS A 1からS A 2に建替えられている。規模はいずれも2間としたが、S B 4北から2間目の桁行柱穴を西延長として捉えることもできる。規模はS A 1が4.5m (2.25mの等間)、S A 2が4.2m (2.1mの等間)で、その方位はE21° S前後で、S B 7~9とはほぼ一致する。

柱掘形は径50cm前後の比較的しっかりしたもので、径15cmの柱痕跡も確認した。

S A 3・4 (第34図 P L 19)

S A 1・2の東側で検出された南北方向の柱列である。S A 3が2間 (4.5m、2.25mの等間)、S A 4が3間以上 (7.2m以上、2.4mの等間) 確認された。切合い関係からはS A 4が新しいが、切合いと見ずに、一連の南北5間の柱列と見ることも可能である。方向はいずれもN22° Eで、S B 5・8・10・11と一致する。

柱掘形は径40~70cmで、径20cmの柱痕跡も一部で確認した。

SA 5 (第36・37図)

A地区の南部、SB 7・8と一部重複して検出された。東西方向に3間(7.2m、柱間2.4mの等間)、その東端から南北方向に2間(5.4m、柱間2.7mの等間)の柱穴が確認された。東西方向部分の方位はE19°Sで、南北方向はこれにほぼ直交する。

B地区で検出されたような柱圓形の小さい平安時代末期以降の掘立柱建物の可能性もある。

SA 6 (第36・37図 P L20)

SA 5の東で、東西方向に3間分その東端から北に2間分が検出された。柱列としたが、未検出の柱穴を想定すればSA 5と同様に平安時代末期以降の掘立柱建物となる可能性もある。規模は東西方向が6.6m(柱間は2.2mの等間)、南北方向が3.6m(柱間は1.8mの等間)である。方位は東西方向でE18°Sで、SB 8・10・11とほぼ同一である。東西方向部分では小穴との切合いが見られ、建替えられた可能性がある。

SA 7 (第41・51図 P L27・39)

A地区のSD 6の中央部東側に沿い約20cmの間隔

を保って平行する小穴が多数検出された。小穴は形状・深さともに様々であるが、位置関係や形状から畜宮跡や大鼻遺跡、段遺跡で検出されているような垣根状遺構と考えられる。区画と東側の廃棄上坑群を視覚的に遮蔽する機能が推定できる。

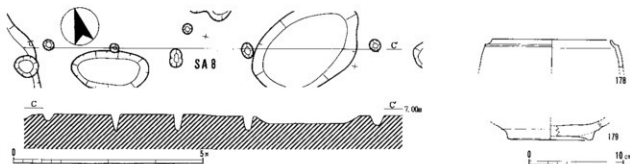
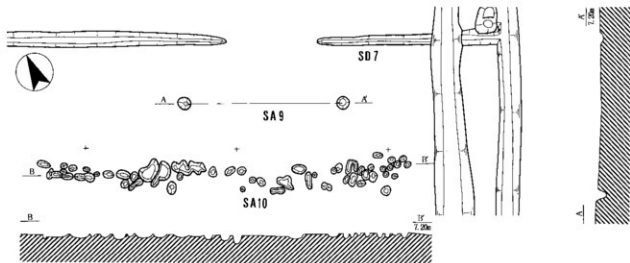
遺物 緑釉陶器香炉(178)は口縁部が短く反り上がり、体部との境は段が付く。淡緑色の釉薬が比較的厚くハケ塗りされている。猿投産である。無釉陶器椀(179)は底部内面が平滑で、墨痕があることから転用硯と考えられる。时期的に新しく、垣根状遺構の廃棄年代を示すものであろうか。

SA 8 (第40図 P L24)

A地区の東部中央よりで検出された。一応東西5間としたが、更に東西に延びる可能性もある。全長8.7mで、柱間は1.7~1.9mである。方位はE15°Sである。

SA 9 (第40図 P L24)

A地区の北東部で検出された。東西1間分(4.2m)であるが、北側のSD 7と平行し、かつその途切れた出入口と思われる部分に対応することから、目隠



第40図 SA 9・10実測図(1:100)

第41図 SA 7遺物実測図(1:4)

第9表 柱列・垣根状遺構一覧表

番号	方向	方位	規模		柱間	柱形状		備考
			(間)	(m)		径 (cm)	形	
SA1	東西	E21° S	2	4.5	2.25×2	30	円	S B 4 北から2間目折行が延長?
SA2	東西	E21° S	2	4.2	2.1×2	40~70	円	S A 1 の延長え。
SA3	南北	N22° E	2	4.5	2.25×2	40~70	円	S A 4 と一連で南北3間の連続?
SA4	南北	N22° E	(3)	7.2	2.4×3	60~70	円	
SA5	L字形	東西部分 E19° S	東西3 南北2	7.2 5.4	東西2.4×3 南北2.7×2	30~40	円	東西側の掘立柱建物?
SA6	L字形	東西部分 E18° S	東西3 南北2	6.6 3.6	東西2.2×3 南北1.8×2	30~40	円	東西側の掘立柱建物?
SA7	-	-	-	全長約16m	-	-	-	S D 6 に0.2m離れて平行。
SA8	東西	E15° S	(5)	8.7	西から1.8+1.7+1.9+?+?	20~30	円	東から2本目の柱穴S K14と重複、切り合い不明。
SA9	東西	E25° S	1	4.2	4.2	30	円	S D 7 に1.5m離れて平行。門?目隠し壁?
SA10	東西	-	-	東西0.9m、南北1.1mの範囲に小穴	-	-	-	S D 7・S A 9 と平行。
SA11	東西	E15° S	(4)	(9.6)	2.4×4	30~40	円	S B15に0.8m離れて平行。
SA12	東西	E17° S	4	5.4	1.35×4	20~30	円	S B13に2.0m離れて平行。

第10表 遺物一覧表6 (掘立柱建物・柱列・垣根状遺構)

No.(報告) (登録)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整技法の特徴	胎土	顔色	残存度	備考
			口徑	底徑	器高					
155	A J28	土師器	14.5	-	4.1	口縁部コナダ、底部ナダ、内面ハケ後ナダ。	赤	良	焼灰に染織	法政形
074-01	S J3	土師器	(13.2)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ?	赤	良	灰白	口縁1/8
156	A J27	土師器	(13.4)	-	-	口縁部コナダ、底部ナダ。	赤	中	赤黄	口縁1/8
077-02	S B1	土師器	(13.4)	-	-	口縁部コナダ、底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
157	A J27	土師器	(13.4)	-	-	口縁部コナダ、底部ナダ。	赤	中	赤黄	口縁1/8
077-03	S B1	土師器	(13.4)	-	-	口縁部コナダ、底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
158	A K27	瓦	長14.5	幅11.2	厚2.5	凹面平目、突面端目、側面ヘラ削り。	赤	中	灰	1塊残存
075-01	S B1	平瓦	長14.5	幅11.2	厚2.5	凹面平目、突面端目、側面ヘラ削り。	赤	中	灰	1塊残存
159	A K22	土師器	(11.4)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
078-06	S B5	土師器	(11.4)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
160	A J31	土師器	(11.7)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
076-05	S B5	土師器	(11.7)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
161	A K22	土師器	(8.2)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
076-06	S B5	土師器	(8.2)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/6
162	A J31	土師器	(6.4)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
077-04	S B5	土師器	(6.4)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
163	A P38	土師器	(11.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/7
078-05	S B9	土師器	(11.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/7
164	A N34	土師器	7.2	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
076-07	S B7	土師器	7.2	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
165	A O22	土師器	(12.9)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
078-02	S B20	土師器	(12.9)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
166	A O22	土師器	6.7	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
133-01	S B10	土師器	6.7	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
167	A N34	土師器	(7.6)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
079-07	S B10	土師器	(7.6)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
168	A N34	土師器	7.1	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
078-08	S B11	土師器	7.1	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
169	B b38	土師器	(18.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
077-01	S B13	土師器	(18.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
170	B c30	土師器	9.0	(3.7)	2.4	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
074-03	S B16	土師器	9.0	(3.7)	2.4	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
171	B c39	土師器	8.9	4.1	2.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
074-05	S B16	土師器	8.9	4.1	2.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
172	B c39	土師器	8.8	4.2	2.8	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
074-04	S B16	土師器	8.8	4.2	2.8	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
173	B c39	土師器	8.8	4.2	2.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
074-02	S B16	土師器	8.8	4.2	2.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
174	B c40	土師器	(9.0)	(5.2)	1.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
076-08	S B14	土師器	(9.0)	(5.2)	1.6	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
175	B b39	土師器	長4.7 幅7.1	幅1.4	孔径0.4	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
080-06	S B14	土師器	長4.7 幅7.1	幅1.4	孔径0.4	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/8
176	B c39	土師器	(14.7)	(6.8)	3.1	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
079-02	S B16	土師器	(14.7)	(6.8)	3.1	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/4
177	B b38	土師器	(18.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/7
077-05	S B15	土師器	(18.8)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/7
178	A N20	土師器	(12.5)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/9
074-06	SA7	土師器	(12.5)	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/9
179	A G22	土師器	9.0	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/9
078-07	SA7	土師器	9.0	-	-	口縁部コナダ。底部ナダ。	赤	良	赤黄	口縁1/9

堀のような機能が考えられる。

SA10 (第40図 P L24)

SA9の南側、で東西9.9m、南北0.9mの範囲に径10~50cmの小穴が密集したものを検出した。SA7と同様に垣根状遺構と考えられ、SA9と同様に目隠堀のような機能が考えられる。

SA11 (第38図)

B地区の中央部で検出された。その東西は調査区外となって全長は不明であるが、4間分(9.6m、2.4mの等間)が確認された。方位はE15°Sで、SB15と約0.7mの間隔をおいて平行する。

柱穴出土遺物は細片のみで図化できるものはないが、SB15と平行することから平安時代末期のものと考えられる。

SA12 (第38図)

SB13の南側で検出された東西方向4間の柱列である。全長は5.4m、柱間は1.35mの等間である。その方位はE17°Sで、北側のSB13と2.0m離れて平行する。柱掘形は径20~30cmで、柱痕跡は確認されていない。SB14と切り合うが、新旧関係は判然としない。

3 井戸

SE1 (第42・43図 P L39)

B地区の西部、SB12の南側で検出された。上部は壁面が若干崩れ、不整形形であるが、中位以下は壁面がよく残る。規模は直径1.8m、深さ1.9mである。底部は丸みを帯び、若干の礫が認められたが、石組となるほどの大きさではない。また、曲物や板材などは確認されず、土層断面でも掘形は確認されなかったことから、素掘りの井戸と考えられる。

埋土は3層以下が検出面に似た褐色系の土、1・2層が遺物包含層に近い黒色系の土で、遺物が比較的多く出土した。

遺物 土師器小皿(180~185)には器壁の薄いもの(180~183)と、器壁が厚くて口縁部と底部の区別が明瞭なもの(184~185)がある。186は「て」の字皿である。皿(187・188)の内、187は口縁部が強いヨコナデで外反し、内面にハケ目が残る。(189~192)はロクロ成形の土師器である。杯(189・190)の底部は若干突出する。台付碗(191)は八字状の脚台部が付く。台付皿(192)は灰白色で、底部に糸切り痕が

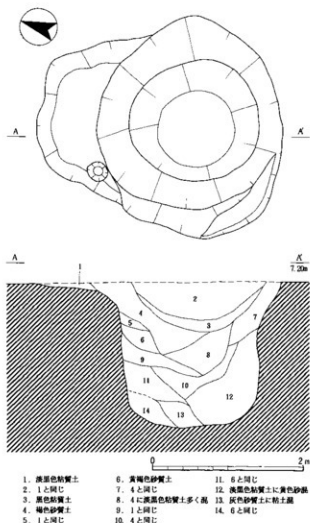
残る。

無軸陶器碗(193~195)の内、全形の判明する193は厚い器壁で口縁部は内湾する。194は器壁が薄く、灰釉陶器の可能性がある。小碗(196・197)は体部で屈曲し、口縁部は外反する。

瓦器(198・199)の内、碗(198)は小片のため口径は不明であるが、口縁部内面に沈線がある。

白磁碗(201)は非常に薄い器壁で、口縁部は外反する。

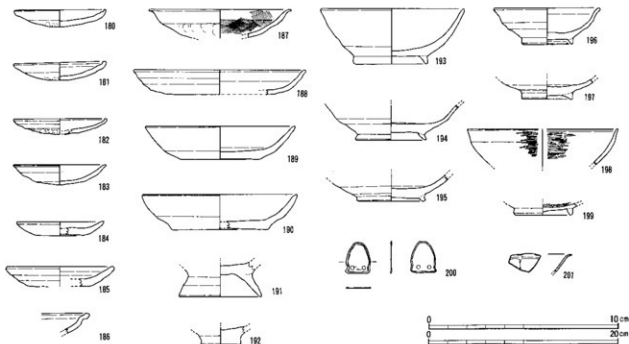
銅製品(200)は、長さ1.7cm、幅1.3cmの靴形をし、両側面下端付近が括れる。厚さは0.3~0.7cmで、端部全周を折り曲げ、括れる内側に径0.2cmの孔が0.6cm間隔で開けられている。



第42図 SE1実測図(1:50)

第11表 遺物一覧表7 (SE1)

No(報告) (D録)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整技法の特色	胎土	釉色	残存度	備考	
			口径	底径	器高						
180	B V37	土師器	9.6	-	1.8	口縁部コナダ。底部外面オサエ、内面ナダ。	密 砂粒含む	良	残痕僅	完形	
083-03	SE1	土師器	9.5	-	1.9	口縁部コナダ。底部外面オサエ後ナダ、内面ナダ。	密	やや小粒	残痕僅	口縁5/8	
181	B V37	土師器	(9.7)	-	1.7	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密 ~1mmの石含む	並	に品い様	口縁1/4	
082-01	SE1	土師器	(9.7)	-	2.2	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/3	
182	B V37	土師器	(9.0)	-	1.5	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	やや粗 ~2mmの石含む	並	残痕僅	口縁1/4
081-04	SE1	土師器	(9.0)	-	1.5	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/5	
184	B V37	土師器	(2.1)	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/5	
081-02	SE1	土師器	-	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	残痕僅	口縁2.5cm	
185	B V37	土師器	(15.0)	-	-	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密 ~2mmの石含む	並	淡黄	口縁5/8	
081-03	SE1	土師器	(15.0)	-	-	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	やや粗 ~1mmの石含む	並	に品い様	口縁1/8
186	B V37	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
151-04	SE1	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
187	B V37	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
084-04	SE1	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部外面ナダ・オサエ、内面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
188	B V37	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
081-05	SE1	土師器	(18.0)	-	-	口縁部コナダ。底部内外面ナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
189	B V37	土師器	(15.6)	8.3	3.5	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/8	
082-02	SE1	土師器	(16.3)	(10.0)	3.7	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
190	B V37	土師器	(8.7)	-	-	ロクロナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
083-02	SE1	土師器	(8.7)	-	-	ロクロナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
191	B V37	土師器	-	-	-	ロクロナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
084-07	SE1	土師器	-	-	-	ロクロナダ。	密	並	灰白	口縁1/2	
192	B V37	土師器	-	-	-	ロクロナダ。白底深未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
084-06	SE1	土師器	-	-	-	ロクロナダ。白底深未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
193	B V37	土師器	14.9	7.8	5.9	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
083-01	SE1	土師器	14.9	7.8	5.9	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
194	B V37	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。自然胎あり。	密 ~4mmの小石含む	良	灰黄	底部完存	
085-01	SE1	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。自然胎あり。	密 ~4mmの小石含む	良	灰黄	底部完存	
195	B V37	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
084-01	SE1	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
196	B V37	土師器	(11.0)	(7.3)	3.8	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
085-06	SE1	土師器	(11.0)	(7.3)	3.8	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
197	B V37	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
084-03	SE1	土師器	-	-	-	ロクロナダ。底部外面未切り。	密	並	灰白	口縁1/2	
198	B V37	土師器	-	-	-	口縁端部内面に沈線、内外面へラ磨き。	密	並	灰白	口縁3cm	
085-07	SE1	土師器	-	-	-	口縁端部内面に沈線、内外面へラ磨き。	密	並	灰白	口縁3cm	
199	B V37	土師器	-	-	-	底部外面ナダ。内面放射状のへラ磨き。	密	並	灰白	口縁3cm	
085-04	SE1	土師器	-	-	-	底部外面ナダ。内面放射状のへラ磨き。	密	並	灰白	口縁3cm	
200	B V37	土師器	長 1.7	厚 1.3	0.3-0.7	小駒形で、両側面縦結れる。端部折り曲げ、小孔2つあり。	-	-	-	完形	
085-05	SE1	土師器	長 1.7	厚 1.3	0.3-0.7	小駒形で、両側面縦結れる。端部折り曲げ、小孔2つあり。	-	-	-	完形	
201	B V37	土師器	-	-	-	器壁薄く、口縁端部新外、内外面に壁状の文様あり。	密	並	灰白	口縁3cm	
085-08	SE1	土師器	-	-	-	器壁薄く、口縁端部新外、内外面に壁状の文様あり。	密	並	灰白	口縁3cm	



第43図 SE1 遺物実測図 (1:4、200は1:2)

4 通路状遺構

S R 3 (第33図 P L17)

A地区の西部S B 2・3と重複して検出された南北方向の平行する2条の溝で、その方位はN28°Eを示す。各溝はS B 5梁行の西から2間目と3間目の北延長に位置し、S B 5から北側への通路の側溝と考えられる。

通路の幅(各溝底内側の傾斜変換線で計測)は、2.4~2.5mで北側が若干開く。各側溝は幅0.2~0.4m、深さ0.1~0.15m、東側溝は5.0m、西側溝は3.5m確認した。また、部分的に底部がビット状に落ち込むが、溝に伴うものかは不明である。

5 溝

S D 4 (第44・45図 P L25・40~42)

A地区の中央で検出された東西方向の溝で、東端部は南に湾曲する。規模は東西18.0m、南北0.4~1.9m、深さ0.1~0.2mで、南あるいは西側ラインは比較的整っているのに対して北側は凹凸が多い。S D 5と一連でL字状になり、屋敷地内を北東に区画する溝と考えられる。

埋土は単純で、下位に炭化物を多く含む暗灰色粘質土、上部に暗灰色粘質土である。遺物は下位に多く含まれている。

遺物出土状況 S D 4西端の底面近くからは、やや散漫な状態であるが、土師器皿の完形品を多く含む一群が出土した。また、東端部では、床面からやや浮いた状態ではあるが、碁石が24個(245~268)まとまって出土した。これらは、木製など何らかの有機質の容器に入った状態であったと考えられる。

遺物 遺物は圧倒的に土師器が多く、黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・土鍾の他に碁石などがある。

土師器皿(202~224)の多くは、丸い底部から薄い器壁で立ち上がり、口縁部が強いヨコナデで外反するもので、完形品の法量から口径12.1~13.4cm器高2.6~3.0cmと口径15.0~15.5cm、器高3.4~3.6cmの2群に分けることができる。215は平底から直線的に外上方に開く口縁部をもつもので、口縁部のヨコナデは顕著でない。甕(227)は、口縁部を折り曲げ、体部のハケ目は粗い。台付碗(225・226)の内、225はロクロ成形である。226は断面二等辺三角形の高台の大形品である。

黒色土器碗(228)は、口縁部内面に弱い沈線がある。(229)は小型の壺形である。屈曲部と底部は平行せず、何らかの付属品であろうか。

灰釉陶器(230~237)の内、碗(230~235)には、幅広い三日月高台をもつもの(230・231)と、その退化したもの(232~235)がある。前者は折戸53号窯式期、後者は東山72号窯式期に比定できる。また、(234)の内面には漆が付着しており、パレットとして使用したと思われる。皿(236・237)も全形の判明する個体ではないが、碗と同時期と考えられる。237は内面に墨痕があり、転用硯と考えられる。瓶(239)は小形長頸瓶と思われる。

緑釉陶器皿(238)の口縁部はわずかに外反し、厚い底部の外面には糸切り痕が残る。折戸53号窯式期の尾蓋または美濃産である。

土鍾(240~243)は寸胴形のものも多く、口径は0.5cm以下である。

鉄製品(244)は、断面方形で鉄釘と思われる。

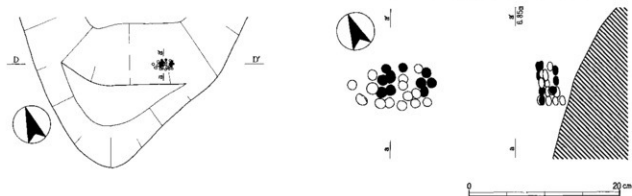
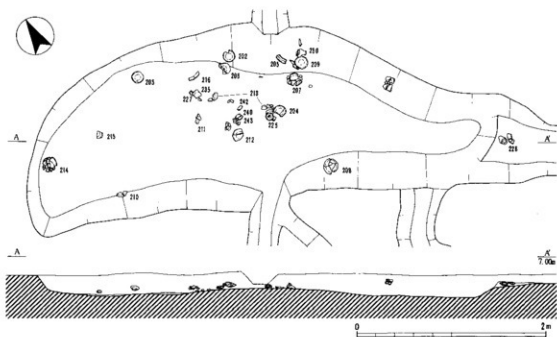
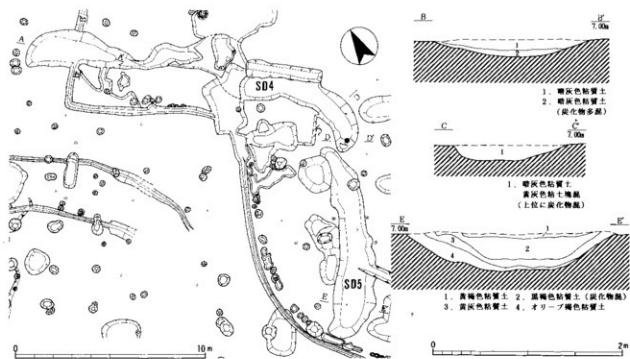
碁石(245~268) 黒石(245~255)は黒色粘板岩製である。白石に比べて形が整っているものが多いが、(249)はいびつで磨き残しの感がある。白石(256~268)は水晶製で、256~258・260には気泡をやや多く含む。257・260・264・268はやや小さく、黒石と比べると特に周縁部にザラザラした部分の残っているものが多い。大きさは、白石・黒石ともほぼ同じで径1.46~1.66cm、厚さ0.61~0.84cm、重さ2.0~3.6gである。

S D 5 (第44・46図 P L24・42)

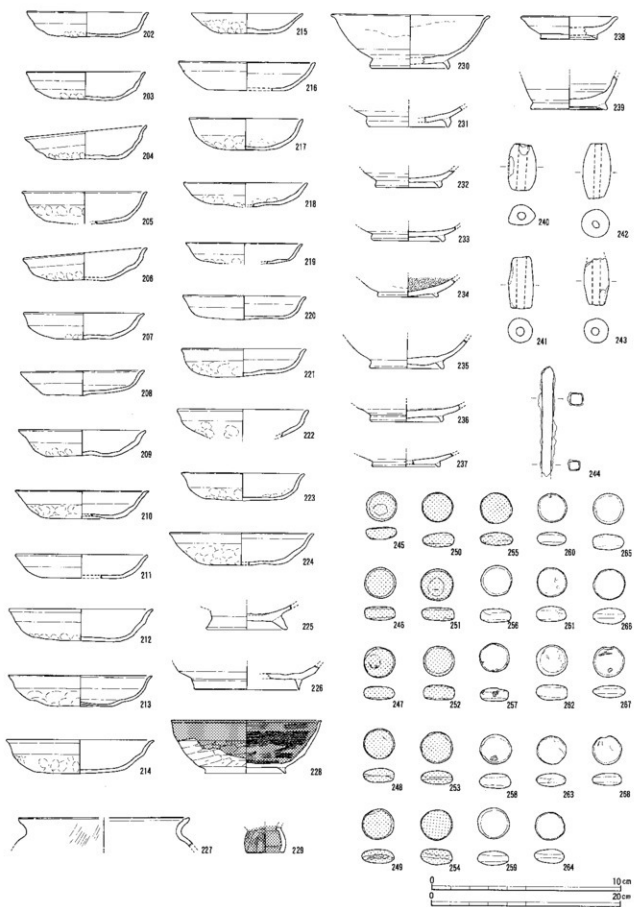
S D 4の南東で検出された南北方向の比較的短い溝である。S D 4と一連でL字状になり、屋敷地内を北東に区画すると考えられる。全長10.2m、最大幅2.2m、深さ0.3mである。西側は直線的で東側が膨らみ気味である。

遺物 遺物には土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器があるが、小片がほとんどである。

土師器皿(269~273)は、丸い底部と強いヨコナデ外反するものがほとんどである。269は口縁部が直線的で、端部に油煙が付着し灯明皿として使用されている。台付皿(274)は高台が八字状に開き、底部の器壁は薄い。甕(276)は口縁部を折り返し、ハケ目は粗い。275は口縁部つまみ上げるもので、時



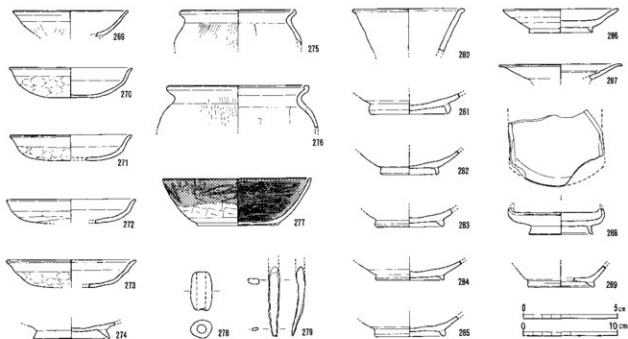
第44図 SD4・5実測図(1:200、断面図は1:40)、遺物出土状況図(中1:40、下左1:20、下右1:5)



第45图 SD4 遺物実測図 (1:4、229・244~268は1:2)

第12表 出土土器構成表1 (井戸・溝)

遺 器 名		S E 1		S D 4		S D 5		S D 6	
器 種	器 形	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	607	60.04	1,326	90.82	1,382	88.93	775	78.12
	壺・鍋	257	25.42	124	8.49	169	10.88	214	21.57
	ロウロ成形	147	14.54	1	0.07	0	0	3	0.30
	その他	0	0	9	0.62	3	0.19	0	0
	小計	1,011	100.00	1,460	100.00	1,554	100.00	992	100.00
黒色土器	碗・皿			40	93.02	59	83.10	12	92.31
	鉢			3	6.97	0	0	0	0
	壺			0	0	12	16.90	1	7.69
	小計	0	0	43	100.00	71	100.00	13	100.00
須 恵 器	杯			10	30.30	6	27.27	3	13.64
	壺			23	69.69	13	59.09	19	86.36
	その他			0	0	3	13.64	0	0
	小計	0	0	33	100.00	22	100.00	22	100.00
灰 輪 陶 器	碗・皿			83	93.26	90	90.00	41	93.18
	壺・瓶			6	6.74	10	10.00	3	6.82
	その他			0	0	100	100.00	44	100.00
	小計	0	0	89	100.00	38	100.00	14	100.00
緑 釉 陶 器	碗・皿			6	100.00	38	100.00	14	100.00
	壺・瓶			0	0	0	0	0	0
	その他			0	0	0	0	0	0
	小計	0	0	6	100.00	38	100.00	14	100.00
無 釉 陶 器	碗・皿	105	100.00	0	0	0	0	16	100.00
	鉢	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	105	100.00	0	0	0	0	16	100.00
	その他	0	0	19	95.00	18	100.00	15	100.00
そ の 他	製塩土器	0	0	15	100.00	0	0	0	0
	瓦器(椀)	15	100.00	0	0	0	0	0	0
	清灰型鍋	0	0	1	5.00	0	0	0	0
	小計	15	100.00	20	100.00	18	100.00	15	100.00
合 計	1,131	100.00	1,650	100.00	1,803	100.00	1,116	100.00	



第46図 S D 5 遺物実測図 (1:4、279は1:2)

期の遡るものである。

黒色土器A類の碗(277)は、口縁端部にわずかな面をもつ。体部外面はへう削り後にへう磨き、内面はへう磨き調整である。高台は断面三角形の低いものである。

280は時期の遡る須恵器平瓶の口縁部であろう。

灰釉陶器碗(281~285)は、幅広の三日月高台のもの(281)と、その退化したのもの(282~285)がある。

緑釉陶器碗(289)は高台は幅広で、内面が窪み体部は直線的である。皿(286)の口縁部は直線的で、器壁は厚い。段皿(287)の口縁端部は水平方向に引き出され、内面に低い段がある。耳皿(288)は耳部の折り返しは弱く、高台は高く長い。折戸53号窯式期の美濃産である。

SD6 (第47図 P L27)

A地区の北部から東部にかけて検出された溝である。幅0.4m、深さ0.1mで約64m確認した。

調査区北部では直線的に南北にのび、SD7・8が東西に分岐する。中央部ではSD4・5と平行するようにS字状に湾曲し、東側には垣根状遺構SA7がある。東部ではSR1の方向を踏襲し、直線的に東に延びる。SD5より新しく、SD6はSD7・8と一連で、屋敷地を区画する溝と考えられる。

遺物 遺物は非常に少ないが、土師器や無釉陶器・土鍾などがある。

土師器杯(290)は平底で口縁部が直線的に延びる。甕(295)は口縁部を折り返し、内外面にハケ目が残る。台付皿(291)はロクロ成形で、台部には糸切り痕が残る。無釉陶器碗^甲(292)は口縁部が緩やかに外

反し、藤澤編年の3ないし4型式に比定される。

SD7 (第47図 P L26・42)

A地区の北部で検出された東西方向の溝である。幅0.4m、深さ0.1mで、約36m確認された。東端近くで約2.5m途切れており、出入口と思われる。

遺物 遺物は非常に少ないが、土師器や無釉陶器・銅製品がある。小皿(296)は口縁部を欠くが、藤澤編年の8型式に相当する。銅製品(297)は幅1.6cmの小判状をしている。厚さ0.1cm以下と非常に薄く、端部を折り返している。片面には菊花状と同心円状の文様が刻印されている。

SD8 (第47図)

A地区の北西部で検出された、SD6の北部から西へ分岐する溝である。SD6と共にSB1を囲むように巡る。幅0.3m、深さ0.1mで、13.5mが検出された。

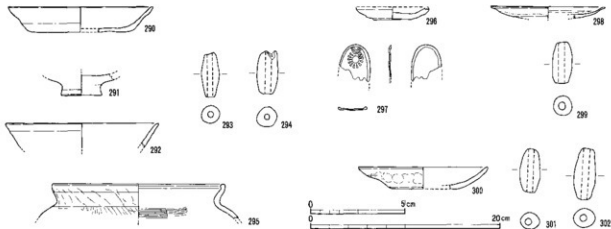
遺物 遺物には土師器・黒色土器・灰釉陶器(298)・土鍾(299)などがある。

SD9 (第47図)

A地区の北部で検出された、湾曲する溝である。幅0.2m、深さ0.1mで約7m確認された。SK6より古く、土師器皿(300)や土鍾(301・302)などが出土している。

SD10

A地区の北西部で検出したものであるが、埋土は不明確で溝状の落ち込みとするべきかもしれない。幅0.5m、深さ0.1mで約14m確認された。切り合い関係から、SB1・SK5・SD6より古い。図示できる遺物はない。



第47図 SD6~9 遺物実測図 (1:4、297は1:2)

第13表 遺物一覧表8 (SD4)

No.(期別) (砂層)	出土位置	部種	計測値 (cm・g)			彫刻・調整技法の特徵	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
202	A L28 SD4	土師器 甕	12.8	-	2.6	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	浅緑 灰白 浅緑	ほぼ完全	
203	A L28 SD4	土師器 甕	12.6	-	2.9	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面オサエ・ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
204	A L29 SD4	土師器 甕	12.8	-	3.0	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面オサエ・ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
205	A L28 SD4	土師器 甕	(13.0)	-	(3.0)	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
206	A L28 SD4	土師器 甕	13.1	-	2.9	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
207	A L29 SD4	土師器 甕	12.7	-	2.8	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
208	A L29 SD4	土師器 甕	12.8	-	2.7	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
209	A L28 SD4	土師器 甕	13.4	-	2.8	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面オサエ・ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
210	A K29 SD4	土師器 甕	(13.7)	-	3.0	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
211	A K29 SD4	土師器 甕	(13.7)	-	2.5	口縁部コナナ。底部内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
212	A K29 SD4	土師器 甕	15.0	-	3.4	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
213	A K29 SD4	土師器 甕	(13.7)	-	3.0	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
214	A K29 SD4	土師器 甕	15.5	-	3.6	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
215	A K29 SD4	土師器 甕	11.7	-	2.2	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
216	A L28 SD4	土師器 甕	(14.2)	-	3.0	口縁部コナナ。端部に内輪面あり。底部内面内輪ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
217	A O29 SD4	土師器 甕	(11.8)	-	3.3	口縁部コナナ。底部内面ナド・オサエ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
218	A K29 SD4	土師器 甕	(12.8)	-	2.5	口縁部コナナ。底部内面ナド・オサエ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
219	A L29 SD4	土師器 甕	(12.2)	-	-	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
220	A M29 SD4	土師器 甕	(12.8)	-	2.5	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
221	A N29 SD4	土師器 甕	13.3	-	3.0	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
222	A O29 SD4	土師器 甕	(13.6)	-	-	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
223	A O29 SD4	土師器 甕	(13.0)	-	2.9	口縁部コナナ。底部内面ナド・オサエ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
224	A O29 SD4	土師器 甕	(15.0)	-	2.9	口縁部コナナ。底部外面オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
225	A L29 SD4	土師器 甕	-	8.6	-	ナド。底部外面未切り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
226	A M29 SD4	土師器 甕	-	(11.0)	-	ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
227	A K29 SD4	土師器 甕	-	-	-	口縁部コナナ。底部外面ナド・オサエ、内面ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
228	A L29 SD4	土師器 甕	15.8	8.3	5.3	口縁部コナナ。肩部鋭い浅緑。底部外面へラ削り。内面内輪面へラ削り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
229	A N29 SD4	土師器 甕	-	(3.8)	-	肩部は近縁面と平行しない。縦断面コナナ。底部外面ナド、内面コナナ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
230	A L28 SD4	土師器 甕	(16.8)	(8.0)	5.7	灰緑削り。底部外面口縁部ナド、内面口縁部ナド。底部外面未切り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
231	A O29 SD4	土師器 甕	-	(8.3)	-	底部・底部外面口縁部ナド、内面口縁部ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
232	A N29 SD4	土師器 甕	-	6.3	-	底部内面口縁部ナド。底部外面未切り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
233	A K29 SD4	土師器 甕	-	7.1	-	底部内面口縁部ナド。底部外面未切り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
234	A K29 SD4	土師器 甕	-	6.0	-	灰緑削り。底部内面口縁部ナド。底部外面口縁部ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
235	A K29 SD4	土師器 甕	-	8.0	-	底部内面口縁部ナド。底部外面口縁部ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
236	A N29 SD4	土師器 甕	-	7.1	-	灰緑削り。底部内面口縁部ナド。底部外面口縁部ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
237	A N29 SD4	土師器 甕	-	6.6	-	口縁部コナナ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
238	A N29 SD4	土師器 甕	(10.0)	6.0	2.5	底部内面以外無輪。口縁部ナド、底部外面未切り。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
239	A O29 SD4	土師器 甕	-	(8.0)	-	口縁部コナナ。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
240	A K29 SD4	土師器 甕	長 4.9 重 31.0	幅 2.6	孔径 0.9	ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
241	A N29 SD4	土師器 甕	長 5.8 重 22.3	幅 2.9	孔径 0.6	ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
242	A K29 SD4	土師器 甕	長 5.5 重 32.0	幅 3.0	孔径 0.9	ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	
243	A K29 SD4	土師器 甕	長 1.0 重 31.0	幅 2.6	孔径 0.8	ナド。	赤	赤	灰白 浅緑	ほぼ完全	

第14表 遺物一覧表9 (SD4・5)

No(報告) (図録)	出土位置	器種	計測部 (cm)			形状・調整技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考	
			口径	径深	器高						
244	A L29	石製品	長一	幅0.5		楕円方形。	—	—	—	釘頭残存	
099-06	SD4	釘		-0.6							
245	A O29	石製品	径15.6	厚6.2	重2.5	黒色粘板岩。磨痕あり。	—	—	—	完形	
093-01	SD4	基石									
246	A O29	石製品	径16.1	厚6.7	重3.0	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-02	SD4	基石									
247	A O29	石製品	径15.6	厚6.5	重2.7	黒色粘板岩。磨痕あり。	—	—	—	完形	
093-03	SD4	基石									
248	A O29	石製品	径16.0	厚7.2	重2.7	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-04	SD4	基石									
249	A O29	石製品	径16.9	厚7.0	重2.8	黒色粘板岩。やや不整形。	—	—	—	完形	
093-05	SD4	基石									
250	A O29	石製品	径15.8	厚7.6	重2.9	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-06	SD4	基石									
251	A O29	石製品	径16.6	厚6.2	重3.0	黒色粘板岩。磨痕あり。	—	—	—	完形	
093-07	SD4	基石									
252	A O29	石製品	径16.0	厚7.7	重3.1	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-08	SD4	基石									
253	A O29	石製品	径16.5	厚6.8	重3.0	黒色粘板岩。断面レンズ状。	—	—	—	完形	
093-09	SD4	基石									
254	A O29	石製品	径16.1	厚7.8	重3.1	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-10	SD4	基石									
255	A O29	石製品	径16.4	厚6.3	重2.6	黒色粘板岩。	—	—	—	完形	
093-11	SD4	基石									
256	A O29	石製品	径15.6	厚8.0	重2.1	木品。	—	—	—	完形	
093-12	SD4	基石									
257	A O29	石製品	径14.6	厚6.9	重2.5	木品。	—	—	—	完形	
093-13	SD4	基石									
258	A O29	石製品	径15.6	厚7.5	重2.9	木品。	—	—	—	完形	
093-14	SD4	基石									
259	A O29	石製品	径16.0	厚7.2	重2.9	木品。	—	—	—	完形	
093-15	SD4	基石									
260	A O29	石製品	径15.3	厚7.8	重2.9	木品。周縁部ザラザラしている。	—	—	—	完形	
093-16	SD4	基石									
261	A O29	石製品	径15.2	厚6.6	重2.5	木品。	—	—	—	完形	
093-17	SD4	基石									
262	A O29	石製品	径16.2	厚7.8	重3.5	木品。周縁部一部欠。	—	—	—	ほぼ完形	
093-18	SD4	基石									
263	A O29	石製品	径15.0	厚6.6	重2.2	木品。周縁部一部欠。	—	—	—	ほぼ完形	
093-19	SD4	基石									
264	A O29	石製品	径14.8	厚7.0	重2.5	木品。	—	—	—	完形	
093-20	SD4	基石									
265	A O29	土師器	径16.2	厚8.4	重3.6	木品。	—	—	—	完形	
093-21	SD4	基石									
266	A O29	石製品	径16.1	厚8.1	重3.2	木品。	—	—	—	完形	
093-22	SD4	基石									
267	A O29	石製品	径16.9	厚6.1	重2.5	木品。	—	—	—	完形	
093-23	SD4	基石									
268	A O29	石製品	径14.8	厚6.9	重2.0	木品。	—	—	—	完形	
093-24	SD4	基石									
269	A O30	土師器	(12.0)	—	—	口縁部ヨコナゲ。底部内外面ナゲ。口縁端部に係付着。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁1/4	灯明土
095-04	SD5	土師器	(12.8)	—	3.2	口縁部ヨコナゲ。底部外面オサエ、内面ナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁2/5	
270	A P31	土師器	12.8	—	2.5	口縁部ヨコナゲ。底部外面オサエ、内面ナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁5/6	
095-05	SD5	土師器	(13.5)	—	—	口縁部ヨコナゲ。底部外面ナゲ・工具、内面ナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁1/4	
271	A P31	土師器	(13.5)	—	2.9	口縁部ヨコナゲ。底部外面ナゲ・オサエ、内面ナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁1/3	
272	A P32	土師器	—	(7.8)	—	ナゲ、ヨコナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	明灰	縁台側	
095-01	SD5	土師器	(12.0)	—	—	口縁部ヨコナゲ。底部外面タテハケ、内面ナゲ。	やや密 煮砂	茶	明灰	口縁1/5	
273	A P31	土師器	(14.6)	—	—	口縁部ヨコナゲ。底部外面タテハケ、内面ナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁1/5	
095-02	SD5	土師器	15.6	8.4	5.0	口縁部ヨコナゲ。底部外面へラ削り後へラ磨き。内面へラ磨き。底部外面ナゲ。	密 ~5mmの石・砂粒多い	茶	灰白	口縁1/2	
274	A O31	土師器	径4.1	重2.3	孔径0.9	ナゲ。	密 ~5mmの小石・砂粒	茶	黒褐	ほぼ完形	
096-02	SD5	土師器	径3.7	重0.6	厚0.3	断面長方形。先端は圓くなり、変形。				不明	
275	A P31	土師器	(11.6)	—	—	ろくろナゲ。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	口縁1/7	
096-06	SD5	土師器	—	(8.0)	—	ロクロナゲ。	密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	高台2/5	
276	A P32	土師器	—	(5.7)	—	ロクロナゲ。底部内面糸切り。	密 ~2mmの砂粒含む	茶	灰白	高台1/3	
096-07	SD5	土師器	—	(6.8)	—	ロクロナゲ。底部外面糸切り。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	高台1/3	
277	A O30	土師器	—	(6.8)	—	ロクロナゲ。底部外面ロクろ削り。	密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	高台1/2	
096-05	SD5	土師器	—	7.2	—	ロクロナゲ。底部内面ナゲ。外面糸切り。	やや密 ~1.5mmの砂粒含む	茶	灰白	高台残存	
278	A O31	土師器	—	—	—						
096-09	SD5	土師器	—	—	—						
279	A P31	土師器	—	—	—						
151-03	SD5	土師器	—	—	—						
280	A P32	土師器	—	—	—						
096-08	SD5	土師器	—	—	—						
281	A P31	土師器	—	—	—						
096-06	SD5	土師器	—	—	—						
282	A P32	土師器	—	—	—						
096-07	SD5	土師器	—	—	—						
283	A P32	土師器	—	—	—						
096-05	SD5	土師器	—	—	—						
284	A O30	土師器	—	—	—						
096-04	SD5	土師器	—	—	—						
285	A O32	土師器	—	—	—						
096-03	SD5	土師器	—	—	—						

第15表 遺物一覧表10 (溝)

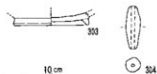
No(発出)	出土位置 (発出)	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整注法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	
			口径	底径	器高							
286	A P31	緑釉陶器	(12.2)	6.8	2.5	口クロ削り、底部内面トナテ度あり。底部外面以外無胎。	赤	良	焼	口縁1/6 高台1/2	高台目Bc 5 尾瀬・美濃産	
287	A P32	緑釉陶器	(13.0)	—	—	全面に無胎。	赤	良	良	口縁1/10		
133-03	SD5	広縁段蓋	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/10		
288	A P33	緑釉陶器	—	(5.8)	—	口クロ削り、ヘリ磨き、底部外面糸切りナデ。全面に無胎。	赤	良	良	口縁1/6 高台1/2	高台目Bc 3 東海系産	
094-01	A P31	緑釉陶器	—	(6.8)	—	ヘリ磨き、底部内面にトナテ度あり。底部外面以外、全面に無胎。	赤	良	良	口縁1/6 高台1/2	高台目Bc1-2 東海系産	
289	A P31	緑釉陶器	—	(6.8)	—	—	赤	良	良	口縁1/6 高台1/2		
132-05	SD5	陶	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/6 高台1/2		
290	A M30	土師器	(15.2)	—	2.7	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ後オセエ、内面ナデ。	やや粗 ～ 2mmの石・砂粒	赤	良	浅黄緑	口縁1/4	
097-03	SD6	杯	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/4		
291	A B32	土師器	—	(4.2)	—	口クロナデ。底部外面糸切り。	赤 ～ 1mmの石含有	赤	差	灰白	口縁1/10	口クロ成形
098-03	SD6	土師器	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/10		
292	A O32	黒釉陶器	(16.0)	—	—	口クロナデ。	赤 ～ 1.5mmの石・砂粒	赤	差	灰白	口縁1/8	
099-02	SD6	陶	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/8		
293	A L30	土師器	長 4.6 重14.7	幅 1.9	孔径 0.6	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
099-01	SD6	土師器	長 4.5 重14.7	幅 2.3	孔径 0.5	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
294	A N30	土師器	長 4.5 重20.2	幅 2.3	孔径 0.5	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
099-03	SD6	土師器	長 4.5 重20.2	幅 2.3	孔径 0.5	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
295	A L30	土師器	長 4.6 重14.3	幅 2.1	孔径 0.7	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
097-01	SD6	土師器	長 4.5 重14.3	幅 2.1	孔径 0.7	ナデ。	赤 ～ 1.5mmの石含有	赤	差	灰白	一部欠	
296	A T35	黒釉陶器	(7.8)	4.0	(1.4)	口縁部ヨコナデ、オセエ。底部外面粗いツタハケ、内面ヨコハケ。	やや粗 ～ 2mmの石含有	赤	差	灰白	口縁1/9	
100-03	SD8	小皿	—	—	—	口クロナデ。底部外面糸切り。	やや粗 ～ 2mmの石含有	赤	差	灰白	底部欠存	
297	A O35	銅製品	長 —	幅 —	厚0.1	小形物、端部磨り返し。1端に同心円状、菊花状刻印。	—	—	—	—	—	
101-04	SD8	銅製品	長 —	幅 —	厚0.3	—	—	—	—	—	—	
298	A H35	灰釉陶器	(12.5)	—	—	口クロナデ。灰釉掛け掛け。	赤	差	灰白	口縁1/8		
100-02	SD7	重	—	—	—	—	—	—	—	口縁1/8		
101-01	A H35	土師器	長 4.3 重22.6	幅 2.0	孔径 0.8	ナデ。	やや粗 ～ 3mmの石含有	赤	差	灰白	完整	
300	A O34	土師器	長 4.3 重22.6	幅 2.0	孔径 0.8	ナデ。	やや粗 ～ 3mmの石含有	赤	差	灰白	完整	
100-04	SD9	土師器	(13.6)	—	2.3	口縁部ヨコナデ。底部外面オセエ、内面ナデ。	やや粗	赤	差	浅黄緑	口縁3/8	
301	A O31	土師器	長 4.6 重14.3	幅 2.1	孔径 0.7	ナデ。	やや粗 ～ 0.3mmの石含有	赤	差	灰白・黄緑	完整	
101-02	SD9	土師器	長 4.6 重14.3	幅 2.1	孔径 0.7	ナデ。	やや粗 ～ 0.3mmの石含有	赤	差	灰白・黄緑	完整	
302	A O34	土師器	長 5.4 重22.9	幅 2.3	孔径 0.7	ナデ。	粗 ～ 0.5mmの石含有	赤	差	灰白・黄緑	完整	
101-03	SD9	土師器	長 5.4 重22.9	幅 2.3	孔径 0.7	ナデ。	粗 ～ 0.5mmの石含有	赤	差	灰白・黄緑	完整	
303	A L30	灰釉陶器	—	(7.8)	—	底部外面口クロ削り、内面口クロナデ。	赤 黄緑粒赤	良	良	灰白	高台1/5	
108-03	SF4	陶	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
304	A L30	土師器	長 4.5 重 9.4	幅 1.5	孔径 0.3	ナデ。	やや粗 ～ 1.5mmの砂粒含有	赤	差	灰白 黄緑	完整	
108-09	SF4	土師器	長 4.5 重 9.4	幅 1.5	孔径 0.3	ナデ。	やや粗 ～ 1.5mmの砂粒含有	赤	差	灰白 黄緑	完整	

6 焼土坑

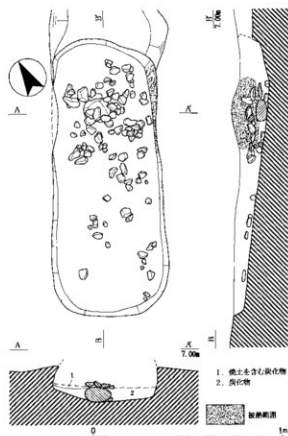
S F 4 (第48・49図 P L26)

A地区の南西部、S B 5北東部で検出された焼土坑である。全長1.8m、幅0.7mの隅丸長方形で、その主軸はN26° Eを示す。北から1/3程の東西壁がよく焼けており、特に西壁はオーバークックしていて天井部が存在したと思われる。埋土下層は炭化物層である。床面の北部中央には15cm大の石材があり、その周囲には小石が散在していた。床面はこの大形石材のある部分が最も深く、20cmを残し、南北両側に次第に浅くなる。

遺物 遺物には、土師器や灰釉陶器、土錘などがある。灰釉陶器碗(303)は、底部外面を口クロ削りするが、高台の形状から東山72号窯式期と考えられる。土錘(304)は長さ4.5cm、重さ9.4gである。



第48図 SF4遺物実測図(1:4)



第49図 SF4実測図(1:20)

7 土坑

土坑は31基検出された。A地区では中央から北東部、区西溝の外側（北または東側）にその多くがある。廃棄土坑がほとんどと考えられる。全体に出土遺物が少なく、時期決定は困難なものが多いが、切合い関係や埋土などから、SD4・5に先行するものにはSK3・9・10・11・18がある。

以下、特徴的な土坑に関して記述する。それ以外は一覧表（第17表）を参照されたい。

SK3（第50図 P L27・43）

A地区の中央で検出された東西1.5m以上、南北3.9mの不整形の上坑で、中央部は一段下がり、深さ0.5mとなる。切合い関係からSD4より古い。

遺物は埋土下層の黒色粘質土に多く、中央最深部でほぼ完形の黒色土器碗(307)が正位置で、その南西から黒色土器鉢(308)が出土とした。

遺物 須恵器杯(305)は、一見土師器と思わせる焼成不良品である。口縁部の器壁は厚く、直線的にのびる。底部は雑なロクロ削り調整である。

黒色土器(307・308)はいずれもA類である。碗

(307)の口縁部は肥厚し内湾する。外面はヘラ削り、内面はヘラ磨き調整する。鉢(308)は、球形の体部と短く外反する口縁部からなり、体部外面をヘラ削り、内面をヘラ磨き調整する。

緑釉陶器碗(306)の高台端面は窪み、底部内面には太い凹線がある。

SK4（第50図 P L43）

A地区西部で検出された東西2.8m、南北2.2m、深さ0.2mの不整形な土坑である。遺物は埋土下層の黒色粘質土から多く出土している。

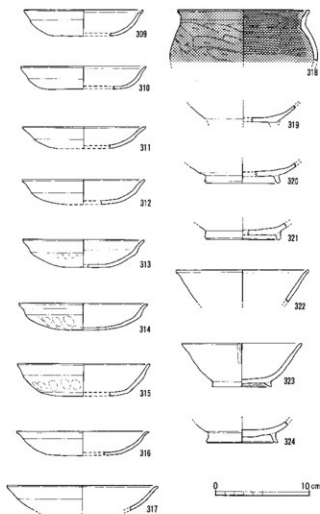
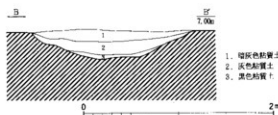
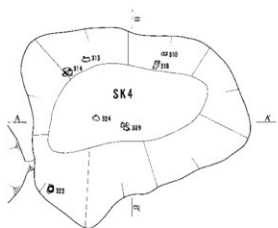
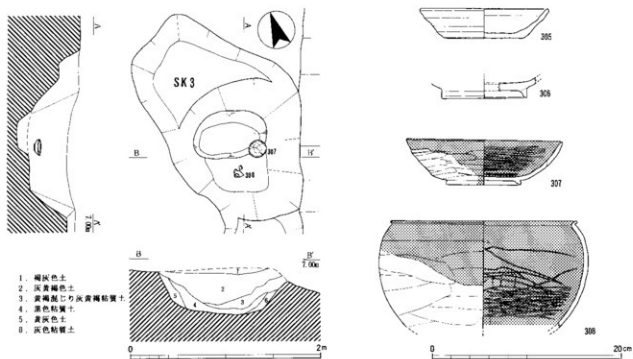
遺物 遺物は小片がほとんどで、全形の知りうるものはない。土師器皿(309~317)は、丸い底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を強いヨコナデによって外反させる。体部外面には指押さえ痕が残る。

黒色土器甕(318)はいわゆるB類に相当するもので、短い口縁部と球形の体部からなり、外面をヘラ削り調整、内面をヨコハケ調整する。

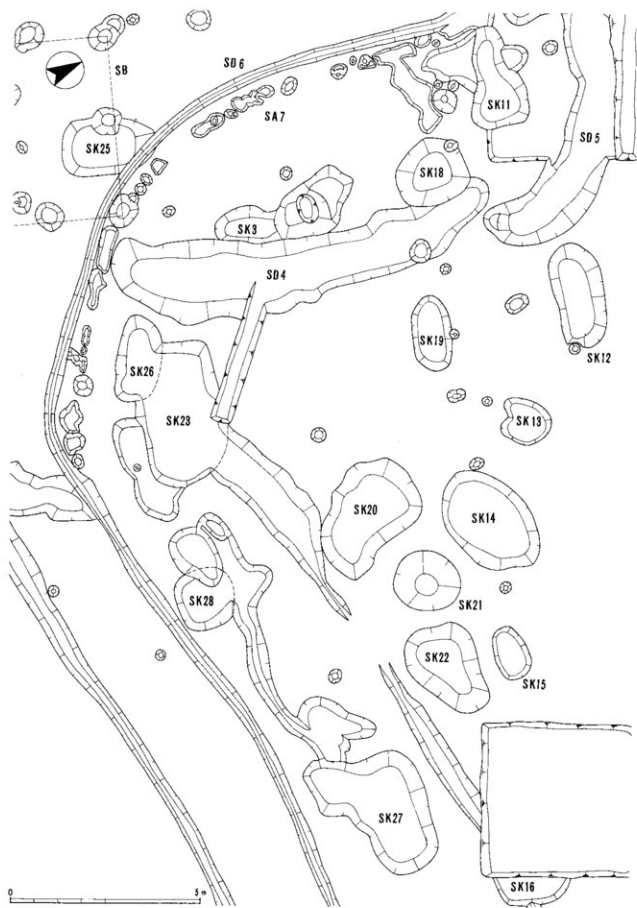
灰釉陶器(319~321)には、底部外面にロクロ削りを実施(320)と、糸切りのままの(319・321)がある。東山72号窯式期に相当する。

第16表 出土土器構成表2（土坑）

遺 器 名		S K 3		S K 4		S K 5		S K 23	
部 種	部 形	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)	破片数	比 率 (%)
土 師 器	杯・碗・皿	428	88.13	491	86.90	571	86.25	331	69.54
	甕・甗	56	11.57	68	12.04	87	13.14	143	30.04
	ロクロ成形	0	0	0	0	4	0.60	1	30.04
	その他	0	0	6	1.06	0	0	1	0.21
	小計	484	100.00	565	100.00	662	100.00	476	100.00
黒色土器	碗・皿	14	60.87	18	85.71	27	100.00	20	90.91
	鉢	9	39.13	0	0	0	0	0	0
	甕	0	0	3	14.29	0	0	2	9.09
	小計	23	100.00	21	100.00	27	100.00	22	100.00
須 恵 器	杯	2	28.57			0	0	3	33.33
	甕	5	71.46			9	100.00	6	66.67
	その他	0	0			0	0	0	0
	小計	7	100.00	0	0	9	100.00	9	100.00
灰 釉 陶 器	碗・皿	5	62.50	31	86.11	32	84.21	25	86.21
	甕・甗	3	37.50	5	13.89	6	15.79	4	13.79
	小計	8	100.00	36	100.00	38	100.00	19	100.00
	緑 釉 陶 器	碗・皿	3	100.00	10	100.00	1	100.00	1
	甕・甗	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	3	100.00	10	100.00	1	100.00	1	100.00
黒 釉 陶 器	碗・皿								
	鉢								
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0
	0	0	0	0	0	0	0	0	0
そ の 他	製塩土器	16	100.00	9	100.00	16	100.00	4	100.00
	瓦器(碗)	0	0	0	0	0	0	0	0
	滑石製網	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	16	100.00	9	100.00	16	100.00	4	100.00
合 計		541	100.00	641	100.00	753	100.00	541	100.00



第50图 SK 3·4 平面图 (1:40)、遗物实测图 (1:4)



第51图 土抗群实测图 (1:100)

緑釉陶器(322~324)は、いずれも碗である。323の直線的にのびる口縁部には輪花があり、底部内面には三又トナシ痕と凹線がみられる。東山72号窯式に下る可能性がある。324の底部内面には、粗いヘラ磨きが顕著に残る。

SK 5 (第52図 P L 43)

A地区北部で検出された長径3.5m、短径1.9m、略楕円形の土坑である。切合い関係からSD10より新しい。

遺物 土師器皿(325・326)は、丸い底部から内湾する口縁は、端部が強いヨコナデで外反する。327はロクロ成形で、口縁部の立ち上がりは低く、肥厚して端面をもつ。底部には糸切り痕が残る。

灰釉陶器(328・329)の内、328の高台はつづれた三日月状で、灰釉が漬け掛けされている。329は底部外面をロクロ削りする。

緑釉陶器(330・331)の内、331は、貼付高台の下に糸切り痕が残り、焼成時の亀裂を補修している。

SK 20 (第51・52図 P L 27・43)

A地区の東部で検出された長径3.2m、短径2.3mの楕円形状の土坑である。

遺物 土師器皿(332)は、平らな底部と直線的にのびる口縁部からなり、外面には指頭圧痕が明瞭に残る。

SK 25 (第51・52図 P L 27)

A地区の南部で検出された長径2.4m、短径1.6mの楕円形の土坑である。切合い関係からSB11・SD6より古い。

遺物 土師器皿(333)は口縁部は中位で屈曲し、下位にはハケ状の工具痕がある。

SK 7 (第52図)

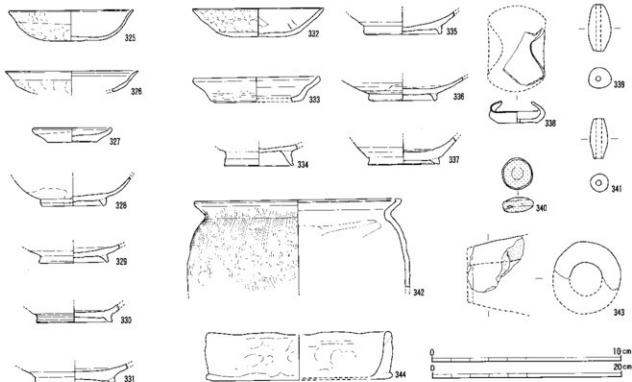
A地区の北部で検出された長径4.2m、短径2.5mの楕円形の土坑である。切合い関係からSD6・7より新しい。

遺物 土師器台付皿(334)はロクロ成形で、底部内面に一部ハケ目が残る。

SK 23 (第51図・52 P L 27)

A地区の東部で検出された長径3.9m、短径2.2mの楕円形土坑である。切り合い関係からSK2・SR1より新しく、SK26より古い。

遺物 灰釉陶器碗(335)は体部底部脇に高台が貼り付けられ、底部外面には糸切り痕が残る。



第52図 土坑出土遺物実測図(1:4, 340は1:2)

S K 24 (第52図 P L 43)

A地区の南部、S B 5の南東で検出された。規模の割に浅く、土坑より落ち込みとした方が良くもされない。

遺物 灰釉陶器皿(336)は体部から底部にかけてロクロ削りし、灰釉が濃く掛けられている。

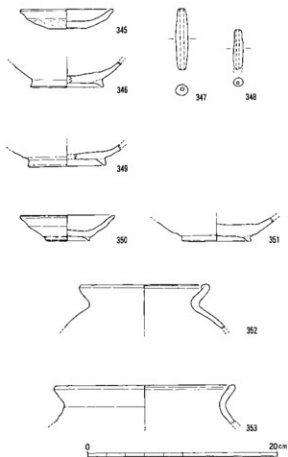
S K 11 (第52図 P L 27・43)

A地区の中央S D 4・5・6に挟まれる位置で検出された。東西2.7m、南北2.9mの不整形な土坑である。埋土はS D 4に先行するS K 9・10に近い。

遺物 緑釉陶器椀(337)は、底部外面に螺旋状の緑彩を施す。折戸53号室式期の尾張ないし美濃産である。灰釉陶器耳皿(338)は、無高台で、底部外面に糸切り痕が残る。土鉢(339)は、長さ4.9cm口径0.5g、重さ23.6cmである。

S K 26 (第51・52図 P L 27・43)

A地区の東部で検出された長径2.2m、短径1.1mの楕円形の土坑である。切合い関係からS K 23より新しい。



第53図 S K 29~33遺物実測図 (1:4)

遺物 基石(340)は黒石で、黒色板岩製である。大きさなどは、S D 4出土例とほぼ同じものである。S K 13 (第51・52図 P L 27・44)

A地区の東部、S D 4の東側で検出された。1.3m前後の不整形な土坑である。

遺物 土師器甕(342)の口縁端部は、内側につまみ出されている。フイゴ羽口(343)は先端部径は推定6cmで、先端部には若干鉄滓が付着している。

S K 6 (第52図)

A地区の北部で検出した東西5.6m、南北4.0mの不整形な土坑である。一連のものとして検出したが複数の土坑が切り合う可能性がある。

遺物 製塩土器(344)は、底部は粘土板一枚作りで、口縁端部は粘土を3段巻き上げている。内面をヨコハケ調整している可能性がある。

S K 29 (第38・53図 P L 26)

B地区の中央部、S B 13に伴う土坑である。東西1.5m、南北3.6mでS B 13の東側2×1間分に収まる。略楕円形を呈し、底部は北側1/3が一段深くなっている。

遺物 土師器皿(345)は器壁は厚く、口縁部は強いヨコナデを施す。無釉陶器椀(346)は、やや長めの三角高台が付く。藤澤編年の4型式に相当する。土鉢(347・348)はいずれも細長いタイプで、口径は0.3~0.4cmである。

S K 30~32 (第39・53図 P L 23)

いずれもB地区の東部で検出された。S K 32は、S B 15のいわゆる南東隅土坑に相当する可能性が高い。これらは、切合い関係からS K 30→S K 31→S K 32の順となるが、出土遺物から平安時代末期の範疇に収まる。

遺物 無釉陶器(346・349・351)は、349が高台が三角形で古相を示す。小椀(350)は口縁部は直線的である。土師器甕(352)は口縁端部を折り返し、体部のハケ目はみられない。

S K 33 (第39・53図 P L 23)

S K 32の南側で検出された一辺1.5~2.1mほどの隅丸方形土坑で、S B 16に伴う南東隅土坑の可能性はある。

遺物 土師器甕(353)は口縁端部を内側に折り返し、体部にハケ目はみられない。

第17表 土坑一覧表

遺構名	地区名	平面形	概 概	出土遺物	時期	切 合 い	備 考
SK3	A Q30・31	不整形	東西1.5m以上、南北3.9m、 深さ0.3～0.5m。	土師器、須恵器、黑色土器・灰釉陶器・磁 土器、須恵器	平安中期	S D 5より古	
SK4	A I29	不整形	東西2.8m、南北2.2m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器・灰釉陶器・磁 土器、須恵器、製塩土器、フイゴ引口、炭化物	平安後期	—	
SK5	A L27付近	略楕円形	長径3.5m、短径1.9m、 深さ0.1～0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器・灰釉陶器・磁 土器、須恵器	平安	S D 10より新	
SK6	A P25	不整形	東西5.6m、南北4.0m、 深さ0.1m。	土師器、須恵器、灰釉陶器、須恵器類	平安	S D 7より古	2つの土坑?
SK7	A K36付近	楕円形	長径4.2m、短径2.5m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器	平安後期	S D 6・8より新	
SK8	A M・N27 付近	不整形	東西1.9m、南北3.2m、 深さ0.1m。	土師器、須恵器、黑色土器、製塩土器	平安	SK 9より新	
SK9	A M・N28 付近	不整形	東西4.5m、南北2.9m、 深さ0.1m。	土師器、須恵器、黑色土器、灰釉陶器	平安中期?	S D 4・SK 8より古	
SK10	A M・N29	不整形	東西2.0m、南北3.8m、 深さ0.1m。	土師器、灰釉陶器	平安中期?	S D 4・6より古	
SK11	A N29・30	不整形	東西2.7m、南北1.3m、 深さ0.1m。	土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、フイ ゴ引口	平安中期?	—	
SK12	A O・P29	楕円形	長径2.7m、短径1.3m、 深さ0.3m。	土師器、須恵器、黑色土器	平安	—	
SK13	A P・Q29	不整形	東西1.3m、南北1.2m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器、灰釉陶器、製塩土器、 須恵器、フイゴ引口	平安中期	—	
SK14	A Q29・30	楕円形	長径2.9m、短径1.8m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器、灰釉陶器	平安	—	
SK15	A R29	楕円形	長径1.2m、短径0.8m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器	平安	—	
SK16	A T29	円形?	東西0.8m、南北2.1m、 深さ0.1m。	土師器	平安	S R 1より新	試掘坑で丰稔
SK17	A T28・29	円形?	東西1.8m、南北2.4m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、製塩土器	平安	S R 1より新	
SK18	A O30	楕円形	長径1.8m、短径1.6m、 深さ0.4m。	土師器、須恵器、黑色土器、灰釉陶器、製 塩土器、炭化物	平安	S D 5より古	
SK19	A P30	楕円形	長径2.0m、短径0.9m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器	平安	—	
SK20	A Q30	楕円形	長径1.3m、短径2.3m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、製塩土器	平安	—	
SK21	A Q・R30	円形	直径2.0～2.2m、 深さ0.4m。	土師器	平安	—	
SK22	A R30	不整形	東西0.5m、南北1.7m、 深さ0.4m。	土師器、須恵器	平安	—	
SK23	A P32付近	楕円形	長径3.9m、短径2.2m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、黑色土器・灰釉陶器、ロ クロノコナ	平安	S R 1・SK 2より新、 SK 20より古	
SK24	L・M32	楕円形	長径1.9m、短径1.5m、 深さ0.1m。	土師器、灰釉陶器	平安後期	—	落ち込み?
SK25	A O32	楕円形	長径2.4m、短径1.6m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、灰釉陶器	平安中期?	S B 11・S D 6より古	
SK26	A P32	楕円形	長径2.2m、短径1.1m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器・基 石	平安後期	SK 23より新	
SK27	A S30	不整形	東西2.1m、南北1.6m、 深さ0.3m。	土師器、須恵器、製塩土器	平安	S D 3より新	
SK28	A R31	不整形	東西1.5m、南北1.2m、 深さ0.2m。	土師器、須恵器	平安	S D 3より新	
SK29	B c38・39	楕円形	長径3.6m、東西1.5m、 深さ0.1～0.2m。	土師器、須恵器、灰釉陶器、無釉陶器・土 師	平安末期	S R 14・15とは不明	S 13に伴う陶 瓦出土?
SK30	B e40	不整形	東西1.0m以上、南北3.1m 以上、深さ0.1m。	土師器、無釉陶器(灰釉陶器)	平安末期	SK 31より古	
SK31	B e40	不整形	東西1.2m以上、南北3.1m 以上、深さ0.1m。	土師器、無釉陶器	平安末期	SK 32より古	
SK32	B e・f40	楕円形?	東西1.5m以上、南北3.1m 以上、深さ0.1m。	土師器、無釉陶器	平安末期	SK 31より新	S 15に伴う陶 瓦出土?
SK33	B f41付近	楕円方形	東西1.5～2.1m、 深さ0.1m。	土師器、無釉陶器	平安末期	S D 11より古	S 16に伴う陶 瓦出土?

第18表 遺物一覧表II (SK4)

No(報告) (登録)	出土位置	器 種	計 測 値 (cm・g)			形 態・調 整 技 法 の 特 徴	胎 土	色 調	残 存 度	備 考	
			口 径	底 径	深 高						
305	A O31	須恵器 杯	(13.4)	(8.5)	3.1	ロクロナデ、底部外面ロクロ削り。	やや密 ～1.5 mmの砂粒少	不良	にぶい埋	口縁1/8	
306	A O31	須恵器 杯	—	(9.0)	—	全面に施粉、底部外面は薄い。高台凹縁大きい。	密	良	(割) 10Y/4	高台凹縁2 美濃産	
307	A O31	黒色土器	16.5	7.5	4.8	口縁部ヨコナデ。底部・底部外面へろ削り後ナデ、 内面へろ磨き。	密 砂粒多	幸	灰・黄緑 黒・黒黒	ほぼ完全	
308	A O31	黒色土器	(19.6)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部外面へろ削り後ナデ、内面 へろ削り後ナデ・へろ磨き。	密	幸	灰 黒	体割1/2	
309	A I29	土師器	(12.5)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ。	やや密 ～1 mmの砂粒	差	灰白	口縁2/3	黒斑あり
310	A I29	土師器	(13.0)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ。	密	幸	灰黄緑	口縁1/4	
311	A I29	土師器	(13.0)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ。	密	幸	灰白	口縁1/4	
312	A SK4	土師器	(13.0)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ。	やや密 ～1 mmの砂粒少	幸	浅黄緑	口縁1/4	
313	A I29	土師器	(13.0)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ、外面ナデ・オ サエ。	やや密 ～1 mmの砂粒少	幸	浅黄緑	口縁1/3	

第19表 遺物一覧表12 (SK4・5他)

No.(番号) (登録)	出土位置	部 類	計測値 (cm・g)			整 形 ・ 測 量 技 法 の 特 徴	胎 土	色 灰	色 調	残 存 度	備 考	
			口 径	底 径	器 高							
314	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面内面ナデ。外面オサエ	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰白	口縁2/5	
104-02	SK4	土師器	(13.5)	—	2.8					灰白	口縁2/5	
315	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面内面ナデ。外面オサエ	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰白	口縁1/4	
104-04	SK4	土師器	(14.0)	—	(3.4)					灰白	口縁1/4	
316	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面内外面オサエ・ナデ。	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰黄緑	口縁1/5	
104-01	SK4	土師器	(14.0)	—	(2.5)					灰黄緑	口縁1/5	
317	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面内外面ナデ。	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰白	口縁1/4	
105-04	SK4	土師器	(16.0)	—	—					灰黄緑	口縁1/4	
318	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。内面ヨコナゲ。	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰白	口縁1/2	
104-07	SK4	土師器	(14.0)	—	—					灰白	口縁1/2	
319	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。内面ヨコナゲ。	やや密	～1mmの砂粒少し	並	灰白	口縁1/2	
105-03	SK4	灰輪陶器	(7.0)	—	—	口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	やや密	～1mmの砂粒少し	不良	灰白	底面3/8	高台付類
320	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	良	灰白	高台1/3		
105-01	SK4	灰輪陶器	(8.0)	—	—					灰白	高台1/3	
321	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	良	灰白	高台1/3		
105-02	SK4	灰輪陶器	(8.0)	—	—					灰白	高台1/3	
322	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	良	灰白	高台1/3		
130-02	SK4	灰輪陶器	(14.0)	—	—	全面施釉。	密	並	(釉)	2.5X7.6	口縁1/8	
323	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面内面三又トチ痕あり。全面施釉。底面外面薄し。輪底あり。	密	良	(釉)	口縁1/8	高台付Be-5	
103-01	SK4	灰輪陶器	(12.6)	6.2	4.6					灰白	口縁1/8	東海系産
324	A 129	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面内面三又トチ痕あり。全面施釉。	密	良	(釉)	口縁3/5	高台付Be-3	
130-03	SK4	灰輪陶器	(7.4)	—	—					灰白	口縁3/5	東海系産
325	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面オサエ・ナデ。内面ナデ。	やや粗	～1.5mmの石・砂粒	並	灰黄緑	口縁1/6	
107-01	SK5	土師器	13.0	—	3.3					灰白	口縁1/6	
326	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面オサエ・ナデ。	密	並	灰白	口縁1/6		
106-08	SK5	土師器	(14.0)	—	—					灰白	口縁1/6	
327	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	～1.5mmの小石・砂粒	並	灰白	口縁3/4	口縁口成形
106-05	SK5	土師器	(8.0)	(5.1)	1.5					灰白	口縁3/4	
328	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面以外に灰輪掛け削け。	密	～2.5mmの小石含む	並	灰白	高台3/4	
106-03	SK5	灰輪陶器	(6.4)	—	—					灰白	高台3/4	
329	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	～1.5mmの小石含む	並	灰白	高台1/2	
106-02	SK5	灰輪陶器	(6.8)	—	—					灰白	高台1/2	
330	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面内面三又トチ痕あり。内面トチ痕あり。	密	～2mmの石含む	良	(釉)	高台1/2	高台付Be-2
130-05	SK5	灰輪陶器	(8.0)	—	—					灰白	口縁3/5	東海系産
331	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。底面外面以外、全面施釉。断面に子ノ輪跡。	密	並	灰白	口縁3/5	高台付Be-2	
106-01	SK5	灰輪陶器	(8.4)	—	—					灰白	口縁3/5	
332	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面オサエ・ナデ。内面ナデ。工具ナデ。	密	並	灰白	口縁1/6		
108-06	SK4	土師器	(13.7)	—	3.0					灰白	口縁1/6	
333	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/6		
106-06	SK5	土師器	(13.2)	—	2.6					灰白	口縁1/6	
334	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	～1.5mmの小石含む	並	灰白	口縁1/2	
106-07	SK7	土師器	(7.2)	—	—	内面ナデ後ハケ。外面ヨコナゲ。	密	～1.5mmの小石含む	並	灰白	口縁1/2	
335	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面オサエ・ナデ。	密	並	灰白	高台1/4		
108-02	SK2	灰輪陶器	(7.8)	—	—					灰白	高台1/4	
336	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面内面ヘラ削り。灰輪掛け削け。	密	並	灰白	高台2/5		
108-01	SK2	灰輪陶器	(6.7)	—	—					灰白	高台2/5	
337	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。全面施釉。底面外面以外、全面施釉。断面に子ノ輪跡。	密	並	灰白	口縁1/2		
132-02	SK1	灰輪陶器	(7.5)	—	—					灰白	口縁1/2	高台付Be-2東海系産
338	A 127	灰輪陶器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。底面外面以外施釉。	密	並	灰白	口縁1/4		
107-02	SK1	灰輪陶器	(4.2)	2.3	—					灰白	口縁1/4	
339	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
107-05	SK1	土師器	長4.1 径13.9	—	—	ナデ。				灰白	口縁1/4	
340	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
109-04	SK2	土師器	径1.9	—	—	ナデ。				灰白	口縁1/4	
341	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
107-04	SK2	土師器	径1.7	—	—	黒色粘板質。片面に類痕あり。				灰白	口縁1/4	
342	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
109-02	SK2	土師器	径4.9 径25.6	—	—	ナデ。				灰白	口縁1/4	
343	A 127	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
109-03	SK3	土師器	(21.6)	—	—					灰白	口縁1/4	
344	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/4		
109-03	SK3	土師器	(5.8)	—	—	ナデ。端部に鉄片付着。				灰白	口縁1/2	
345	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
107-03	SK4	土師器	(9.5)	—	—					灰白	口縁1/2	
346	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
108-07	SK2	土師器	(9.5)	—	—					灰白	口縁1/2	
347	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-02	SK2	土師器	(7.2)	—	—					灰白	口縁1/2	
348	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-07	SK2	土師器	径5.5 径8.1	—	—	ナデ。				灰白	口縁1/2	
349	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
108-08	SK2	土師器	径1.0	—	—	ナデ。				灰白	口縁1/2	
350	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-04	SK2	土師器	(9.7)	—	—					灰白	口縁1/2	
351	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-01	SK2	土師器	(6.8)	—	—					灰白	口縁1/2	
352	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-05	SK2	土師器	(13.4)	—	—					灰白	口縁1/2	
353	A 129	土師器				口縁部ヨコナゲ。底面外面ヘラ削り。	密	並	灰白	口縁1/2		
110-06	SK2	土師器	(18.8)	—	—					灰白	口縁1/2	

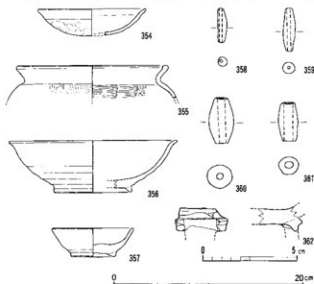
第20表 遺物一覧表13 (ピット)

No(層内) (99層)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			彫形・調整技法の特徴	胎土	肌成	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
354	A L27	土師器	(11.2)	—	2.9	口縁部ココナデ。底部内面ナデ・オサエ。	やや粗	砂粒	不良	灰色	口縁1/4
079-04	P1	土師器	(15.7)	—	—	口縁部ココナデ。後部外面タテハケ。内面ヨコハケ。内面ヨコハケ。頸部小孔あり。	やや粗	微砂	砂	にぶい	口縁1/6
079-04	P2	土師器	(17.4)	(7.9)	5.5	口縁部ココナデ。底部外面ホトリ。	やや粗	微砂	砂	にぶい	高台1/3
356	B e30	無軸陶器	(8.4)	—	—	口縁部に自然釉。	やや粗	微砂	砂	灰白	口縁1/6 底部欠存
080-01	P8	無軸陶器	径4.7	—	—	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
357	B Y38	無軸陶器	径4.6	—	—	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
080-02	P6	小椀	径4.7	—	—	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
358	A N32	土師器	径2.8	幅1.0	孔径0.3	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
080-08	P4	土師器	径4.9	幅2.7	孔径0.8	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
359	B e38	土師器	径6.3	幅1.3	孔径0.3	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
080-07	P7	土師器	径4.0	幅2.7	孔径0.7	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
360	A O34	土師器	径4.0	幅2.7	孔径0.7	ナデ。	やや粗	微砂	砂	灰白	完形
080-04	P5	土師器	径16.8	—	—	全面に黒釉。脚台部に方形または十字形の透孔。	粗	良	良	3×3cm の片	
361	A O31	土師器	—	—	—	—	—	—	—	—	
080-03	P3	土師器	—	—	—	—	—	—	—	—	
362	A I31	土師器	—	—	—	—	—	—	—	—	
151-02	土師	土師器	—	—	—	—	—	—	—	—	

8 ピット出土遺物 (第54・55図)

掘立柱建物や柱列としてまとまらないピットは多数あるが、ここでは完形あるいは特徴のある遺物の出土したピット出土遺物について記述する。

P1出土の土師器皿(354)は、丸い底部とわずかに外反する口縁部をもつ。P2出土の土師器甕(355)は、頸部に焼成後に径2cmの小孔が1つ開けられている。P8出土の無軸陶器碗(356)は口縁部が外反し、断面三角形の高台が付く。P6出土の無軸陶器小椀(357)は口縁部が直線的である。P3・4・5・7からは完形の土鍾(358~361)が出土している。360は陶製である。P9出土の緑釉陶器火舎(362)は脚部に方形あるいは十字形の透孔がある。



第54図 ピット出土遺物実測図(1:4, 362は1:2)



第55図 ピット位置図 (1:200, P9の位置は第34図)

VII その他・時期不明遺構

SD11 (第56図 P L 28)

B地区の南東部に検出された河道である。調査区が狭小のため全容は不明であるが、北側に湾曲する左岸肩部の一部、長さ27.5mを確認した。深さは1.7m以上で、埋土は下層が灰白色粗砂、上層が褐色砂質土である。当初は水の流れは活発であったが、次第に流量が減少したことが分る。また、B地区北壁土層断面にも砂礫層を埋土とする小規模な流路も確認した。SD11は、その規模などから旧安濃川の本流と考えられる。

出土遺物は細片ばかりでしかも磨耗しているものが大半で時期は判然としないが、室町時代頃と考えられる羽釜片があることや平安時代の遺物包含層を切り込んでいることから、比較的新しい時期の河道と考えられる。

炭化物集積 (第57図 P L 28)

A地区の北西部、SB1の北側に検出された。東西10.2m、南北3.4mの範囲で炭化物が認められたが、面的に広がるのではなく、炭化粒が点的に確認されたに止まる。炭化物は米が主で、集中する箇所ではワラ状の炭化物もみられた。

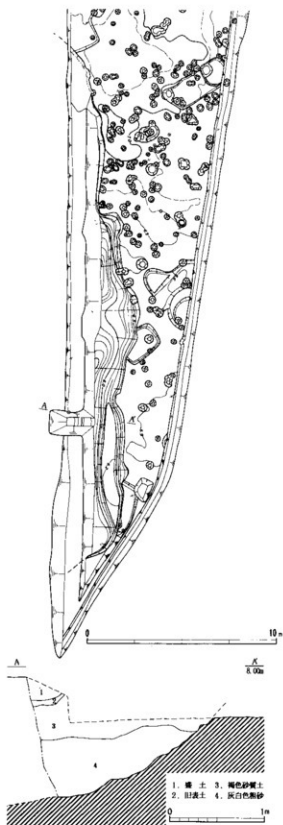
炭化米はC¹⁴分析の結果、A.D.590年(+360-330)との年代が算出された。

噴砂 (第57図 P L 28)

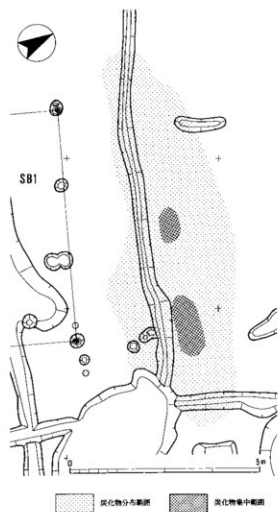
B地区の広い範囲で、下部遺構掘削中に検出された。噴砂はSD1埋土下位の黄褐色砂が約80cm上昇したもので、幅は検出面で最大5cmである。その方向は西部では東西方向を向き、東に行くに従って南北方向になる。噴砂供給元のSD1の流水方向を示していると考えられる。

噴砂は平安時代の遺構を破っていることが確認でき、現代の床土まで達している。そこでは噴砂溝に床土が落ち込む状態となっており、比較的新しい時期のものと考えられる。

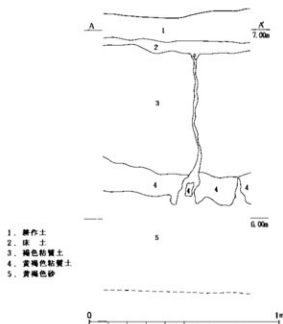
なお、付近では蔵田遺跡・替田遺跡で噴砂あるいは地震に伴う地層の褶曲が確認されている。



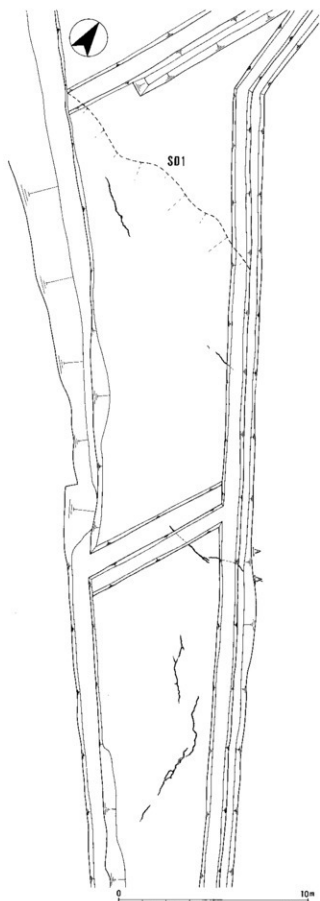
第56図 SD11実測図 (1:200)・断面図 (1:40)



第57圖 炭化物集積位置圖 (1 : 100)



第58圖 噴砂實測圖 (1 : 200)、断面圖 (1 : 20)



VIII 包含層・その他の遺物

明確に遺物包含層と呼べるものはB地区の東半部にしか存在しないが、耕作土あるいは遺構検出中に出土した遺物は、平安時代以前のもがほとんどであり、旧包含層に相当すると考えられる。ここでは、後世の遺構・攪乱などに混入した遺物や試掘調査で出土したのも一括して記述する。

1 A・B地区 (第59~61図 PL44~49)

古式土師器(363~368) S字甕(363)は口縁部外面に押引文がみられ、頸部内外面にヨコハケ調整される。甕(364)は口縁部は短く、球形の体部外面にはタタキ目が残る。小形高杯(368)は脚部上端に櫛描直線文があり、欠山式期の高杯と考えられる。他に壺形のもの(366)がある。365は手握土器、367は土玉である。

須恵器(369~374) 杯Gの身(369)は口縁部が短く内傾する。杯Bの身(370)は、外面では底部と口縁部の屈曲が明瞭なのに対して内面では緩い。台付盤(371)の口縁部は屈曲し、底部外面には糸切り痕が残る。短頸壺(372)は口縁部を欠くが、非常に扁平な体部である。甕(373)は平底で、外面にタタキ目とヘラ削り調整がみられる。宝珠硯(374)は、陸部と海部が断面三角形の内提で画されている。

土師器(375~399) 杯・皿(375~394)の内、375は内面に放射状・螺旋状の暗文がみられる。口縁部が直線的に延びる376と377は、底部をヘラ削り後にナデ調整する。378と379は、丸い底部と強いヨコナデによって外反する口縁部からなる。380は器壁が厚く、口縁部の外反もなく器高も低い。381~383は口縁部のヨコナデが強く、器壁が厚い。384と385は碗状で口径の小さいものである。

皿(387)は底部外面をヘラ削りする。台付皿(386)は長い脚台が付く。

クワク成形のもの(389~394)には、小皿(389~392)や台付皿(393・394)などがある。

壺(388)は、推定底径12.6cmの小形品である。

甕(395~399)は、口縁部内面が肥厚するもの(395)から、口縁端部を折り返しハケ目を省略したもの(398)まで連続的に認められる。

黒色土器(400~406) いずれもA類である。碗(400~403)の内、400には口縁端部内面に沈線がみられる。401は体部の器壁が厚く、断面三角形の高台が付く。402はやや長めの高台が付く。403は灰軸陶器碗を模倣した碗と考えられ、モデルは折戸53号窯式期のものであろう。

鉢A(404・405)は外面をヘラ削り調整、内面を板ナデ調整する。鉢B(406)は口縁部の小片で、口径は27cm前後であろう。類例の少ないものである。

瓦器(407・408) いずれも碗である。407は口縁端部内面に沈線がみられ、内外面とも密にヘラミガキ調整する。408の底部内面には、まばらな平行暗文がある。

灰軸陶器(409~428) 出土量は比較的多いが、全形の判明するものは少ない。碗(409~419)には、三日月形高台のもの(409・410)、幅広い三日月高台のもの(411~413)、その退化したもの(414・415)、高い高台の深碗(416~418)がある。黒笹90号窯式期から百代寺窯式期までであるが、量的には東山72号窯式期、次いで折戸53号窯式期の例が多い。413底部の墨書は「為」であろうか。419の内面には朱が付着している。

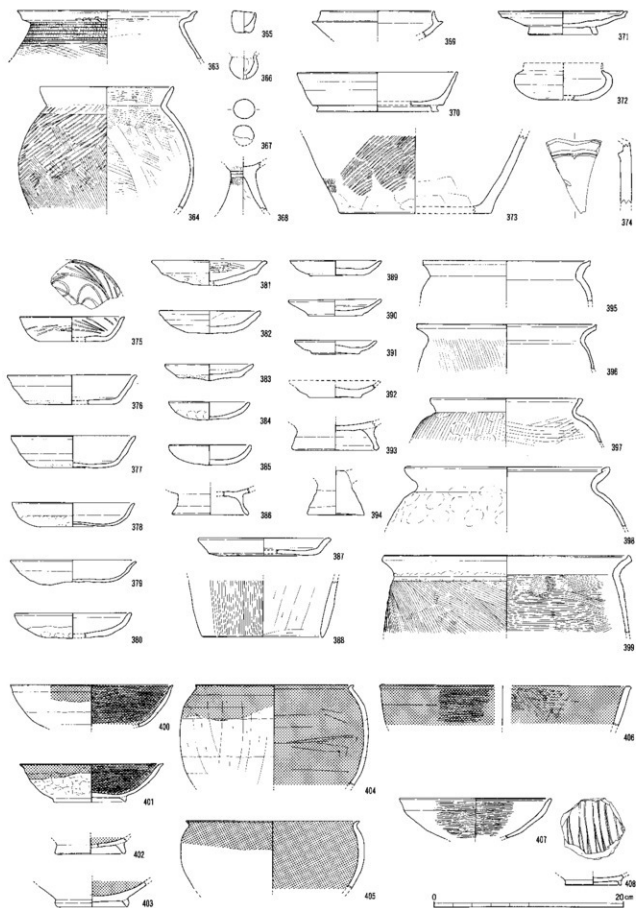
皿(420~424)には折縁皿・段皿などもあり、時期的には碗とほぼ同様であろう。

小瓶(425)は頸部を欠き、破断面を研磨し再利用している。手付瓶(426)は焼成不良で乳白色である。その他に、瓶類の底部(427)や壺類の底部(428)がある。

緑軸陶器(429~448) 器種は碗・皿類がほとんどであるが、特殊なものとして蓋や手付瓶・香炉・香炉蓋・花瓶などがある。

時期的には折戸53号窯式期のものがほとんどであるが、黒笹90号窯式期に遡る狭縁段皿(442)・蓋(443)のような良品もある。産地は美濃産あるいは美濃または尾張産のもがほとんどで、近江産の可能性のあるものも少量ある。

446は花瓶の脚部としたが、台付碗などの脚部の可能性もある。445は手付瓶の把手部分である。下



第59图 包含层他出土文物实测图1 (1:4)

部に剝離面があり、肩部との接合部分であろう。444は口径8cm前後と想定される蓋である。445は香炉蓋で透孔があり、外面には陰刻花文を施す。香炉(447)は脚台部の破片である。

無釉陶器(449~460) 図示したものは全てB地区出土で、A地区からはほとんど出土していない。

碗(449~453)は口縁部が外反し、三角高台のもの(449)と、口縁端部の外反がなくなり潰れた三角高台のもの(450~453)がある。前者は藤澤編年の4型式、後者は同5型式に相当する。小碗(455~460)は全て藤澤編年の4型式に相当するが、口径・器高の縮小した458~460は新段階と考えられる。458は片口部が付く。鉢(454)は体部外面をへら削りする。

清郷型鍋(461~464) 全部で6点出土しているが、散発的な出土である。鈔部が水平にのび、口縁端部の内傾面の広いもの(461)から鈔部が下降し短く、口縁頂部に幅の狭い面をもつもの(463・464)とその中間的なもの(462)がある。

製塩土器(465・466) 破片は相当量あるが、図示できるものは少ない。465は推定口径17.2cmで、器壁は厚い。平安時代以降のものである。466は器壁が薄く、器高は6.4cm前後である。奈良時代に遡る可能性がある。

白磁(468~471) 468は器壁が薄く、口縁端部が小さな玉縁状となるので、森田・横田編年のI類に相当する。県内では斎宮跡で出土している。469は玉縁口縁をもつもので、本来の口縁部はもう少し立つと思われる。森田・横田編年のIV類に相当する。470・471は底部片で、471の外面には連弁文がある。

瓦(472) 平瓦の端部である。凹面には糸切り痕と布目が一部に残り、端部はへら削りされる。凸面には縄目が残る。他に瓦片は11点あるが、いずれも小片で散発的な出土である。

石製品(473) 長さ6.95cm、幅1.45cm、厚さ0.5cmで、全体に丁寧に研磨され、側面の一部に沈線がある。用途は不明である。

銅製品(474) 幅約2mmの板状のものの片側を1/3ほど折返し、一端を湾曲させている。全体を復元すればU字形となるであろう。折返し部の隙間は1~2mmと非常に薄く、何らかの表装であろうか。

円形加工品(467) 半分ほどしか残っていないが、

天目茶碗の底部を利用した円形加工品である。削出し高台で、内面に鉄軸を施す。

五輪塔(475) A地区の南部で検出中に出土した。組合式五輪塔の空・風・花輪部が一石で作られたもので、空輪部が欠損している。風輪部は比較的小さく、火輪底部には径約8cmの水輪との柵孔がある。石材は砂岩である。

土鍾(476~520) 調査区の全域から出土しているが、A地区の北~東部、B地区の東部にその分布の中心がある。前者は廃棄土坑の多い部分で、後者は平安時代末期の建物の集中する箇所である。ここでは完形あるいはほぼ完形のもの45点を図示した。

ここでは形態を重視して分類した。一応以下の3類に分けたが、中間的な要素を含むものも多く、厳密にその区別は難しい。

I類(476~504)は、中央部が影らみ両端が縮まったもので、全長2.0~3.1cmである。2類(505~508)は、中央部の影らみがなく寸胴なものである。505・506は孔径が0.8~0.9cmと大きく、曳網用の可能性がある。3類(509~520)は細長い形のもので、全長1.2~3.0cmと小形のものが多い。

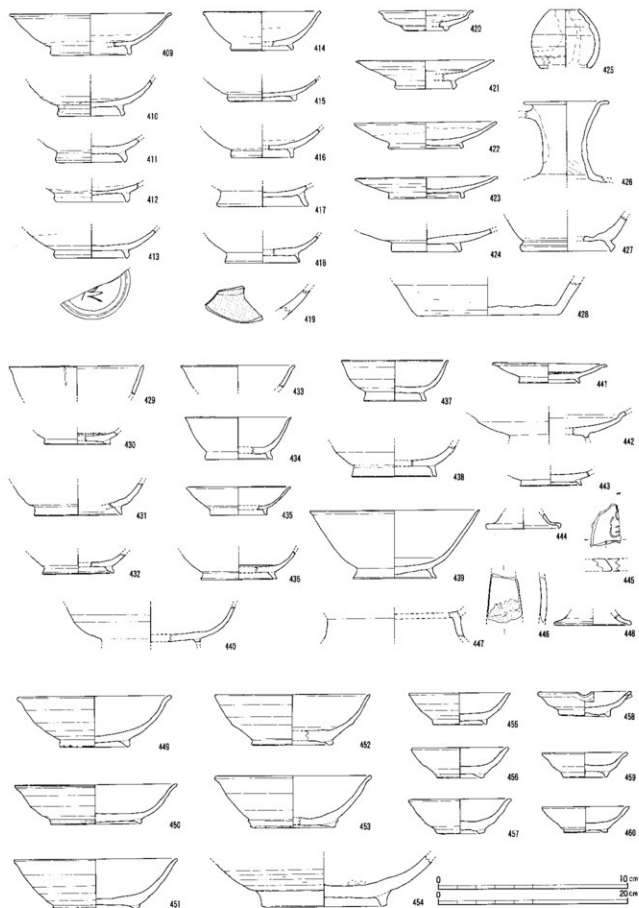
2 C地区(第62・63図 P.L29・50)

C地区は遺構が全く検出されず、耕作土直下の灰色系砂質土から、A地区と同時期か若干新しい時期の遺物が出土した。灰色系砂質土を除去した面は東西で約11cm、南北で約9cmの比高差あり、南西から北東に緩やかに傾斜する地形と考えられる。また、その下には灰色系粘質土が厚く堆積することからも後背湿地であったと考えられ、居住には不向きな場所であったことが推測できる。

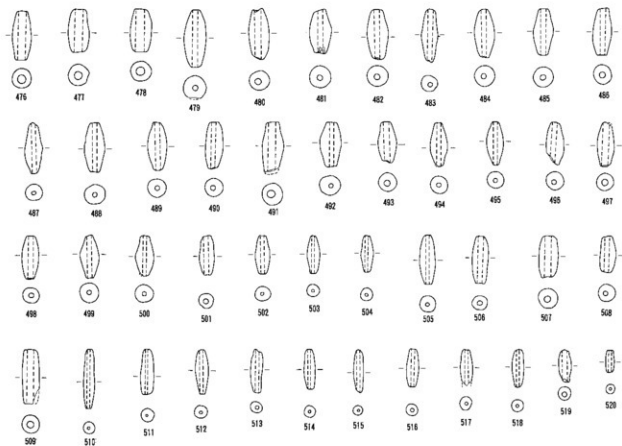
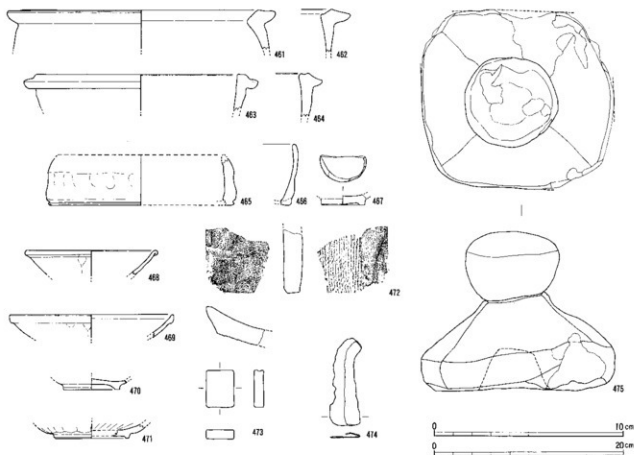
遺物は平安時代から鎌倉時代のものが大半で、土師器や灰釉陶器・緑釉陶器・無釉陶器・土鍾・銭貨がある。また、弥生時代の石鏝や古墳時代の土師器・須恵器もあるが、量は極めて少ない。

土師器(521~524・526~528) 小皿(521~524)には、器壁の薄いもの(521)、器壁の厚いもの(522~524)がある。(523)は口縁部を強くヨコナデする。クロコ成形のもの(524)もある。甕(526~528)の内、526は非常に厚手でものである。

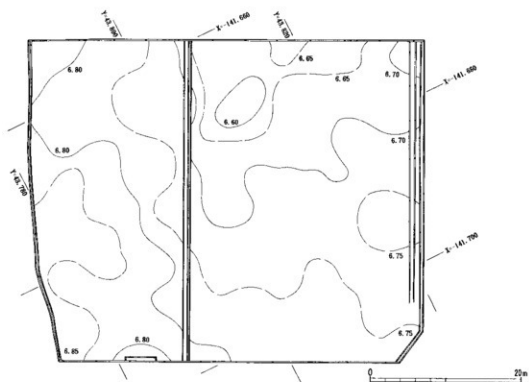
黒色土器(525) A類の碗の底部で、小さい三角高台が付き、内面をへら磨き調整する。



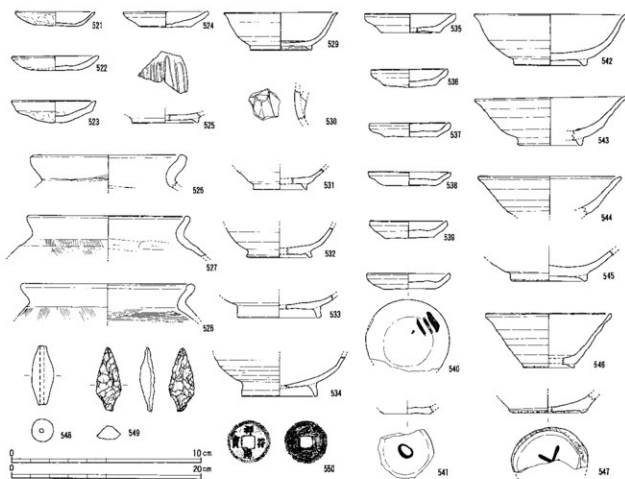
第60図 包含層他出土遺物実測図2 (1:4、419・445は1:2)



第61图 包含层他出土遗物实测图3 (1:4、473·474は1:2)



第62图 C地区测量图 (1 : 500)



第63图 包含層他出土遺物実測图 4 (1 : 4、549・550は 1 : 2)

灰釉陶器(532~534) 534は深椀で、体部から底部をロクロ削りする。532と533は、底部に糸切り痕を残す。

緑釉陶器(529・530) 529は美濃あるいは尾張産の椀で、折戸53号窯式期のものである。530は手付瓶で、把手が肩部と接合する部分であろう。

無釉陶器(531・535~547) 椀(542~547)は口縁端部が外反するもの(542)から、体部が直線化したもの(546)まで連続して認められる。547の底部には、「×」の墨書がある。

小椀(531)は断面二等辺三角形の高台と薄手の口縁部をもつ。小皿(535~541)は、底部が突出して、内面の屈曲のないもの(535・536)と、内面に屈曲のあるもの(537~541)がある。540の底部外面には「三」、541の底部外面には「○」の墨書がある。土鍾(548) 中央の膨らむ形で、全長6.2cm、重さ26.4gである。

銭貨(550)北宋銭で祥符通宝(初鋳1,009年)である。石鏡(549) 凸莖有莖式の石鏡である。

第21表 遺物一覧表14 (包含層他1)

No(報告) (品類)	出土位置	器種	計測値 (cm・g)			形状・調整方法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
363	A P32	土師器 壺A4	(18.6)	—	—	口縁部外面に斜交刻文。底部外面タテハへヨコハへ。内面ヨコハ・ナデ。	やや粗	茶	灰白	頸部1/5	
111-03	A L54地	土師器 壺C	(13.8)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部外面タテキ・ハナ。体部内面ハナ・ナデ。	やや密	茶	明黄灰 灰白	頸部1/4	
111-02	表土	土師器 壺C	(13.8)	—	—	口縁部ヨコナデ。底部外面タテキ・ハナ。体部内面ハナ・ナデ。	やや密	茶	灰白	頸部1/4	
365	B V37 (SE1)	土師器 手取	2.3	1.5	2.2	ナデ。	密	茶	灰白	頸部2/3	SE1取入
366	A L31	土師器 小形壺	—	—	—	ナデ。	密	茶	灰白	頸部1/2	
111-07	表土	土師器 小形壺	—	—	—	ナデ。	密	茶	灰白	頸部1/2	
367	B V37 (SE1)	土師器 土玉	縦2.0 横2.2	—	—	ナデ。	密	茶	黄灰	1/2	SE1取入
368	A R31	土師器 小形高杯	—	—	—	杯部内外面へラ磨き。脚柱状部外面に華道線刻文・斜状刺文列文。内面ナデ。	やや粗	茶	灰白	頸部1/2	
111-05	表土	土師器 高杯	—	—	—	杯部内外面へラ磨き。脚柱状部外面に華道線刻文・斜状刺文列文。内面ナデ。	やや粗	茶	灰白	頸部1/2	
369	B V37	土師器 高杯	(12.0)	—	—	口縁部ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
111-02	包合層	土師器 高杯	(12.0)	—	—	口縁部ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
370	B a30	土師器 高杯	(17.0)	(13.0)	4.2	口縁部ナデ。底部外面ロクロ削り後ロクロナデ。	密	茶	灰白	口縁1/8	
113-04	包合層	土師器 高杯	(17.0)	(13.0)	4.2	口縁部ナデ。底部外面ロクロ削り後ロクロナデ。	密	茶	灰白	口縁1/8	
371	B a30	土師器 高杯	(14.0)	7.2	2.5	口縁部ナデ。底部外面へラ磨き。内面ナデ。	密	茶	灰白	口縁1/8	
113-06	包合層	土師器 高杯	(14.0)	7.2	2.5	口縁部ナデ。底部外面へラ磨き。内面ナデ。	密	茶	灰白	口縁1/8	
372	A N29	土師器 高杯	—	—	—	口縁部ナデ。底部外面ロクロ削り。	黄緑粒状含有 砂粒	良	黄灰色	体部3/5	S D 4か
128-08	包合層	土師器 高杯	—	—	—	口縁部ナデ。底部外面ロクロ削り。	黄緑粒状含有 砂粒	良	黄灰色	体部3/5	S D 4か
373	B a30	土師器 高杯	(16.0)	—	—	平底。体部外面タテキ・ヘラ削り。内面ナデ・ナデ。	密	茶	黄灰	底部1/4	
114-01	包合層	土師器 高杯	(16.0)	—	—	平底。体部外面タテキ・ヘラ削り。内面ナデ・ナデ。	密	茶	黄灰	底部1/4	
374	A N29	土師器 高杯	—	—	—	膝部と高杯の境界に断面三角形の内堤。	密	茶	灰白	6×8cmの破片	S D 4か
128-07	包合層	土師器 高杯	—	—	—	膝部と高杯の境界に断面三角形の内堤。	密	茶	灰白	6×8cmの破片	S D 4か
375	B W37	土師器 高杯	(10.8)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/5	
117-08	包合層	土師器 高杯	(10.8)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/5	
376	B W37	土師器 高杯	(13.4)	—	3.1	口縁部ヨコナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/2	
115-02	包合層	土師器 高杯	(13.4)	—	3.1	口縁部ヨコナデ。体部外面へラ磨き。内面ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/2	
377	B h40	土師器 高杯	(12.8)	—	3.4	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/5	
115-03	包合層	土師器 高杯	(12.8)	—	3.4	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/5	
378	A Q28	土師器 高杯	12.8	—	2.5	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/5	
115-01	表土	土師器 高杯	12.8	—	2.5	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/5	
379	A N29	土師器 高杯	13.2	—	2.7	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	密	黄緑粒状含有 砂粒	灰緑	ほぼ完成形	S D 4か
116-01	包合層	土師器 高杯	13.2	—	2.7	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ・オサエ。内面ナデ。	密	黄緑粒状含有 砂粒	灰緑	ほぼ完成形	S D 4か
380	B W37	土師器 高杯	(12.1)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。底部外面オサエ・ナデ。内面ナデ。	やや密	茶	黄灰	口縁2/5	
115-06	包合層	土師器 高杯	(12.1)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。底部外面オサエ・ナデ。内面ナデ。	やや密	茶	黄灰	口縁2/5	
381	B Y30	土師器 高杯	(11.8)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。底部外面へラ磨き。内面ナデ。	やや密	茶	灰白	口縁1/5	
117-04	包合層	土師器 高杯	(11.8)	—	2.6	口縁部ヨコナデ。底部外面へラ磨き。内面ナデ。	やや密	茶	灰白	口縁1/5	
382	B V37	土師器 高杯	(10.4)	—	2.4	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ。内面ナデ・ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
115-08	包合層	土師器 高杯	(10.4)	—	2.4	口縁部ヨコナデ。底部外面ナデ。内面ナデ・ナデ。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
383	A L25	土師器 高杯	(9.1)	—	1.7	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ・オサエ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/3	
117-05	表土	土師器 高杯	(9.1)	—	1.7	口縁部ヨコナデ。底部内外面ナデ・オサエ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/3	
384	A L25	土師器 高杯	8.3	—	1.9	ナデ・オサエ。	やや密	茶	灰白	完成形	
117-02	表土	土師器 高杯	8.3	—	1.9	ナデ・オサエ。	やや密	茶	灰白	完成形	
385	B 441	土師器 高杯	8.5	—	2.1	ナデ。口縁端部に窪付着	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
117-01	包合層	土師器 高杯	8.5	—	2.1	ナデ。口縁端部に窪付着	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
386	B V37	土師器 高杯	(7.8)	—	(7.8)	ナデ・ヨコナデ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/6	
117-06	包合層	土師器 高杯	(7.8)	—	(7.8)	ナデ・ヨコナデ。	やや粗	茶	黄灰	口縁1/6	
387	B h40	土師器 高杯	(13.5)	—	1.8	口縁部ヨコナデ。底部外面へラ削り。内面ナデ。	やや密	茶	黄灰	口縁1/3	
115-04	包合層	土師器 高杯	(13.5)	—	1.8	口縁部ヨコナデ。底部外面へラ削り。内面ナデ。	やや密	茶	黄灰	口縁1/3	
388	B 440	土師器 高杯	(12.6)	—	(12.6)	外面タテハ、内面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/6	
118-01	包合層	土師器 高杯	(12.6)	—	(12.6)	外面タテハ、内面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/6	
389	A L25	土師器 高杯	(9.4)	5.6	1.6	口縁部ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
118-03	表土	土師器 高杯	(9.4)	5.6	1.6	口縁部ナデ。底部外面へラ削り。	やや粗	茶	灰白	口縁1/4	
390	A L25	土師器 高杯	9.6	5.5	1.7	口縁部ナデ。底部外面へラ削り。	やや密	茶	灰白	口縁1/4	
118-02	表土	土師器 高杯	9.6	5.5	1.7	口縁部ナデ。底部外面へラ削り。	やや密	茶	灰白	口縁1/4	

第22表 遺物一覧表15 (包含層他2)

No(発掘) (層別)	出土位置	遺物	計測値 (cm・g)			彫形・調整技法の特徴	胎土	顔色	残存度	備考	
			口径	底径	器高						
391	A 135	土師器	(8.5)	4.8	1.5	コクロナガ、底部外面を切り。	やや密	黄	灰白 黒灰	口縁1/8 底面1/2	コクロナガ
392	B 339	土師器	-	5.4	-	コクロナガ、底部外面を切り。	やや粗	黄	灰白	底面ほぼ 完全	コクロナガ
118-05	B 299	土師器	-	-	-	コクロナガ。	やや密	黄	黄褐色	底面完全	コクロナガ
393	B c41	土師器	(8.7)	-	-	コクロナガ。	やや粗	黄	灰白	全面磨光	コクロナガ
118-07	B 340	土師器	-	-	-	コクロナガ、台底を削り切り。	やや粗	黄	灰白	全面磨光	コクロナガ
394	B 339	土師器	-	5.9	-	コクロナガ、台底を削り切り。	やや粗	黄	灰白	全面磨光	コクロナガ
118-08	B 339	土師器	(17.6)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ。	やや粗 ~1.5mmの小石・黄砂粒	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/4	
395	B 339	土師器	(19.0)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	密 ~1.8mmの小石・黄砂粒	黄	灰褐色 灰褐色	口縁1/8	
121-03	B 339	土師器	(21.4)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	やや粗 ~4mmの小石・黄砂	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/10	
396	B 336	土師器	(25.7)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	密 ~1.5mmの小石・黄砂	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/8	
119-01	A 135	土師器	(15.6)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	密 ~1.8mmの小石・黄砂	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/8	
120-02	A 135	土師器	(21.4)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	密 ~1.5mmの小石・黄砂	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/8	
398	A 340	土師器	(17.2)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面オサエ、内面ナデ。	密 ~1.5mmの小石・黄砂	黄	黄褐色 に灰褐色	口縁1/8	
121-02	B 339	土師器	(15.0)	7.4	4.0	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き、内面へう磨き。	やや粗 ~2mmの砂粒含	黄	黄褐色 灰褐色	口縁1/3 高台完全	
399	B 337	土師器	-	7.4	-	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き、内面へう磨き。	やや粗 ~3mmの砂粒含	黄	黄褐色 灰褐色	高台2/3	
120-01	B 337	土師器	-	7.4	-	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き、内面へう磨き。	やや粗 ~2.5mmの砂粒含	黄	黄褐色 灰褐色	高台完全	
400	A 129	黒色土器	(16.6)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面ナデ後へう磨き、内面ナデ。	密	黄	黄褐色 灰褐色	口縁1/2	S D 4 かわ
122-03	A 129	黒色土器	(18.3)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面ナデ。	密	黄	黄褐色 灰褐色	口縁1/2	
401	A 129	黒色土器	-	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き、内面へう磨き後ナデ。	やや粗 ~1.5mmの砂粒含	黄	黄褐色 灰褐色	口縁7cmの破片	
402	A 129	黒色土器	(15.7)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き。	密	黄	灰白	口縁1/6	
122-04	A 129	黒色土器	(15.7)	-	-	口縁部コクロナガ。体部外面へう磨き。	密	黄	灰白	口縁1/6	
403	A 000	黒色土器	(16.9)	(8.0)	4.4	コクロナガ、底部外面コクロナガ。	やや密	黄	灰白	高台1/5	
122-04	A 000	黒色土器	(16.9)	(8.0)	4.4	コクロナガ、底部外面コクロナガ。	やや密	黄	灰白	高台1/5	
123-01	A 000	黒色土器	(6.5)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り、内面に黄褐色。	密 ~1.8mmの砂粒含	黄	灰白	高台1/5	転用破
404	A 129	黒色土器	(7.0)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り、内面に黄褐色。	密 ~1.8mmの砂粒含	黄	灰白	高台1/5	
122-02	A 129	黒色土器	(7.3)	-	-	コクロナガ、底部外面コクロナガ削り後ナデ。体部内外面に施施。	やや粗	黄	に灰褐色 灰白	高台1/3	
403	A 000	黒色土器	(7.2)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り、体部内外面に施施。	密 ~1.5mmの砂粒含	黄	灰白	高台1/2	底部外面に黒褐色「為」か
122-04	A 000	黒色土器	(14.4)	(6.3)	4.0	コクロナガ。口縁部反輪溝け掛け。	密	黄	灰白	高台1/10	
405	A 000	黒色土器	(6.8)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り。	密 ~1.8mmの砂粒含	黄	灰白 黒灰	高台1/3	
123-04	A 000	黒色土器	(6.8)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り。	密 ~1.8mmの砂粒含	黄	灰白	高台1/4	
406	A 129	黒色土器	(9.4)	-	-	コクロナガ、底部外面コクロナガ削り。	密 ~1.8mmの砂粒含	黄	灰白	高台2/5	
124-08	B 339	土師器	(7.8)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り。	密	黄	灰白	高台1/4	
407	B 339	土師器	(9.2)	(4.0)	2.1	コクロナガ。反輪溝け掛け。	密	黄	灰白	口縁1/8	
124-08	B 339	土師器	(14.4)	(6.0)	3.1	コクロナガ、底部外面を切り。口縁部内面の反輪溝け掛け。	密	黄	灰白	高台1/3	
408	B 339	土師器	(15.0)	(7.4)	2.8	コクロナガ、底部内外面コクロナガ削り。口縁部内外面反輪溝け掛け。	密	黄	灰白	口縁1/4	S D 4 かわ
124-01	B 339	土師器	(14.5)	7.5	2.2	コクロナガ、底部外面コクロナガ削り。	密 ~1.8mmの小石	黄	灰白	口縁1/4 高台1/2	
409	A 004	灰輪陶器	-	7.0	-	コクロナガ。底部内面平滑。	密	黄	灰白	高台1/2	転用破
100-01	A 004	灰輪陶器	(5.5)	(6.2)	-	コクロナガ。体部外面に施施。頸部破断面を研磨。	密	黄	黄褐色	体部1/2	
410	A 004	灰輪陶器	(9.0)	-	-	コクロナガ。頸部に把手結合。	密	不具	灰白	口縁1/4 高台完全	S D 4 かわ
124-08	B 339	土師器	(9.8)	-	-	コクロナガ、底部外面を切り。	やや密	黄	灰白	高台1/6	S D 4 かわ
411	A 007	灰輪陶器	(15.0)	-	-	外面コクロナガ削り、内面コクロナガ。	やや密 ~3mmの砂粒少し	黄	灰白	底部1/4	
124-07	B 337	土師器	(14.2)	-	-	輪花あり。口縁部全面に施施。	密	黄	(輪) 10Y7.8 (輪)	口縁1/7	
412	A 008	灰輪陶器	-	7.0	-	コクロナガ、底部外面を切り、高台内面凹縁あり。全面に施施。底部外面は薄い。内外面ナデ。	密	黄	灰白 7.5Y6.4	高台1/10 東高台産	

第23表 遺物一覧表16 (包含層他3)

No.(報告) (探検)	出土位置	器種	計量値 (cm・g)		形状・調整技法の特色	胎土	器色	色調	残存度	備考
			口径	底径						
431	A 135b 表土	紅輪陶器	—	(9.0)	—	赤	良	№2.5GY 5.4	高台1/4	高台日Bc 1-2
432	A 128 表土	紅輪陶器	—	(7.4)	—	赤	良	№2.5G 5.4	高台1/3	高台日Bc 4 美濃・近江底
433	A 029 表土	紅輪陶器	(11.9)	—	—	赤	中や密	№1.0Y 6.8	口縁1/8	—
434	A N29 132-06	紅輪陶器	(11.2)	(7.2)	4.5	赤	良	№0.5Y 5.7	高台1/3	高台日Bc 4 美濃系産
435	A Q29 131-07	紅輪陶器	(10.8)	(5.9)	3.0	赤	良	№1.0Y 4.2	高台1/8	高台日Bc 2 尾張・美濃産
436	A Q29 131-04	紅輪陶器	—	(7.6)	—	赤	良	№1.0Y 6.5	高台1/3	高台日Bc 2 美濃産
437	A 029 表土	紅輪陶器	(11.3)	(6.6)	4.3	赤	良	№2.5GY 5.5	高台1/2	高台日Bc 3 尾張・美濃産
438	A P29 131-03	紅輪陶器	—	(7.8)	—	赤	良	№0.5Y 6.2	高台1/3	尾張・美濃産
439	A 127 129-02	紅輪陶器	(18.0)	8.8	7.2	赤	良	№1.0Y 5.5	高台1/2	高台日Bc 4 美濃産
440	A T30 131-01	紅輪陶器	—	—	—	赤	良	№1.0Y 5.2	口縁1/4	—
441	A 128 131-02	紅輪陶器	(11.7)	6.5	2.2	赤	良	№1.0Y 5.4	高台1/6	高台日Bc 5 尾張・美濃産
442	A N29 132-04	紅輪陶器	—	—	—	赤	良	№2.5Y 8.5	口縁1.5 cm	高台日Bc 3 尾張産
443	A H31 132-03	紅輪陶器	—	(6.5)	—	赤	良	№1.5Y 5.6	底面1/2	高台日Bc 2 尾張or美濃産
444	A N29 133-06	紅輪陶器	(7.6)	—	—	赤	良	№2.5GY 7.4	口縁1.5 cm	口縁1.5
445	A 028 129-03	紅輪陶器	—	—	—	赤	良	№2.5Y 4.5	2×2cm の小片	美濃産か
446	A N29 131-09	紅輪陶器	—	—	—	赤	良	№0.5Y 9.4	4×6cm の破片	—
447	A 030 129-04	紅輪陶器	—	—	—	赤	良	№2.5Y 8.10	底面1/6	—
448	A M25 151-01	紅輪陶器	—	(7.8)	—	赤	良	№1.0Y 6.8	口縁1/8	口縁1/8
449	B e40 136-04	無胎陶器	(16.0)	5.5	5.3	赤	中や密	№8 の石・砂粒	灰白	高台1/6
450	A e40 136-02	無胎陶器	(17.1)	9.4	4.2	赤	中や密	№1 の砂粒多い	灰白	高台1/2
451	B 139 137-04	無胎陶器	(17.5)	8.8	5.3	赤	中や密	№2 の砂粒多い	灰白	高台1/2
452	B e41 136-01	無胎陶器	(16.2)	(8.0)	5.4	赤	中や密	№1.5 の砂粒多い	灰白	高台1/3
453	B e40 137-05	無胎陶器	(17.5)	8.8	5.4	赤	中や密	№2 の砂粒多い	灰白	高台1/2
454	B e39 137-03	無胎陶器	—	12.0	—	赤	中や密	№3 の砂粒	灰白	高台1/3
455	B e38 134-03	無胎陶器	(10.4)	5.3	3.3	赤	密	無	灰白	高台1/2
456	B e40 134-02	無胎陶器	(10.0)	4.5	3.2	赤	中や密	無	灰白	高台1/6
457	B Y40 134-05	無胎陶器	(10.5)	4.0	3.7	赤	中や密	無	灰白	高台1/2
458	B Y40 134-01	無胎陶器	10.0	5.0	2.7	赤	密	無	灰白	口縁3/4
459	B Y38 135-08	無胎陶器	(8.7)	(4.2)	2.6	赤	密	無	灰	口縁1/4
460	B Y38 135-07	無胎陶器	(8.7)	(4.2)	2.6	赤	密	無	灰	口縁1/4
461	A S36 138-02	滑石形銅	(24.2)	—	—	赤	中や密	№3 の砂粒含	黒	口縁1/8
462	A 125 138-07	滑石形銅	—	—	—	赤	中や密	№3 の砂粒含	黒	口縁7cm
463	A Q31 138-01	滑石形銅	(21.8)	—	—	赤	中や密	№2 の砂粒含	黒	口縁9cm
464	A Q28 138-06	滑石形銅	—	—	—	赤	中や密	№3 の砂粒含	黒	口縁9cm
465	B h39 138-03	滑石形銅	(17.2)	(19.0)	(5.3)	赤	中や密	№3 の石・砂粒	黒	底面6cm
466	B h39 138-04	滑石形銅	—	—	—	赤	中や密	№3 の砂粒含	黒	口縁7cm
467	A 131 140-02	陶器	—	4.5	—	赤	中や密	№2.5 の砂粒含	灰白	高台1.2
468	A 026 139-02	白磁	(13.6)	—	—	赤	良	無	灰白	口縁1.8
469	B e41 139-03	白磁	(17.0)	—	—	赤	良	無	灰白	口縁3.5cm
470	A e39 139-01	白磁	—	(5.9)	—	赤	密	無	灰白	高台1.2

第24表 遺物一覧表17 (包含層他4)

No(報告) (登録)	出土位置	器種	計測値 (cm・mm)			整形・調整技法の特徴	胎土	顔色	色調	残存度	備考
			口径	底径	器高						
471 139-04	A M50 表土	白磁 土	-	(7.8)	-	削り出し高台。底面外面以外無飾。	青	黒	灰白	高台1/8	
472 140-03	A M56 表土	平瓦			厚 1.8	凹面へう形・布目肌。凸面無目。溝面へう形。	やや青 1.5 mmの砂粒	黒	灰白	7×6cm の小片	
473 140-03	A R24 灰燼層	石製品	長 2.0 重11.5	幅 1.5	厚 0.5	一側面に沈線あり。	-	-	-	完形	蓋入
474 101-05	A R24 灰燼層	銅製品	長 4.6	幅 1.6	厚 0.1	板状品を折り曲げる。全体はU字形か。	-	-	-	1/2 ?	蓋入
475 141-01	A b40 200層	石製品	高 17.0)	幅 2.3	厚 0.1	穴輪縁 20.1	砂芯。組み合わせ式五輪等の空風穴輪縁。空輪部 欠陥。穴輪下部に陥欠あり。	-	-	-	空輪以外 ほぼ完存
476 143-05	A C00 表土	土製品 土鉢	長 6.0 重32.0	幅 2.3	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰白	完形	
477 142-10	A P25 表土	土製品 土鉢	長 5.2 重17.5	幅 2.2	乳 0.7	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰黄	一部欠	
478 142-07	A N28 表土	土製品 土鉢	長 4.6 重24.4	幅 2.3	乳 0.5	ナデ。	青	黒	黒	完形	
479 142-01	A R24 表土	土製品 土鉢	長 5.4 重25.5	幅 2.2	乳 0.6	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰白・黄 緑	完形	
480 144-04	A Q26 表土	土製品 土鉢	長 5.7 重13.0	幅 1.7	乳 0.5	ナデ。	やや青	黒	黄緑	完形	
481 142-05	A N25 表土	土製品 土鉢	長 5.2 重24.0	幅 2.0	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰白・黄 緑	完形	
482 144-01	A S39 表土	土製品 土鉢	長 5.0 重19.6	幅 2.2	乳 0.6	ナデ。	やや青	黒	灰	完形	
483 143-02	A S31 表土	土製品 土鉢	長 4.9 重18.2	幅 2.0	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	黒	完形	
484 144-08	B c38 表土	土製品 土鉢	長 5.1 重12.3	幅 1.6	乳 0.4	ナデ。	やや青	黒	灰	完形	
485 144-09	A P27 表土	土製品 土鉢	長 5.0 重12.1	幅 1.6	乳 0.6	ナデ。	やや青	黒	黒黄	完形	
486 145-10	A M26 表土	土製品 土鉢	長 5.2 重19.7	幅 2.0	乳 0.8	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	黒	完形	
487 144-11	A Q29 表土	土製品 土鉢	長 5.3 重14.9	幅 1.8	乳 0.5	ナデ。	やや青	黒	灰白・黄 緑	完形	
488 144-07	A C00 表土	土製品 土鉢	長 5.3 重19.7	幅 2.1	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの小石含	黒	黄緑	完形	
489 143-09	A N28 表土	土製品 土鉢	長 5.1 重16.7	幅 2.0	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰	完形	
490 144-11	A Q31 表土	土製品 土鉢	長 4.9 重16.4	幅 1.9	乳 0.5	ナデ。	青	黄緑	黄緑	完形	
491 143-08	A P32 表土	土製品 土鉢	長 5.3 重11.9	幅 1.7	乳 0.5	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒多い	黒	黄緑 灰黄	一部欠	
492 142-12	A L25 表土	土製品 土鉢	長 4.6 重22.1	幅 2.3	乳 0.4	ナデ。	青	黒	灰白	完形	
493 143-04	A L25 表土	土製品 土鉢	長 4.3 重12.8	幅 1.9	乳 0.4	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	黒	完形	
494 143-06	A M26 表土	土製品 土鉢	長 4.6 重12.2	幅 1.8	乳 0.5	ナデ。	青	黒	明黄緑 黒黄	完形	
495 142-08	A R24 表土	土製品 土鉢	長 4.3 重14.8	幅 2.3	乳 0.4	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	灰白・灰 黄緑	完形	
496 142-09	A R26 表土	土製品 土鉢	長 4.4 重13.7	幅 1.9	乳 0.6	ナデ。	青 1 mmの砂粒少し	黒	黄緑	一部欠	
497 143-12	A L26 表土	土製品 土鉢	長 4.6 重13.3	幅 1.8	乳 0.7	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	黒	ほぼ完形	
498 143-03	B b40 200層	土製品 土鉢	長 4.5 重11.7	幅 1.8	乳 0.5	ナデ。	青	黒	灰白	完形	
499 143-06	A N28 表土	土製品 土鉢	長 4.4 重15.3	幅 2.0	乳 0.5	ナデ。	青	黒	灰白	完形	
500 142-04	A N27 表土	土製品 土鉢	長 4.3 重12.8	幅 1.9	乳 0.4	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒少し	黒	黒	ほぼ完形	
501 144-10	A M22 表土	土製品 土鉢	長 4.2 重 8.6	幅 1.6	乳 0.5	ナデ。	やや青	黒	灰白	完形	
502 144-12	A M28 表土	土製品 土鉢	長 4.1 重 9.3	幅 1.6	乳 0.4	ナデ。	やや青	黒	明黄緑 黄緑	完形	
503 145-09	A P29 表土	土製品 土鉢	長 4.9 重 4.9	幅 1.3	乳 0.3	ナデ。	やや青	黒	灰白・黄 緑	完形	
504 145-08	A P29 表土	土製品 土鉢	長 3.9 重 5.1	幅 1.3	乳 0.3	ナデ。	やや青	黒	灰白 黄緑	完形	
505 144-02	A P29 表土	土製品 土鉢	長 4.6 重19.0	幅 2.2	乳 0.9	ナデ。	やや青	黒	黄緑	完形	
506 142-11	A L26 表土	土製品 土鉢	長 4.5 重19.9	幅 2.3	乳 0.9	ナデ。	やや青 1 mmの砂粒多い	黒	黒	完形	
507 144-03	A Q28 表土	土製品 土鉢	長 4.4 重 5.3	幅 2.1	乳 0.7	ナデ。	やや青	黒	灰白・黄 緑	完形	
508 143-07	A N29 表土	土製品 土鉢	長 3.9 重11.9	幅 1.7	乳 0.5	ナデ。	やや青	黒	黒	完形	
509 142-02	A N25 表土	土製品 土鉢	長 5.7 重20.5	幅 1.8	乳 0.7	ナデ。	やや青	黒	灰白・黄 緑	一部欠	
510 145-02	B a30 200層	土製品 土鉢	長 6.3 重 6.5	幅 1.2	乳 0.3	ナデ。	やや青	黒	黄緑 黒	完形	

第25表 遺物一覽表18 (包含層他5)

No(層位) (層位)	出土位置	器種	計測値 (cm)			整形・調整技法の特徴	胎土	色調	残存性	備考	
			口径	底径	器高						
511 145-04	A M8 表土	土製 土罐	長 4.8 底 9.3	幅 1.5	孔 0.3	ナデ。	やや密	並	焼	完形	
512 145-03	A K27 表土	土製 土罐	長 7.3 底 7.3	幅 1.4	孔 0.4	ナデ。	やや密	並	灰白 灰	完形	
513 145-06	A M5 表土	土製 土罐	長 4.5 底 6.2	幅 1.2	孔 0.4	ナデ。	やや密	並	焼灰	完形	
514 145-05	A S31 表土	土製 土罐	長 4.3 底 5.6	幅 1.2	孔 0.3	ナデ。	やや密	並	にぶい焼	完形	
515 145-10	A 礫土	土製 土罐	長 4.5 底 2.5	幅 1.0	孔 0.3	ナデ。	やや密	並	戎黄焼	完形	
516 145-01	A P29 表土	土製 土罐	長 4.0 底 5.8	幅 1.2	孔 0.4	ナデ。	やや密	並	灰焼	完形	
517 145-11	B 30 25cm	土製 土罐	長 5.6 底 5.6	幅 1.3	孔 0.1	ナデ。	やや密	並	灰黄焼	部分欠	
518 145-07	A O0 表土	土製 土罐	長 4.0 底 5.9	幅 1.2	孔 0.3	ナデ。	やや密	並	灰白 にぶい焼	完形	
519 142-02	A L25 表土	土製 土罐	長 3.4 底 5.6	幅 1.3	孔 0.5	ナデ。	やや密	並	灰黄焼	完形	
520 145-12	A M2 表土	土製 土罐	長 2.4 底 1.8	幅 0.9	孔 0.3	ナデ。	やや密	並	にぶい焼	完形	
521 146-02	C M12 3層	土製 土罐	8.3	—	1.6	口縁部コフナデ。底部外面オサエ・ナデ、内面ナデ。	粗	～ 1.5mm の砂粒含	灰白	口縁2/3	
522 147-05	C M5 3層	土製 土罐	(9.0)	—	1.6	口縁部コフナデ。底部内外面ナデ・オサエ。	やや密	並	灰黄	口縁1/3	
523 147-06	C P12 3層	土製 土罐	(8.6)	—	2.3	口縁部コフナデ。底部内外面ナデ・オサエ。	やや密	並	黄灰	口縁1/3	
524 146-01	C I15 2層	土製 土罐	(8.8)	5.4	1.7	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	やや密	～ 2 mmの砂粒含	灰黄 にぶい焼	口縁1/3 底部1/3	口縁成形
525 149-05	C S20 2層	黒色土器	—	(6.0)	—	ナデ、コフナデ。底部内面に平行積文。	粗	黄砂粒含	黄灰 灰白	高台1/4	
526 147-02	C S11 3層	土製 土罐	(10.6)	—	—	口縁部コフナデ。胴部外面ハケ。	やや密	～ 6 mmの石・砂粒含	灰黄	口縁1/2	煤片着
527 147-03	C N15 3層	土製 土罐	(10.6)	—	—	口縁部コフナデ。胴部外面タテハケ、内面ヘラ削り。	やや密	にぶい焼	灰黄 焼	口縁1/5	煤片着
528 147-01	C S11 3層	土製 土罐	(16.8)	—	—	口縁部コフナデ。胴部外面タテハケ、内面コフナデ。	やや粗	並	灰黄	口縁1/6	
529 133-02	C P21 3層	緑釉陶器	(11.8)	(6.5)	4.0	口縁削り、ヘラ磨き。底部外面未切り。全面施釉。底部外面に薄い。トナ模あり。	粗	黄緑・SGY 5.6	高台1/4	高台1/4 尾葉・尖蓋着	
530 129-05	C T15 3層	無釉陶器	—	—	—	ナデ。把手煎茶煎合部分。	粗	黄 B/D	3×3cm の小片		
531 148-02	C L17 2層	無釉陶器	—	(5.7)	—	口縁部コフナデ。	やや密	黄砂粒含	灰白	高台2/5	
532 146-07	C M21 2層	無釉陶器	—	(6.3)	—	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	粗	黄砂粒含	灰白	高台1/3	
533 147-04	C N15 2層	無釉陶器	—	(8.0)	—	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	粗	灰白	灰白	高台1/3	黒黒・転用焼
534 149-01	C M19 2層	無釉陶器	—	10.0	—	胴部・内面口縁部コフナデ。底部外面口縁削り。	密	～ 1.5mm の砂粒少し含	灰白	高台1/2	
535 148-03	C K12 2層	無釉陶器	(9.4)	6.3	2.0	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	密	～ 4mm の砂粒含	灰白	口縁2/3 底部1/3	自然焼付着
536 148-01	C N16 2層	無釉陶器	(8.0)	5.7	1.9	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ、外面未切り。	やや粗	～ 3.5 mmの砂粒含	灰白	口縁2/3 底部1/3	
537 148-07	C L19 2層	無釉陶器	8.2	5.4	1.5	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ。底部外面未切り。	粗	～ 1.5mm の砂粒含	灰白	ほぼ完形	
538 148-06	C S20 2層	無釉陶器	(8.5)	5.4	1.5	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ。外面未切り。	やや粗	～ 1.5mm の砂粒含	灰白	口縁1/2 口縁1/2	口縁に自然焼
539 148-05	C T18 2層	無釉陶器	(8.0)	5.1	1.9	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ。外面未切り。	粗	～ 1.5mm の砂粒含	灰白	口縁1/2 底部1/4	
540 149-04	C I18 2層	無釉陶器	8.6	3.5	1.7	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ。外面未切り。	やや密	～ 1 mmの砂粒含	灰白	口縁2/3 底部1/3	底部外面に「三」の墨書
541 149-03	C N11 2層	無釉陶器	—	(5.9)	—	口縁部コフナデ。底部内面一方向ナデ。外面未切り。	やや粗	～ 1 mmの砂粒含	灰白	底部1/4	底部外面に「〇」の墨書
542 150-03	C O15 2層	無釉陶器	16.0	7.4	5.4	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	やや密	～ 2 mmの砂粒含	灰白	口縁1/2 高台1/2	口縁部に自然焼
543 150-02	C Q13 2層	無釉陶器	15.7	(6.3)	5.1	口縁部コフナデ。	やや粗	並	灰白	高台1/5	
544 146-05	C Q17 2層	無釉陶器	14.9	—	—	口縁部コフナデ。	密	～ 2.5mm の砂粒少し含	灰白	口縁1/4	
545 150-01	C N14 2層	無釉陶器	—	7.9	—	口縁部コフナデ。底部外面未切り。	やや密	～ 2.5 mmの砂粒含	灰白	高台1/2 転用焼	内面に墨痕。 転用焼
546 148-04	C 2層 2層	無釉陶器	(13.2)	(5.2)	5.8	口縁部コフナデ。高台に煎茶煎。	粗	～ 2mm の砂粒含	灰白	高台1/4	
547 149-02	C R12 2層	無釉陶器	—	7.5	—	口縁部コフナデ。底部外面未切り。高台に煎茶煎。	粗	並	灰白	高台1/2	底部外面に「×」の墨書
548 148-08	C 2層 2層	土製 土罐	長 6.2 底 26.4	幅 1.4	孔 0.4	ナデ。	やや密	～ 1 mmの砂粒含	並	灰白 黄灰	
549 150-04	C O18 3層	石製 石罐	長 3.4 底 2.6	幅 1.3	孔 0.8	サヌカイト。凸縁有基形。	—	—	—	完形	
550 149-06	C S15 2層	銅製品 鉄貨	径 2.2	孔 0.6	—	秤秤遺品。製期1,000年	—	—	—	完形	

IX 考 察

今回の調査では、弥生時代から平安時代の様々な遺構・遺物が確認された。以下に、特徴的な遺構・遺物について考察を加えていきたい。

1 方形周溝墓群の構成と形態

方形周溝墓は10基検出された。これらは調査区の南部に集中していて、さらに南及び西に広がるものと考えられる。微地形的にみて、調査区は旧安濃川の形成した自然堤防縁辺から後背湿地に相当し、方形周溝墓はその自然堤防上を選択して築造されている。時期は、出土遺物から欠山式中段階から新段階の範疇に収まり、比較的短期間に集中して築造されている。

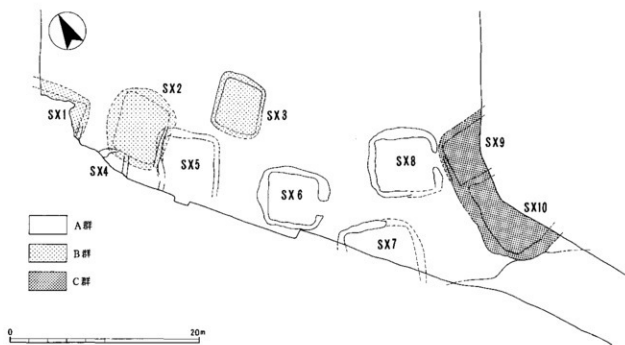
群構成 方形周溝墓は、その主軸方位から大きく3つのグループに分けることができる。A群には南北軸が東に45°前後振るSX1～3、B群には南北軸が東に30°前後振るSX4～8、C群にはその主軸がほぼ正方位に向くSX9・10が相当する。

B群は各2～4mの間隔を保って築造されている。

A群は一部でB群と周溝が切り合うが、墳丘部まで及ぶことはない。さらに、C群はSX9がB群のSX8の墓道を塞ぐ位置関係となり、同時存在の可能性は低い。また、SX10は河道SD1の埋土を切っている。これらのことから方形周溝墓群はB群が先行し、その後A群・C群がその間隙を埋めるように築造されていったと考えられる。

当初は余裕をもって築造されていたが、その後の築造主体数の増加に伴い、その間隙を縫うように一部は埋没した河道上にまで進出して築造している。墓域は、地形的に限定されていたことが窺われる。

墓域と集落 今回検出された方形周溝墓の築造主体となった集落域は検出されていないが、当該期にその機能を停止した河道に大量に投棄された同時期の土器群や、その埋土上に建てられた1時期新しい元屋敷式期の竪穴住居に伴うと考えられる伊跡などの存在から、集落域は当調査区の東方の自然堤防上と推定したい。集落近傍の高所にある自然堤防上は墓域として適地であったと考えられる。



第64図 方形周溝墓分布図 (1:400)

形態 方形周溝墓の平面形は、東辺の中央に陸橋部をもつSX6・8以外は明確でないが、SX3・5のように少なくとも同じ東辺に陸橋部をもたないものも確実に存在し、周溝が全周するものか隅部に陸橋部をもつものが多いと思われる。SX6・8は山田分類⁴⁴の「中央陸橋型」に相当し、SX8の陸橋部付近の周溝端部は丸いが、SX6では直線となり周溝も外側に拡張傾向にある。SX8は墓道としての陸橋部がさらに明確なものになっている。

また、墳丘部はSX3・6・8のように北西隅部がやや突出する点が共通する。

開口方向 SX6・8はいずれも東側に開口し、第一義的には集落側に延びるであろう墓道との関係を表しているように見える。しかし、県内で検出された「中央陸橋型」方形周溝墓の開口方向(第64図)は、南東方向と西方向に集中する。西方向に開口するものは、大谷遺跡⁴⁵・殿村遺跡⁴⁶・鎌切遺跡⁴⁷・草山遺跡⁴⁸にあり、南東方向に開口するものには、下之庄東方遺跡⁴⁹・上ノ垣内遺跡⁵⁰・寺垣内遺跡⁵¹・瀬干遺跡⁵²・草山遺跡⁵³・宮山遺跡⁵⁴にある。丘陵上に立地する遺跡に西方向に開口するものが多く、低地あるいは低位段丘上に立地する遺跡に南東方向に開口する例が多い傾向がある。しかし、下之庄東方遺跡や草山遺跡は両者が混在し、単純には言い切れない。ところが西と南東はほぼ対向の方位にあり、墳丘の主軸は近似したものとなる。したがって、墳丘の主

軸に何らかの規制が働いていた可能性は高い。

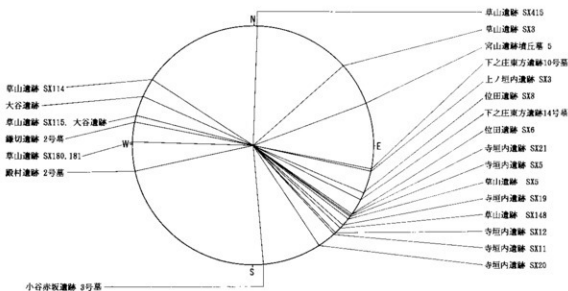
埋葬主体は、宮山遺跡と殿村遺跡で検出され、宮山遺跡墳丘墓5は南北方向、殿村遺跡2号墳は東西方向である。埋葬主体は、検出例も少なく、開口方向との関連は現在のところ不明と言わざるを得ない。

集落との関係を考えてみると、「中央陸橋型」方形周溝墓の南東方向は、宮山遺跡では段丘崖が迫り、下ノ庄東方遺跡は川岸となり、集落域は想定できない。また、同時期の集落の検出されている草山遺跡の場合、開口方向は集落とは無関係に墓道が設定されている。

以上のことから、開口方向は埋葬主体や集落との関連は希薄であるが、何らかの規制があったことがわかる。開口方向の2方向性を重視するならば、逆に北・南が特に選択されなかったことが重要と思われる。例えばこの方向が忌むような方向であった可能性もある。葬送儀礼に関し、何らかの宗教的な真因を考える必要があるかもしれない。

2 朱付着の擦石・石皿と祭祀

SX6南周溝から出土した朱付着の擦石と石皿は、約4m離れていたものの、個々の朱の付着状況からそのセット関係は明白である。石皿は周溝底近くから正位の状態出土しており、墳丘上からの転落とも考えられるが、意図的に周溝内に供献もしくは投棄⁵⁵されたと解したい。これらは何らかの葬送儀礼



第65図 県内方形周溝墓開口方向図

に関わった遺物であることは間違いないであろうが、周溝内・墳丘周囲からも朱彩された土器は確認されず、具体的な内容は分からない。

擦石は自然石、石皿は粗割の状態であり、古墳時代前期以降の定形化した石臼・石杵とは異なる。しかし、用途は全く同じのものであり、以下、名称は異なるが、同一のものとして扱う。

朱は分析の結果、水銀朱であることが判明した。県内には、中央構造線沿いに大和水銀鉱床²⁶がある。縄文時代では、朱生産に関わる遺跡が確認されており、朱を媒介した交易が想定されている²⁷。しかし、弥生時代以降は明確でなく、特に弥生時代後期から古墳時代前期には朱彩土器の出土例は多数あるが、その生産や流通に関しては不明な点が多い。わずかに松阪市阿形遺跡で、朱擦り用の可能性のある石皿が出土している²⁸のみである。墳墓では、三雲町前田町屋遺跡で朱の付着した石杵が周溝から出土している²⁹。

前期古墳から出土した石杵・石臼に関しては、北条芳隆氏の論考³⁰が詳しい。氏によれば、前代の弥生時代後期後半の墳丘墓³¹には、石杵のみが副葬あるいは埋置される。そして古墳時代初期³²（廻間Ⅲ式前半、庄内末～布留0式）に、まず丁寧な加工の施されない石臼が出現し、やや遅れて定形化した石臼が登場するとされている。石臼の出現は、擦り潰す行為自体が葬送儀礼の一環として整備される動きと理解されている。

しかし、本報告例のように欠山式中段階（廻間Ⅱ式前後か・縛向Ⅱ式併行）には既に、擦り潰す行為が葬送儀礼の一環として確立していた可能性がある。しかし、その出土位置は、弥生墳丘墓・古墳では副葬あるいは埋葬主体直上に配置され、本報告例と異なる。これは、定型化した祭祀の確立される以前の流動的な形態を示しているのかもしれない。

3 道路遺構の性格

A地区で検出された道路遺構SR1・2は、未検出部分もあるが、幅員2丈の幹線と幅員1丈の枝路が丁字路になると考えられる。切合い関係から古墳時代後期以降、平安時代中期以前で、出土遺物からも奈良時代後半にその機能停止時期に近い1点を求

めることができる。

この道路遺構の性格については、近江俊秀氏の分類³³に従えば、SR1は幅員6mの規模・側溝を有する点から「I—A」類に相当し、公的な道路の可能性が高いとされている。しかし、その平面形をみると路線は必ずしも直線ではなく緩やかに蛇行し、一部で掘り直しの補修が認められる。道路は調査区の南側を東流する安濃川左岸の自然堤防上を通過している。この時期でこれだけの幅員を有する道路は公的性格が強くと考えられるが、その前史となったものには旧来の自然発生的な道があり、それが整備され公的な性格が付与されたものと考えたい。

その具体像として、駅路が考えられるが、「江家次第」弥生第³⁴や「権記」³⁵などの文献から、少なくとも11世紀まで存続することが確認されている。したがってSR1は、駅路とは考えられない。上記のように、旧来の地方幹道が整備改修されて公的な性格を有するようになったとすれば、「伝路」がその候補となろう。

伝路とは「郡家間の道路」³⁶であり、伊勢国では「伊勢国計会帳」³⁷からは国内を2分して官符を転送するシステムが存在していたことが知られている。伝路の指向するものは郡衙や駅路とされ、安濃郡衙は安濃町浄土寺付近³⁸の可能性が指摘されているが明確でない。また、駅路は足利建亮氏³⁹や岡田登氏⁴⁰によれば安濃川沿いに南下し、津市西部を通過するとされているが、遺構は検出されていない。SR1の先は明らかにできないが、西延長は駅路を指向し、その東側は安濃川沿いに東に向かい、海岸沿いのルートを通って鈴鹿郡山が有力視されている菟宮郡衙⁴¹に至るものと考えたい。

4 安濃郡の駅路の想定

位田遺跡で検出された道路遺構に関連して、次に安濃郡内の官道について考えてみたい。安濃郡内には、東海道の鈴鹿駅（現鈴鹿郡関町）から分岐し、菟宮・伊勢神宮・志摩国府を指向する駅路・伊勢路が知られている。しかし、その路線は一部発掘調査や論考が発表されているが、確定されていない。

平安時代駅路 松山遺跡は安芸郡芸濃町、安濃川上流域左岸の段丘上に位置する遺跡で、昭和62年の

発掘調査で道路遺構が検出されている⁹³。道路遺構はA・E・G地区で断続的に検出され、約330mに渡って直線道であることが確認されている（第66図

A—B）。道路遺構は両側溝が検出されたのみで、路床施設は確認されていない。側溝の心々距離は4.3～4.7mで、ほぼ一定している。側溝からの出土遺物は、平安時代末期の山茶碗・土師器が少量ある。また、掘立柱建物との関係から平安時代末期に道路遺構の機能時期の下限を求めることができる。

発掘担当者の久志本鉄也氏は、その存続時期と計画的直線性から「官道の可能性を否定できない」とし、慎重な言い回しながらも駅路と考えている。一方、木下良氏は下流の同じ左岸に郡名と同一の「安濃」の地名が残ることから、郡家間を結ぶ伝路と考えている⁹⁴。

この道路遺構の開削時期は、明らかにされていないが、側溝から0.9m離れて並ぶ平安時代初期の竪穴住居が検出されている。久志本氏は、道路開削直後の建設または近接具合から道路遺構の開削直前に廃棄されたという2つの可能性を考えているが、周堤などの存在からもこの竪穴住居が道路遺構と同時に存在していたとは考えにくく、さらに道路遺構の廃絶時期からしても竪穴住居が後出するとは思われない。したがって竪穴住居廃絶後に道路遺構が開削されたものと推定できる。

県内で駅路として確認された道路遺構は、明和町斎宮跡で検出されている奈良古道と呼ばれている道路遺構のみある。側溝の心々距離はやや幅があるが、9m前後の部分が多い。最近の研究では、駅路は9世紀段階に路線が変化し幅員も縮小されることが明らかになっている⁹⁵。松山遺跡で検出された道路遺構も9世紀代の全国的な官道の再編成によって開削された駅路である可能性が高い。

ところで、松山遺跡以南の駅路のルートに関しては、明らかにできない。ただ後の史料ではあるが、「吾妻鏡」の文治三年(1187)四月二十九日の条⁹⁶に、公卿勅使駅家雑事 伊勢国地頭領御家人等、

一、勤仕床 萩野庄 一方次官一方中村藏人とあり、萩野庄は松山遺跡のすぐ東にある萩野と考えられ、当時の公卿勅使の通る官道に近かったことが分かる。また、「小朝熊神社鏡沙汰文」⁹⁷には、

寛喜二年(1230)に内宮と小朝熊神社の神官が参洛する際に安濃郡曾根村に宿泊した記事が見える。曾根村は現在の安濃町曾根と考えられる。曾根付近は自然堤防の発達が顕著で、安定した土地条件である。

これらは、平安時代末期あるいは鎌倉時代初期の史料であり、先の駅路はすでに廃路となっていると思われる。しかし、これに替わる駅路あるいは地域の幹道のようなものが、萩野・曾根付近を通過していたと考えられる。したがって、松山遺跡で検出された平安時代初期以降の駅路の存在と合わせて考えれば、平安時代を通じて地形的に安定した安濃川左岸を駅路が通過していた可能性は高い。

奈良時代駅路 ところで駅路に関して、足利健亮氏や阿田登氏は安濃川右岸を通過し、津市野田から谷越え、または半田丘陵沿いを東進して一志郡に至るものと考えている。安濃町今徳には「立石」の小字が残り、木下良氏の指摘するように官道の存在を暗示する。松山遺跡の道路遺構を平安時代の駅路とするならば、奈良時代の駅路は安濃川右岸を通過した可能性が考えられる。

また、安濃町戸島には、第66図 C—Dに示したように断続的な直線痕跡が存在し、この北延長は芸濃町北神山の西から延びる丘陵先端を指向している。駅路が、地形的に目標になりやすいものを基準に設定されている例が多いことから、これが奈良時代駅路の痕跡の可能性もある。

ところで、これ以南のルートは明確にできない。これは、安濃川の氾濫によりその痕跡が、消滅したものと考えられている。当地域では平安時代末期、広範に条里地割りが施工されたと考えられるが⁹⁸、その地割りが見られない。このことから頻りに安濃川の氾濫が起きたことが分かり、それ以前でも地形条件から同様であったと考えられる。

安濃川右岸を通過するこのルートはこの流域の最短ルートであり、これは前期駅路のもつ「迅速性」⁹⁹に合致する。しかし、ここは前述のように氾濫原で洪水の多発する地点であり、駅路のもつもう一つの側面「安定性」に相反する。その補修・維持管理負担の多さも一つの要因となり、平安時代の官道の再編成に伴って安濃川左岸のルートに変更されたものと考えたい。

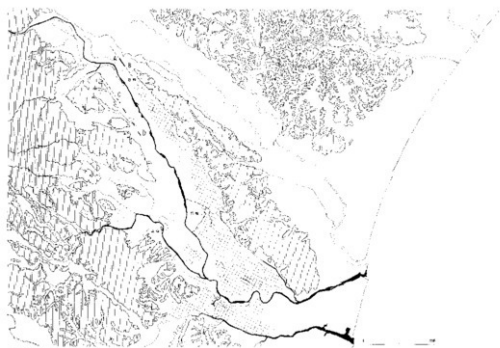


FIG. 2. CONTINUED - 11488.

5 屋敷地の変遷と性格

A地区で検出された平安時代中期～後期の屋敷地は、居住域と背後の空間地からなり、屋敷地はさらに南及び西に広がることは確実である。東端については調査区が狭く、後代の遺構の重複もあって判断としない。北側については隣接するC地区の調査から広がる可能性はほとんどない。少なくとも今回調査したA地区（約2,000㎡）に関しては、そのほとんど全てが広義の屋敷地内と考えられ、全体面積は推定の域を出ないが、単純に調査面積の倍としても4,000～5,000㎡の面積を有すると思われる。

(1) 建物群の変遷

掘立柱建物は、調査区の南部から西部の3箇所に集中し、棟方向の振れも数度の範囲内に収まる。さらに、それらを囲むように北から東にかけて区画溝が存在する。また、廃棄土坑はこれら区画溝の内側には、ほとんどみられず、その外側、特に北東部に集中する。このように屋敷地の占地・範囲概念が、ほぼ一定していたことが判り、時間的に連続した一系的な居住者像が浮かんでくる。

ここでは、掘立柱建物や区画溝の切合い関係（第26表）や方向性から屋敷地内の遺構を3時期に区分して記述する。

I期（第67図）

掘立柱建物は、その棟方向がE18°Sを採るSB4・7・9、柱列ではSA1・2、溝では、SD10が相当すると考えられる。SA1・2の建替えから2小期に細分できる可能性がある。

SB4は、その規模・時期が確定できないが、東側柱列とSB7西妻柱列とは45尺（13.5m）の間隔で平行する。SA1・2もSB4と同一方向を採り、SB4に伴うものと考えられる。SB7・9はほぼ

同一規格の建物で、柱筋を揃え計画的な配置が窺える。しかし、これらはその規模から主屋とは考えにくく、SB4が主屋に相当する可能性がある。

この時期の区画溝としては、同一方向を採るSD10が考えられるが、明確でない。むしろ前代の道路SR1・2が関与している可能性がある。つまりSA1・2はSR2と近接し、SR1より北側に建物は築かれることはない。これは、後代のSD6東部がSR1を踏襲していることから窺え、SR2が廃絶した後も境界あるいは小径などの区画性のあるものが存在し、屋敷地が形成されたと考えられる。これは次期の区画溝に先行すると考えられる土坑（SK3・9・10・11・18）の西端部のラインがSR2に約4mの間隔を置いて平行することからも想定が可能である。

II期の年代は、SK3がこの時期と考えられれば、出土遺物から折戸53号室式期、10世紀前半を中心とした時期と考えられる。

II期（第68図）

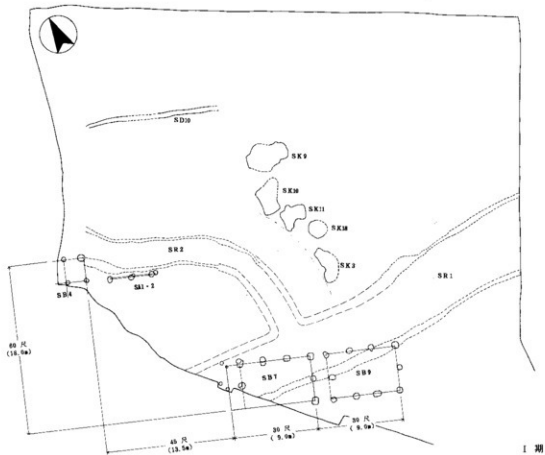
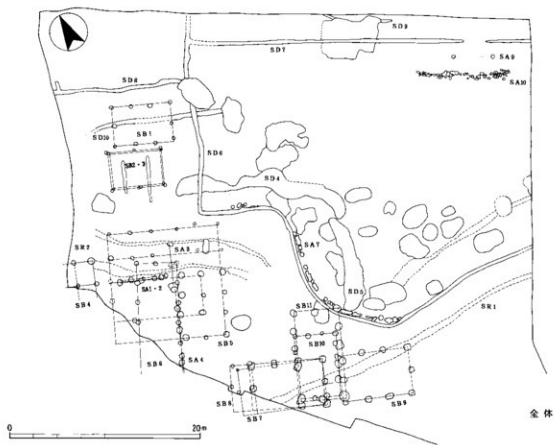
この時期に属する掘立柱建物には、SB1～3・5・8・10・11があり、その棟方向は全てN68°Wかそれに直交する。こちらは同一の座標軸をもつかのように建ち並び、各建物間隔の採り方にも幾通りかの想定が可能であり、ここでは一つの解釈として呈示した。溝にはSD4・5、土坑はSK3・4が確実に該当する。その他にも同時期と思われるものが多数あるが、出土遺物が少なく明確にできない。

SB5は、当該期の中では最大の規模を有する掘立柱建物である。三面南北面孫附きという建物の格からしても、この時期の中心的な建物であったことは確実である。この建物の東側にはほぼ同一場所で建替えたSB8・10・11がある。

第26表 遺構切合い関係表

I期		SB4	SA1	SB7	SB9	SD10		
			SA2	↓				
II期	SB2		SA3	SB8		SD4	SD5	
	↓		SA4	↓		↓		
	SB3			SB10				
	↓	SB1	SR3	SB5	↓			
	↓			SB11				
III期	↓	SB1		SB6		SD6	SD7	SD8
								SA7・9・10

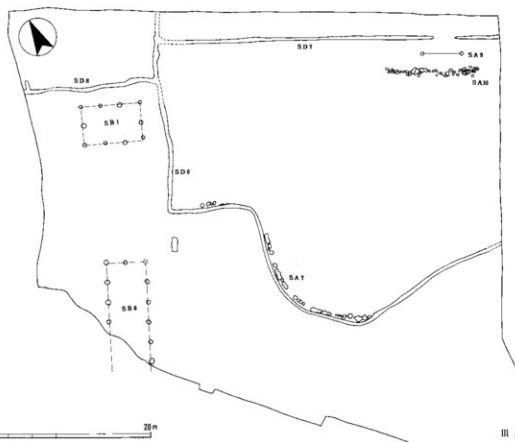
↓は切合い関係を表す。⋮は存続を表す



第67図 屋敷地内透横変遷図1 (1:400)



II 期



III 期

第68図 屋敷地内遺構変遷図2 (1:400)

SB8西庇柱列は、SB5の東側柱列と柱筋を揃えている。また、SA3・4はSB5との前後関係は不明であるが、SB8との相関係が深く、一応SB5に先行するものと考えた。

SB10は、SB8と直交する棟方向を採り、東から2間目の桁行柱筋はSB8の東側柱筋とほぼ一致することなどからも、時間的に連続する建物と考えられる。また、SB10の南側柱筋とSB5の南側柱筋とは25尺(7.5m)である。さらに、SB11はSB10の規模を拡張した建替えと考えられ、東側柱筋はSB5の東側柱筋と40尺(12.0m)離れている。

ところで、SB5の北方ではSB1～3が相当する。SB1とSB2・3は非常に近接しており、同時存在は考えにくい。したがってⅢ期の区画溝に規制あるいは準拠したSB1は、後出するものと思われる。また、SB3は柱抜き取り後に埋納した土師器皿から当該期と考えられる。いずれの建物も規模が小さく、特にSB3は簡易な倉庫風の建物と推定される。さらに、SR3の東西側溝は、SB5の西から2・3列目の梁行柱筋の北延長に相当し、通路の可能性が高い。

この時期の区画溝はSD4・5が相当する。SD4の途切れた西側にはSB2・3あるいはSR3が存在し、計画的な配置が窺われる。また、その直線的な内画線から、内側に低土塁の想定も可能である。

Ⅱ期は、SB5を中心として建物群が最も充実する時期といえ、いわゆる官衙風配置となる。つまり、東西棟の主屋SB5が「正殿」、その東側の南北棟SB10・11が「脇殿」、その北側の東西棟のSB1～3が「後殿」に擬したものと考えられる。区画施設は溝であるが、全体を囲繞するものではない。

Ⅱ期の時期は、掘立柱建物や区画溝SD4・5などの出土遺物から東山72号窯式期、10世紀後半を中心とする時期と考えられる。

Ⅲ期(第68図)

Ⅲ期の建物にはSB1・6、柱列・垣根状遺構のSA7～9、溝にはSD6～8がある。SB6は、出土遺物からは明確な時期比定はできないが、この時期の区画溝に近い棟方向から推定した。糸里方向に沿うSD6は、一連の区画溝の遺物や切合い関係から最も新しい時期と考えられることから

Ⅲ期と推定できる。ただし、SB6の建物規模はそれほど大きなものではなく、区画溝にも近いことから主屋は西方に存在し、主屋に付属する前代のSB10や11に相当する建物の可能性が高い。また、Ⅱ期の建物であるSB1は、区画溝SD6・8と適当な距離を保っていることから、Ⅲ期まで残存していたと考えられる。

SD6は、内画と外画を区切る区画溝と考えられ、その中央部の東側には垣根状遺構SA7が平行する。また、その東部は直線的に東方向に延び、前代の道路遺構SR1の方向を踏襲している。これは、境界の意識がこの時期まで存続していたことを物語る。また、SD7はその東部で一旦途切れ、その南側には垣根状遺構SA9と柱列SA10が平行して存在する。これらは同時存在していたかは不明であるが、この部分を出入口と考えれば、目隠しのような機能が想定される。

Ⅲ期の時期は、出土遺物が少なく判然としないが、Ⅱ期に続くことから、百代寺窯式期、11世紀前半を中心とするものと思われる。

(2)特殊遺物について

屋敷地内から出土した遺物には、土師器・黒色土器・灰軸陶器などの日常什器の他に、緑軸陶器・漆附着土器・朱附着土器・初期貿易磁器・宝珠硯・碁石などの特殊遺物も含まれている。

①緑軸陶器

緑軸陶器は破片数で270点あり、県内では明和町斎宮跡⁹⁾・津市六太B遺跡¹⁰⁾・上野市伊賀国府跡¹¹⁾に次ぐ出土量である。

出土分布は第69図のとおりで、A地区中央部から北部に集中し、B地区東部にも若干出土している。その中間のA地区南東部からB地区西部は、削平された部分が多く、本来の分布状況を表していない可能性がある。A地区では、やはり廃棄土坑群と区画溝周辺に多く、A地区南部から西部にかけての居住域では出土は少ない。居住域と廃棄土坑に代表される非居住域との区別が明確になされていたことが窺える。器種構成は、やはり椀・皿類が圧倒的に多く、90%以上を占める。しかし、瓶類4点・蓋1点・火舎1点・香炉(陰刻花文付きの蓋を含む)3点、花瓶

(台付碗?) 1点と量的には少ないが、特殊な器種が確認できる。

以下は、高台の遺存する破片を中心に、ご教示いただいたデータに基づいて記述する。

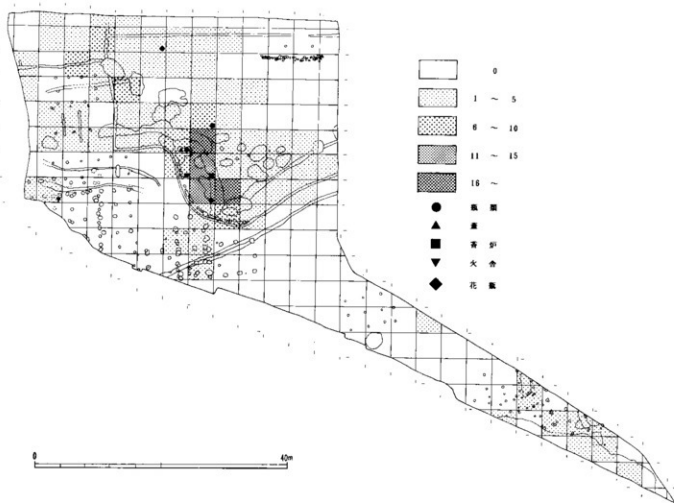
産地別で確認できたものでは美濃産が最も多く、他に産地の特定できないものも美濃産の可能性が多い。香炉蓋(44)・火舎(362)も美濃産と考えられる。近江産の可能性のあるものは少なく、

京都産は存在しない。猿投産は、香炉(178)・狭縁段皿(442)・蓋(443)の3点のみであるが、良品が多い。

時期別では、平安京日期中段階(黒笹90号窯式期)に併行するものは上記の猿投産の3点のみで、II期新段階からIII期古段階(折戸53号窯式期)に併行するものが49点中45点とその大半を占める。続くIII期古段階ないし中段階は1点(323)のみで、遺構の最も充実する東山72号窯式期はほとんど存在しない。

第27表 緑釉陶器器種・産地一覧表 (左は全破片数、右は観察データのあるもの)

器種	破片数	割合	産地	時期	猿投	美濃	美濃	美濃	東海系	陶	皿	蓋	香炉	火舎	合計
碗・皿	244	90.4%	日期中段階	3	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	3
狭縁	4	1.5%	日中新段階	—	5	16	1	—	3	19	5	—	—	1	25
蓋	1	0.4%	日中新段階又は日期古段階	—	6	1	—	2	3	10	1	—	1	—	12
香炉	3	1.0%	日期古段階	—	1	—	—	5	2	7	1	—	—	—	8
火舎	1	0.4%	前期古又は中段階	—	1	—	—	—	—	1	—	—	—	—	1
不明	17	6.3%	合計	3	13	17	1	7	8	37	8	1	2	1	49



第69図 緑釉陶器出土分布図 (1:600)

◎碁石

碁石は、SD4から24点とSK26から1点の合計25点が出土している。SD4からのものは、まとまって出土しており、有機質（木製あるいは布製など）の容器に入った状態で廃棄されたものと考えられる。これらの製作年代は明らかにできないが、廃棄時期は共存する灰軸陶器などから10世紀後半代と考えられる。

県内で碁石の出土した遺跡には、明和町斎宮跡と上野市伊賀国府跡がある。斎宮跡では第54次調査⁴⁴で井戸・ピットから濃紺色の黒石が2点、第44次調査⁴⁵でピットから水晶製の白石が1点出土している。また、78次調査では包含層から瓦質⁴⁶の碁石が出土している。また、伊賀国府跡⁴⁷では白石（石英）が1点政庁域から出土している。それは直径1.36cm、厚さ0.7cmでやや小ぶりである。このように県内では絶対数が少ないが、現在のところ官衙跡でしか出土していない。

次に、県外で平安時代以前に限った場合、管見の及ぶ範囲で出土例をみると、以下のように分類できる。

- ①象牙製品
- ②丁寧な加工を施した石製
- ③自然の円礫
- ④焼物

①は、正倉院に伝世しているもので、2組ある⁴⁸。1組は紅と紺に染められた象牙製で、花喰鳥が跳ね彫りされた超高級品である。②は、太宰府跡の井戸出土例⁴⁹が奈良時代で最古と考えられている。他には、平城京⁵⁰・平安京⁵¹・周防国府⁵²・兵庫県小犬丸山遺跡⁵³（布施駅家）・兵庫県相生遺跡・大阪府大里遺跡群に出土例がある。また、中国では、唐代の鳳翔県柏城廟尾唐墓⁵⁴から出土している。③は、藤原京右京三条三坊の宅地跡⁵⁵の柱穴出土例が最古と考えられるが、大きさはまちまちである。他には福島県国見山廃寺⁵⁶から出土している。また、中世以降では神奈川県今小路西遺跡・江戸城三の丸遺跡など、時代を問わなければ、時の中核部に近い場所では目に付く。しかし、まとまって出土しない限りは自然石との区別が困難である。④は、斎宮跡で1例確認している。

いずれにしても、平安時代以前の出土例は、官衙

あるいは寺院に集中し、碁石は極めて限られた階層の所有物と考えられる。

(3) 居住者像とその背景

前述のように、A地区で検出された屋敷地の全体面積は推定の域を出ないが、単純に調査面積の倍としても4,000～5,000㎡の面積を有すると思われる。これは、1段前後と考えられている一般農民層の家地⁵⁷とはかけ離れた規模である。また、遺物面からも、特殊器種を含む大量の緑軸陶器・碁石・漆付着土器・朱付着土器・初期貿易磁器・宝珠硯（転用硯も2点ある）・銅製品は、官衙あるいはそれに準ずる遺跡でしか出土しておらず、到底一般集落とは考えられない。

また、II期にみられる官衙風配置からも、この屋敷地は基本的に在地富豪層の居館と考えられ、何らかの公的な性格を有していたと推察できる。しかし、畿内で確認されている官衙風配置をもつ首長層の居宅は、10世紀前葉を境に消滅する⁵⁸のに対して、本遺跡例では10世紀前半代にその前史のないところに突如出現し、11世紀代まで確実に存続する。これは、広瀬氏が指摘した官衙風配置が律令国家を体系化したものとは時期的にも考えにくく、新たな勢力の存在を示唆する。

安濃郡の支配関係では、平安時代初頭には四天王寺領が多くみられるが、天禄四年（957）には、円融天皇が安濃郡を伊勢神宮に寄進し、名実ともに神郡となっている。また同時に警察・行政権といった雑務権等の諸権限も神宮に委譲され、支配が強化されたと考えられている⁵⁹。したがって神宮支配の面からみれば、御園・御厨といった神宮を支える下部組織の中心的な存在であった可能性がある。

また、調査区の南側に存在する安濃川の存在も無視できない。安濃川流域を南北に横断する一連の中勢道路の調査では、旧安濃川本流に相当するような規模の河道は検出されておらず、少なくとも安濃川中流域は現流とはほぼ同じ場所を流下してたと考えられる。また、多量に出土した土鍾も付近に河川の存在を暗示する。つまり、位田遺跡は安濃川の北岸に立地し、屋敷地は安濃川に南面していたと考えられる。水運・水利権といった面を意識した存在であったかもしれない。

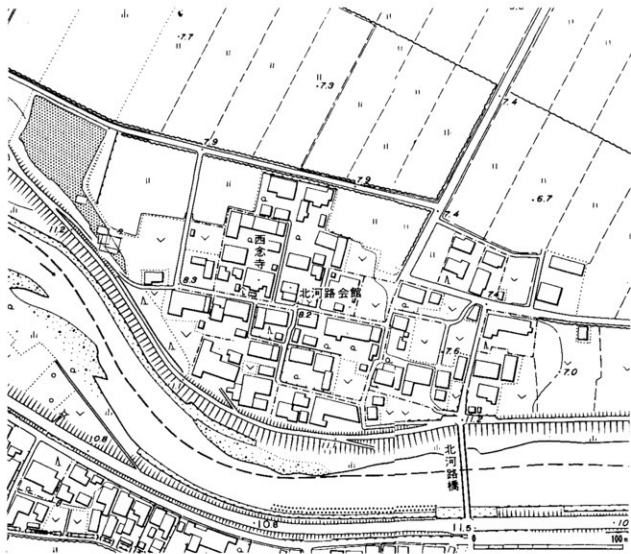
(4) 平安時代末期の集落

B地区では、平安時代末期の掘立柱建物5棟、柱列2条、井戸1基が確認された。調査区が狭小なために掘立柱建物は、規模の確定できないものも多く、多くのピットの存在からさらに掘立柱建物の存在が推定される。したがって建物群の変遷を具体的に述べることは困難であるが、以下に簡単に触れることにしたい。

掘立柱建物は柱掘形も小さく、総柱形態のものが大半を占め、これに伴う遺物からも平安時代末期を中心とする遺構と考えられる。規模からは、5間前後の大形建物(SB15・16)と、桁行3間程度の小形建物(SB12・13・14)に分けられる。前者は調査区の東部で建替えられている。SB15にはいわゆる南東隅上土が付属する可能性が高く、主屋に相当するものであろう。後者は中央部から西部に分布す

る。副屋・納屋などの付属建物と考えられるSB12・13は同一規格の建物でありながら、一方は1×2間程度の土坑を伴い、一方は伴わない。柱列はSA12がSB13に、SA11がSB15に平行し、それぞれに伴うと考えられる。また、A地区で検出されたSA5・6も小規模な柱掘形から、末期を中心とする東部の遺構群に含まれる可能性もある。

ところで、建物群の棟方向は、A地区の建物群より真東西に近いE7~17°Sを示す。これは、調査区の東方に位置する現在の北河路集落内の区画方向とおおむね一致し、調査区の南側を東流する安濃川の形成した自然堤防の方向性に準拠あるいは規制されたものと考えられる。現在の北河路集落の成立は明らかでないが、平安時代末期には現地割りりが成立していた可能性が高い。



第70図 北河路集落関係図 (1:2,500)

【註】

- (1) 田中秀和『大城遺跡発掘調査報告』（安濃町教育委員会 1988年）。
- (2) 山田猛『前田遺跡』（昭和57年度農業基礎整備事業地域域蔵文化財発掘調査報告）三重県教育委員会 1983年）。
- (3) 谷本悦次『高松弥生墳丘墓』（津市文化財保存協会 1970年）。
- (4) 谷本悦次『大・熊遺跡』（近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告1）三重県文化財選定 1973年）。
- (5) 久志本誠也『安濃郡西部における東室溝及び古道と思われる遺構について』（『東室溝研究』第4号 東室溝研究会 1988年）。
- (6) 岸見秀雄・巻雲・安濃・一志の東室溝』（『伊勢湾沿岸地域の古代系集刊』1979年）。
- (7) 足利隆寛『平安京から伊勢宮へへの古代の道』（『探訪 古代の道』第2巻 法蔵館 1988年）。
岡田登『伊勢国市村駅所在地考』（『皇學館論叢』第13巻第6号 1980年）。
- (8) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「六日大遺跡」（『一般国道23号 中勢道埋蔵文化財発掘調査概報III』1981年）。
- (9) 弥生時代後期から古墳時代の土器に関しては、山田猛氏の区分を参考にした（山田猛『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年）。
- (10) 三重県考古学調査事務所『高宮跡の土師器』（『三重県考古学調査事務所年報 1984 史跡高宮跡発掘調査概報』1984年）。
- (11) 反柿陶器の編年・年代に関しては、高森孝正氏の編年を参考にした。（『東海地方の地陶器生産一兼設楽を中心に』『古代の土器研究会 第3回シンポジウム 古代の土器研究—律令の土器様式の西京3』古代の土器研究会 1994年）。
- (12) 熊輪陶器の編年に関しては、藤原良祐氏の編年を参考にした。（『瀬戸古窯跡群1』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1』1982年）。
- (13) 横田賢次郎・森田勉『太宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—』（九州歴史資料館研究論叢1）1980年）。
- (14) 山田猛『方形周溝墓の型式』（『大墳跡』三重県埋蔵文化財センター 1994年）。
- (15) 小玉道明・伊東伴ほか『大谷遺跡発掘調査報告書』、『大谷遺跡発掘調査概報』II・III（四日市市教育委員会 1966年・1976年・1977年）。
- (16) 平成2年、津市教育委員会が発掘調査。
- (17) 昭和58年、津市教育委員会が発掘調査。
- (18) 松阪市教育委員会『草山遺跡発掘調査月報』No.1～10（1982～1985年）。
- (19) 吉木康夫ほか『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ・Ⅱ下之庄東方遺跡』1987年・1988年）。
- (20) 田村陽一・西村修久『上ノ厩内遺跡—一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財調査報告』II（三重県埋蔵文化財センター 1996年）。
- (21) 中野教夫『寺垣内遺跡発掘調査概要』（『第6回三重県埋蔵文化財発掘調査報告会』資料 1988年）。
- (22) 宇野登之『瀬干遺跡』（『瀬干遺跡・綾垣内遺跡・樽辻遺跡・大塚遺跡・北ノ垣内遺跡』三重県埋蔵文化財センター 1990年）。
- (23) 竹内英昭『宮山遺跡』（『東海地方自動車道発掘調査概報III』三重県埋蔵文化財センター 1996年）。
- (24) 岡塚の出土例には奈良県大垣市東町打田遺跡S Z02がある。前方後方形周溝墓の周溝底から、丁字加工を施した舟着した石臼が出土している。（鈴木完『東町打田遺跡出土の「石臼」について』『美濃の考古学』創刊号 1996年）。
- (25) 松田寿男『丹生の研究—歴史地理学から見た日本の水脈—』（早稲田大学出版部 1974年）。
- (26) 栗貫次『縄文時代の赤色顔料III 伊勢における開発をめぐる—』（『考古学ジャーナル』No.438 1998年）。
- (27) 石川隆郎・福田哲也『阿形遺跡』（『ヒタキ庵寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター 1992年）。
- (28) 三重県埋蔵文化財センター『三重県埋蔵文化財センター年報』8 1997年）。
- (29) 北条芳隆『春日橋川における朱と石臼』（『長法寺南原古墳』大塚大学南原古墳調査団 1992年）。
- (30) 弥生時代の埴井墓には、鳥根県出雲市西谷3号墳・鳥根県安来市安養寺1号墳・福井県水町小羽山30号墳などがある。
- (31) 千葉県木更津市鳥越古墳例がある。（朝山林蔵『木更津市鳥越古墳の調査』『考古学ジャーナル』No.171 1980年）。
- (32) 近江俊秀『古代道路遺構の形態からみたその性格』（『古代交通史研究』第7号 古代交通史研究会 1997年）。
- (33) 『吉訂増補 故実叢書』2巻12。
- (34) 『増補 史料大系』5。
- (35) 本木善康『古代伝路の復元と問題点』（『古代交通史研究』第7号 1997年）。
- (36) 『東室遺文』上 322頁。
- (37) 中村信祐『浄土寺遺跡』（『昭和55年国営公園整備事業地域域蔵文化財調査報告』三重県教育委員会 1981年）。
- (38) 前掲註7 足利1988。
- (39) 前掲註7 岡田1990。
- (40) 中森成行『郡山遺跡群発掘調査報告1』（鈴鹿市教育委員会 1983年）。
- (41) 前掲註5。
- (42) 木下良『古代交通研究の諸問題』（『古代交通史研究』創刊号 古代交通史研究会 1992年）。
- (43) 杉谷正徳『古代官道と高宮跡について』（『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997年）。
- (44) その他『史跡 高宮跡調査概報』多数あり
- (45) 中村太一『第4章 律令国家の領域編成と計画道路』（『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館 1996年）。
- (46) 『新訂増補 国史大系』第32巻。
- (47) 『新書類聚』第1輯。
- (48) 浄土寺南遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代の集落が検出されており、その方位は、安濃川流域にみられる東室プランの方向に合致している。少なくともこの時期には埴井地割りも施工されていたものと考えられる。
- (49) 前掲註35。
- (50) 広瀬和雄・鏡内の古代東落』（『国立歴史民族博物館研究報告』第22巻 1980年）。
- (51) 大川勝宏『高宮跡の地陶器』（『古代の土器研究—律令の土器様式の西京・東3 地陶器』古代の土器研究会 1994年）。
- (52) 前掲註8。
- (53) 泉雄二『新編川北部の調査』（『伊賀国跡跡（第4次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化センター 1982年）。
- (54) 以下は、平尾政幸氏はじめ古代の土器研究会の議氏の調査見所による。
- (55) 三重県考古学調査事務所『第54次調査』（『三重県考古学調査事務所年報 史跡高宮跡発掘調査概報』1980年）。
- (56) 三重県考古学調査事務所『第44次調査』（『三重県考古学調査事務所年報 史跡高宮跡発掘調査概報』1982年）。
- (57) 高宮歴史博物館で筆者発見。
- (58) 前掲註51。
- (59) 佐藤幸三『正倉院の歴史』（『日本の美術』第104号 至文堂 1978年）。
- (60) 横田賢次郎氏のご教示による。
大塚初重『総論—考古学からみたあそびと芸術』（『考古学による日本歴史』雄山閣 1998年）。
- (61) 山田信次『コラム あそびの世界』（『考古学による日本歴史』雄山閣 1998年）。
- (62) 吉田孝大『日本の歴史3 古代国家の歩み』（小学館 1989年）。
- (63) 平尾政幸氏のご教示による。
- (64) 防府市教育委員会『防府国府第88・91次発掘調査概要』1996年。
- (65) 兵庫県教育委員会『小大丸遺跡1』1987年。
- (66) 兵庫県立博物館・朝日新聞社『大和王朝の華—都—長安の女たち』展示図録 1996年。
- (67) 竹内正樹・森原義徳『藤原京京京三条三坊（綱手町）』（『かしまらの歴史を探る5 平成8年度埋蔵文化財調査報告』藤原市千原資料館 1997年）。
- (68) 湯山源喜尚ほか『国見山跡発掘調査報告』（北上市教育委員会 1991年）。
- (69) 金田章裕『第4章 古代・中世の村落形態とその変遷』（『集里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985年）。
- (70) 前掲註49。
- (71) 小坂直広氏のご教示による。
- (72) 青木哲也氏のご教示による。



位田遺跡周辺航空写真（橋本米軍撮影）



A・B地区全景（飛鳥時代以降、垂直）



調査区遠景（北から）



調査区遠景（西から）



古墳時代遺構全景（西から）



飛鳥時代以降遺構全景（西から）



河道・方形周溝墓群（東から）

P L 6



SD 1 (西から)



SD 1 土層断面 (南から)



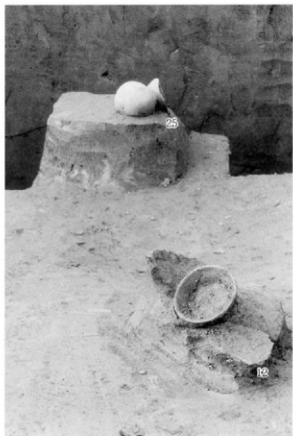
SD 1 遺物出土状況 (東から)



SD 1 遺物出土状況 (南から)

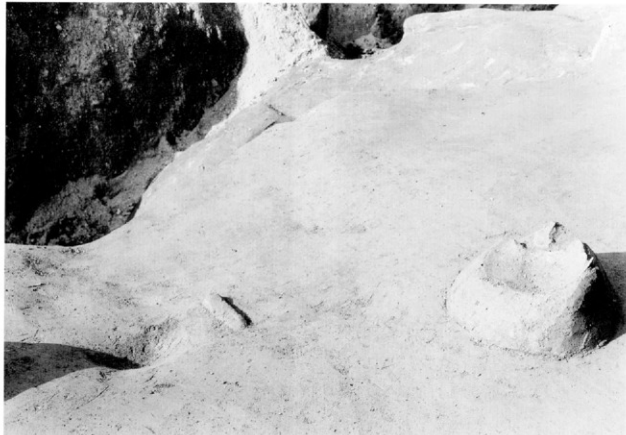


SD 1 遺物出土状況 (東から)



SD 1 遺物出土状況 (東から)

PL 8



S F 1 (東から)



S X 1 (東から)



S X 4 (北から)

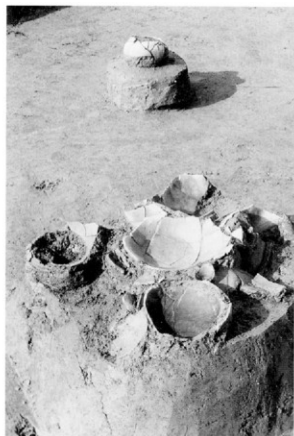


S X 5 (北から)

P L 10



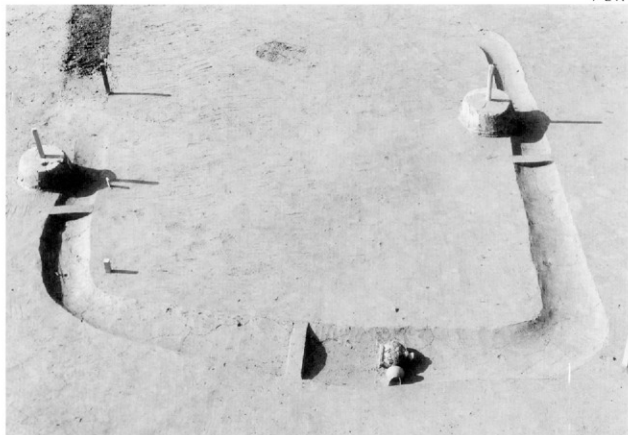
S X 2 (北から)



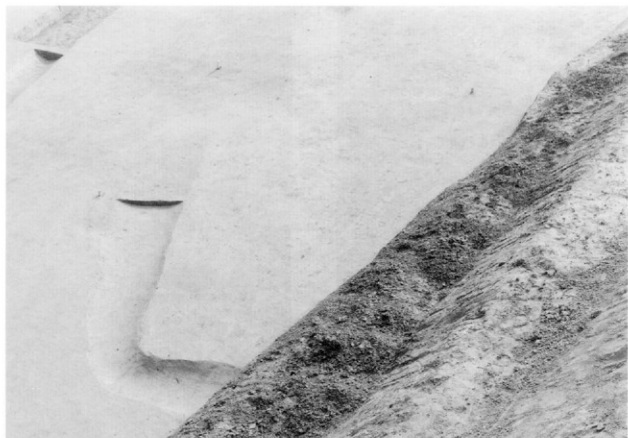
S X 2 遺物出土状況 (東から)



S X 3 遺物出土状況 (北から)



S X 3 (北から)



S X 7 (西から)



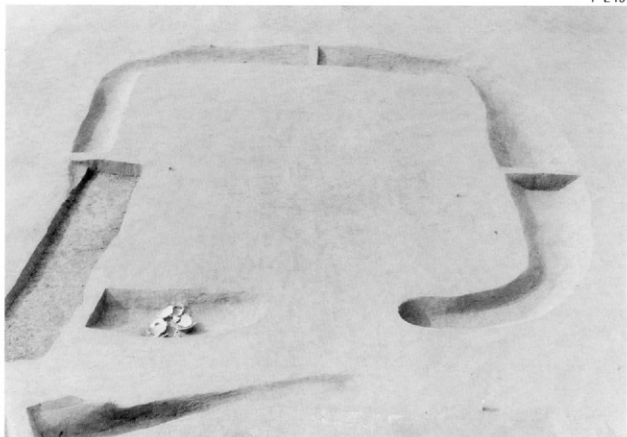
S X 6 (南から)



S X 6 遺物出土状況 (東から)



S X 8 遺物出土状況 (東から)



S X 8 (東から)



S X 10 (北から)



S R 1 (西から)



SR1 (東から)



SR2 (東から)

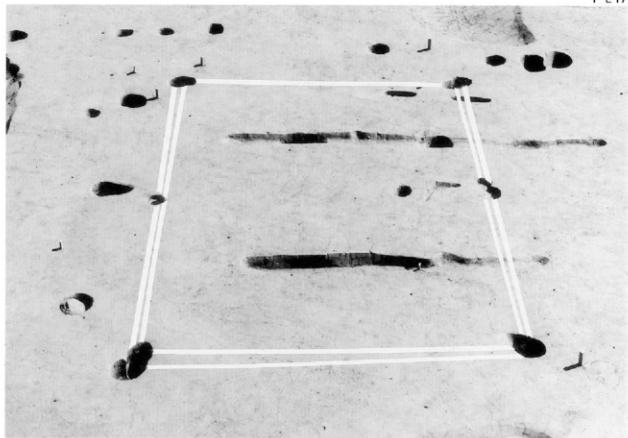
P L 16



掘立柱建物群全景（北から）



S B 1（西から）



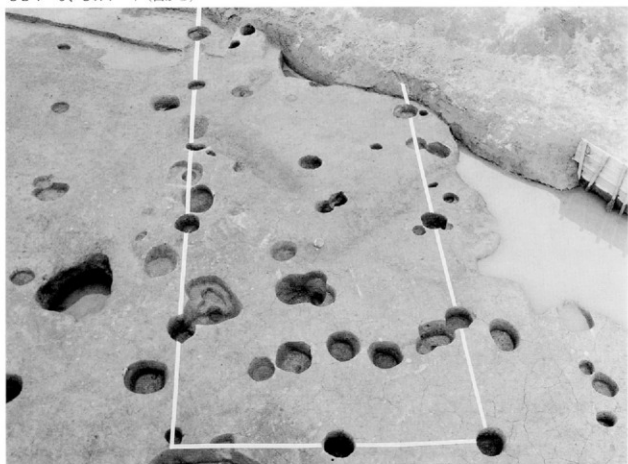
SB2・3、SR3 (西から)



SB3 遺物出土状況 (南から)



SB4~6、SA1~4 (西から)



SB6 (北から)



SB 5 (北から)



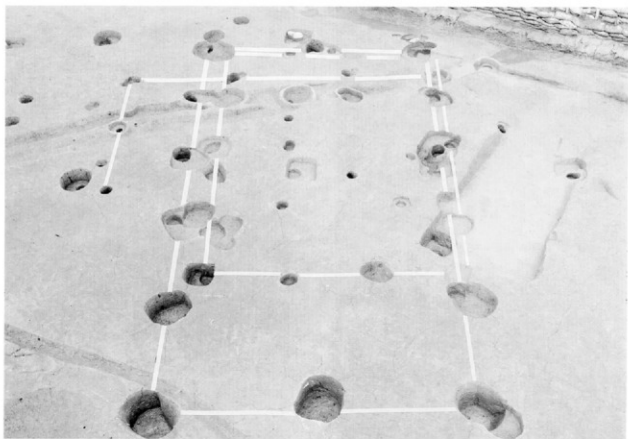
SA 1・2 (西から)



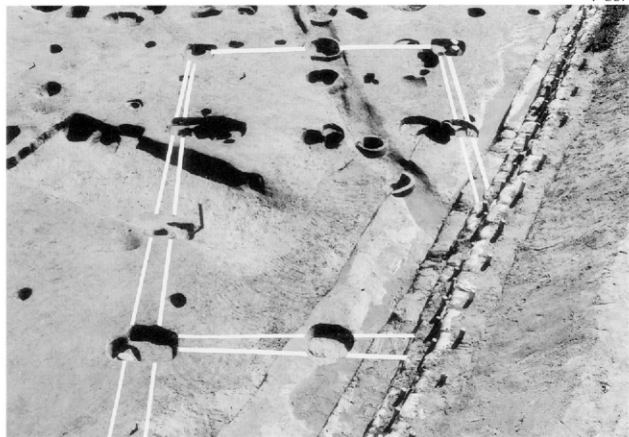
SA 3・4 (北から)



SB7~II, SA5・6 (西から)



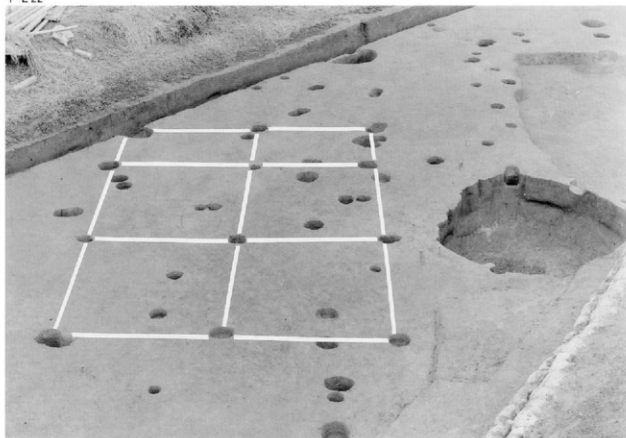
SB10・II, SA6 (北から)



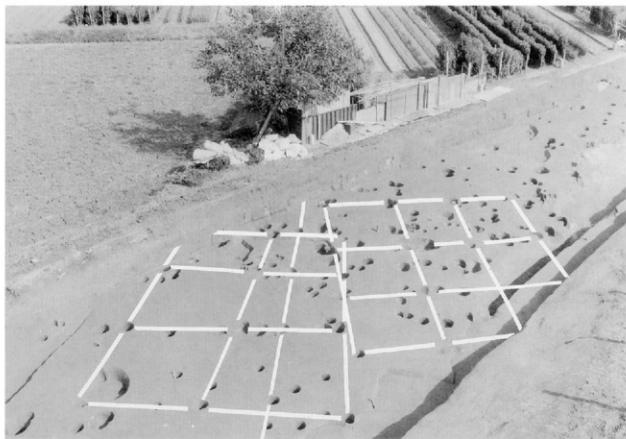
SB 7・8 (西から)



SB 9 (東から)



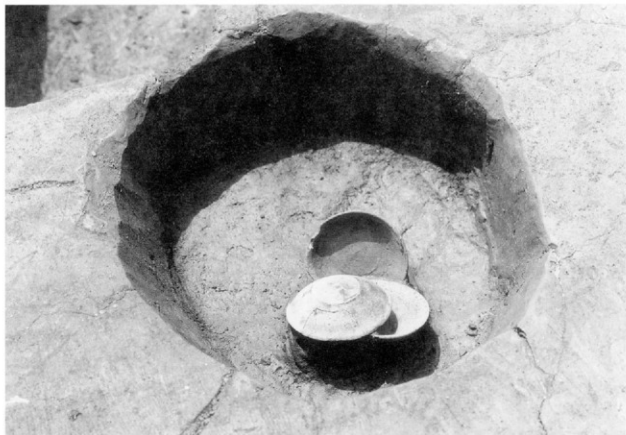
SB12 (西から)



SB13・14, SA11 (西から)



SB15・16 (西から)

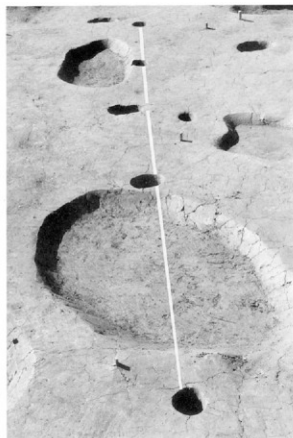


SB16遺物出土状況 (北から)

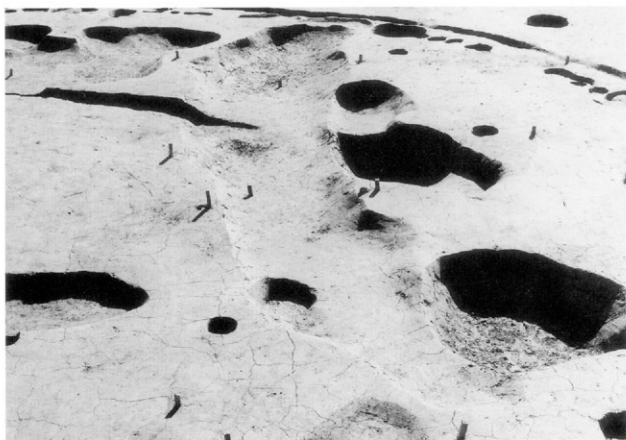
PL24



SA 9・10 (東から)



SA 8 (東から)



SD 5 (北から)



SD 4 (東から)

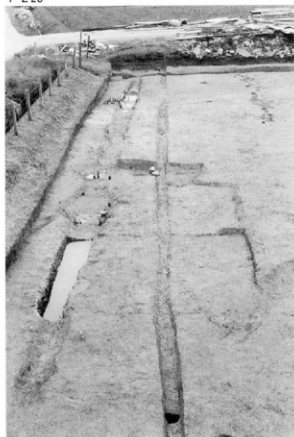


SD 4 基石出土状況 (東から)



SD 4 西部遺物出土状況 (東から)

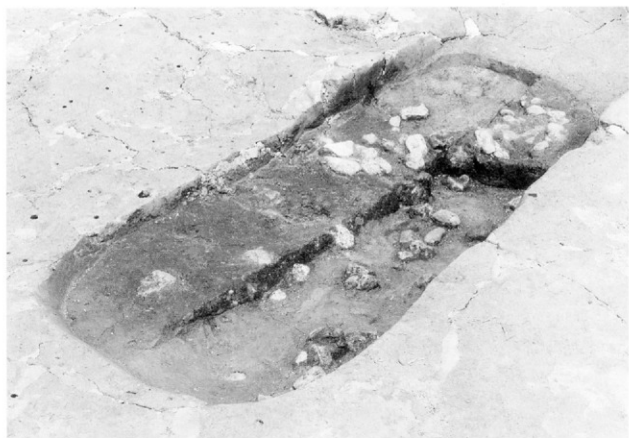
P L26



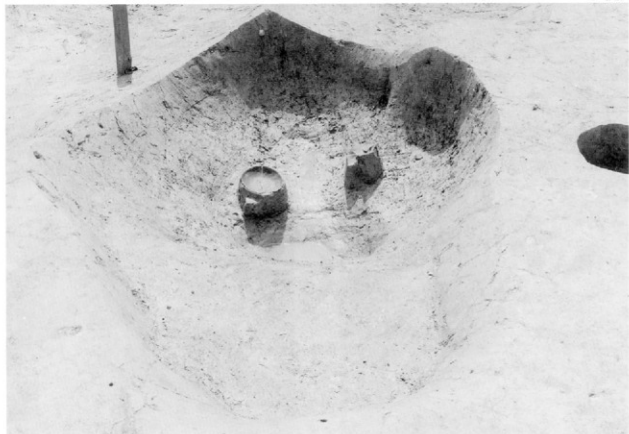
SD 7 (西から)



SK 29 (北から)



SF 4 (東から)



S K 3 遺物出土状況（北から）



S D 6 ・ S A 7 ・ 土坑群（東から）



炭化物集積 (東から)



SDII (西から)



噴砂検出状況 (東から)



噴砂断面 (南から)



C地区全景（北から）



C地区遺物出土状況（南から）



C地区遺物出土状況（西から）





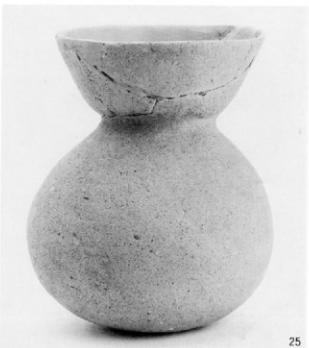
12



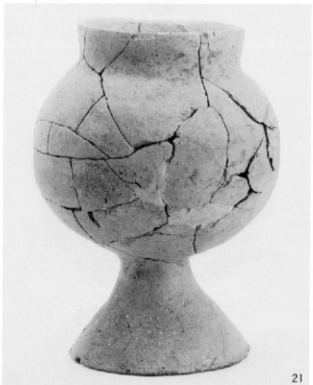
24



23



25



21



28



32



49



36



56



43



57



48



54



69



65



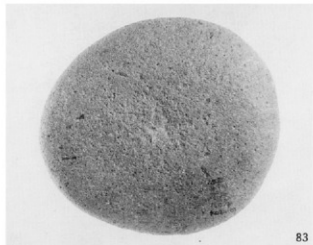
84



66



80

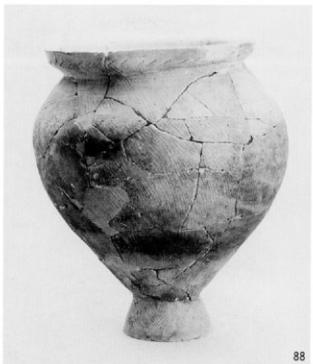
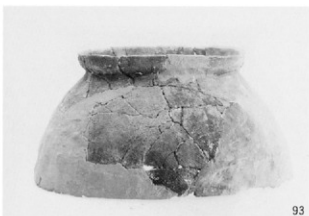


83



76

S D I 出土遺物 4 · S F I 出土遺物



方形周溝墓出土遺物 I



94



99



91



98

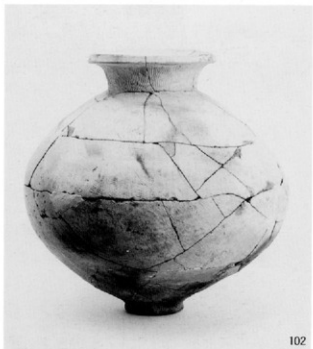
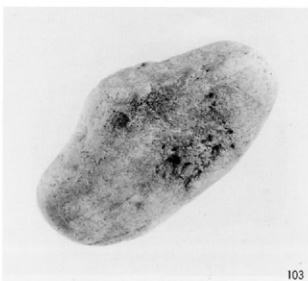


92

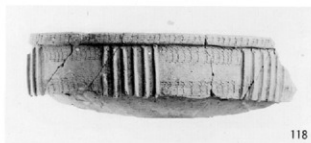


97

方形周溝墓出土遺物 2



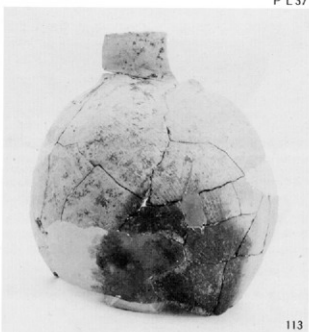
方形周溝墓出土遺物 3



118



110



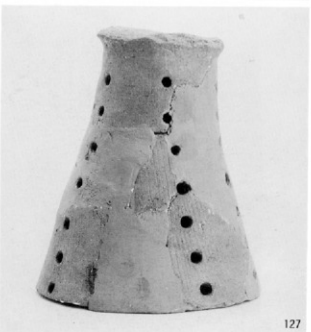
113



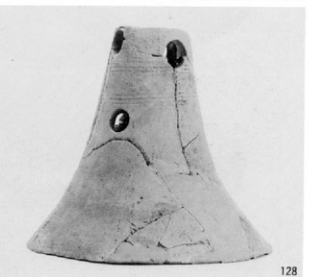
111



126



127



128

下層出土遺物



136



135



138



152



145



149



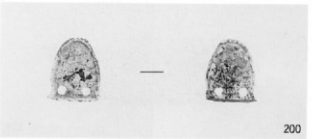
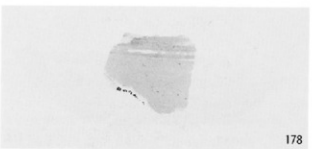
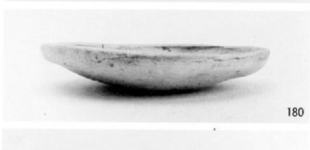
154



151

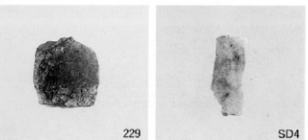
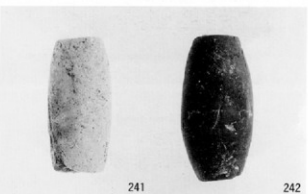
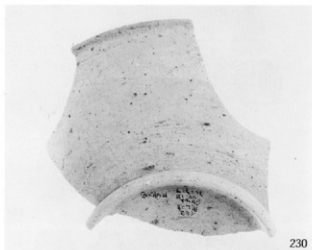


158

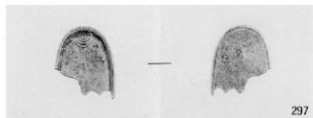
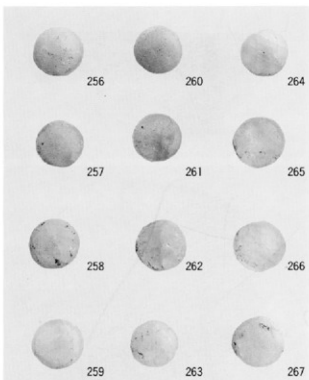
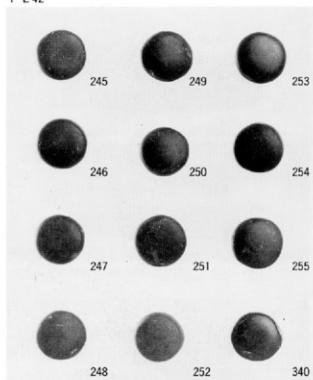


掘立柱建物・井戸出土遺物





SD 4 出土遺物 2



SD 4・溝出土遺物



307



309



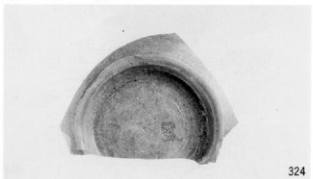
314



318



323



324



308



325



328



332

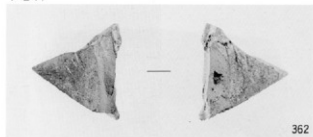


336



337

土坑出土遺物



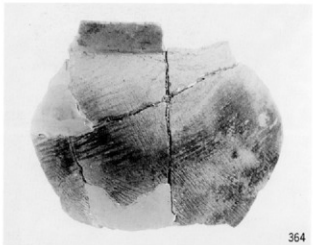
362



357



343



364



372



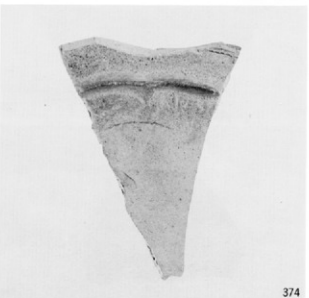
365



371



373



374

ピット・包含層他出土遺物1 (須恵器)



376



375



378



401



384



403



385



404



389

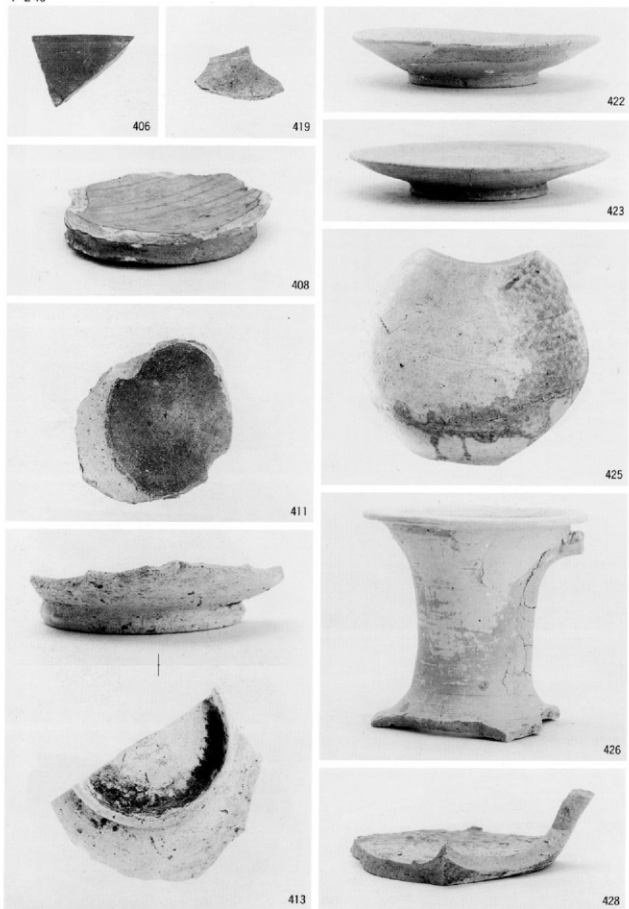


390



405

包含層他出土遺物 2 (土師器・黒色土器)



包含層他出土遺物 3 (灰釉陶器他)



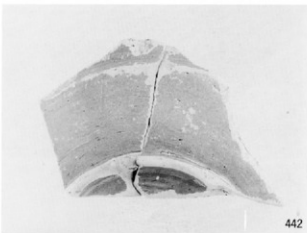
437



441



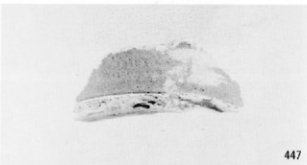
439



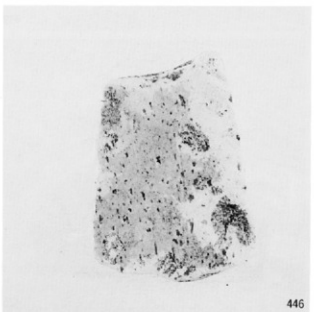
442



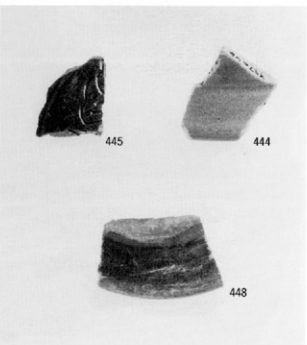
440



447



446

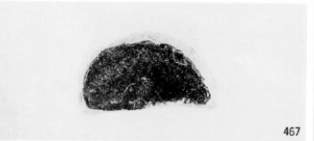
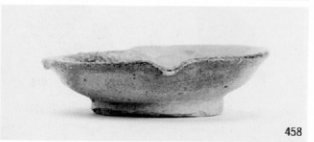
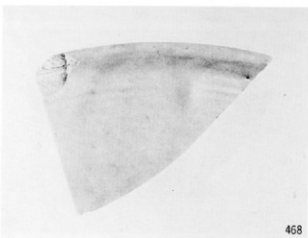


445

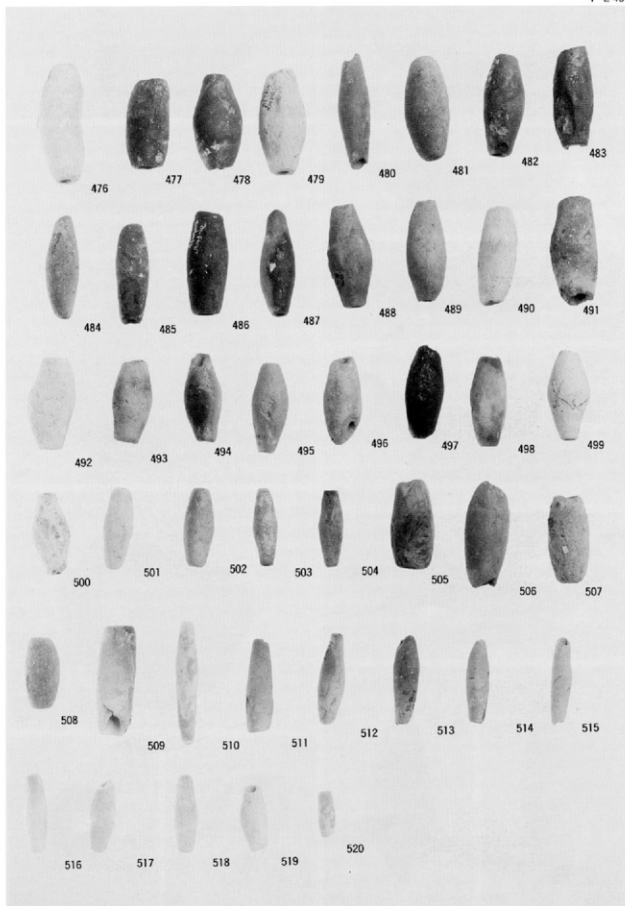
444

448

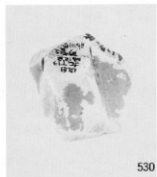
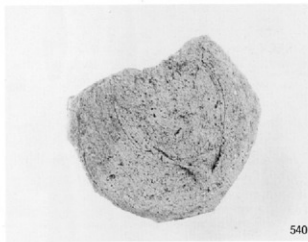
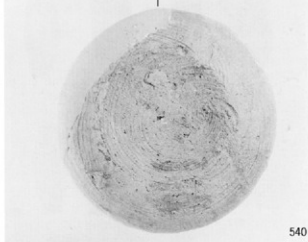
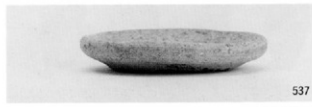
包含層他出土遺物 4 (緑釉陶器)



包含層他出土遺物 5 (無釉陶器他)



包含層他出土遺物 6 (土鏟)



C地区他出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどう こうちゅうせいどうろけんせつじぎょう ともな いんでんいせきはくつちょうさほうこく							
書名	一般国道23号中勢道路建設事業に伴う 位田遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	115-12							
編著者名	米山浩之							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 T E L 0596(52)7031							
発行年月日	1999年3月23日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ° °	° ° °			
位田遺跡	三重県津市 北河路町 字木ノ下	24201	758	34度 43分 18秒	136度 26分 06秒	19960627 ～ 19970214	4,600	一般国道23号中勢道路(10工区)建設事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
位田遺跡	墓	弥生時代末～古墳時代初頭	方形周溝墓 河道 炉	弥生土器・古式土師器 朱附着石皿・擦石		欠山式期の方形周溝墓群一辺の中央に陸橋部をもつものが2基ある		
	集落跡	飛鳥・奈良時代	道路	土師器・須恵器		幅約2丈の幹道と幅約1丈の支道		
	集落跡	平安時代 中期～後期 平安時代末期	掘立柱建物 柱列・垣根状遺構 井戸 区画・溝 掘立柱建物 柱列	土師器・灰釉陶器・ 緑釉陶器・磁器・漆 附着土器・基石 土師器・無釉陶器 瓦器・清郷型鍋		官衙風配置の屋敷地、 富豪層の居館か 隣接する現集落と同一地割り		
	—	不明	噴砂・河道	土師器		旧安濃川本流		

平成 11(1999) 年 3 月に刊行されたものをもとに
平成 19(2007) 年 5 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告115-12
一般国道23号中勢道路建設事業に伴う
位田遺跡発掘調査報告

1999年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷者 第一プリント社
